川柳塔

平成十五年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九一一号

日川協加盟

No. 911

四月号

第27回 全日本川柳2003年香川大会

日時　平成十五年六月十五日(日)　午前十時開場
会場　マツノイ・パレス（クリスタルホール）
〒761-8021　香川県香川郡香川町川東下一八七八
TEL　〇八七（八七九）三四一一
交通機関　JR高松駅から車で30分・高松空港より車で5分
当日送迎バス運行予定
宿題　第一部（事前投句、四月十五日締切）
「橋」田中　新一　選　「瞳（ひとみ）」鈴木　国松　選
「うどん」奥田みつ子　選　「平　野」植木　利衛　選
ジュニア部門（小・中・高校生）
「橋」松岡恵美子　選　「瞳（ひとみ）」定本　広文　選
「うどん」石川　三昌　選　「平　野」若草はじめ　選
3.5×18cmの句箋一枚に一句宛記入・各題二句・無記名、封筒に住所・氏名明記、投句料一、〇〇〇円（定額小為替・現金書留）同封して左記宛郵送のこと。ジュニア部門は投句料無料
投句先　〒530-0001　大阪市北区天神橋二丁目北一一一
ステップイン南森町七〇二
㈳全日本川柳協会　宛
TEL　〇六（六三五二）二二一〇　FAX　〇六（六三五二）二四三三
郵便振替口座　〇〇九七〇―九―三五七五
宿題　第二部（当日投句、十一時二十分締切）
「公　園」吉岡　茂緒　選　「休　む」佐藤　美文　選
「宝」福岡　竜雄　選
各題二句当日配布の句箋に記入
第二次選者　吉岡　龍城・今川　乱魚・礒野いさむ
竹本瓢太郎・大木　俊秀
会費　四、〇〇〇円（昼食、記念品含む）
表彰（予定）文部科学大臣奨励賞・参議院議長賞　他

＊

㈳全日本川柳協会大会委員長　礒野いさむ
全日本川柳香川大会実行委員長　吹田　朝児
TEL・FAX　〇八七（八九八）一一七七

＜前夜祭ご案内＞

前夜祭　平成十五年六月十四日(土)　午後六時～
会場　マツノイ・パレス（さぬきの間）
〒761-8021　香川県香川郡香川町川東下一八七八
TEL　〇八七（八七九）三四一一
会費　八、〇〇〇円（会費・アトラクション）
問い合わせ先（大会・前夜祭）四月十五日締切
〒761-8076　香川県高松市仏生山町甲二五二四―一
村尾孝峰　方　日川協香川大会事務局　宛
TEL・FAX　〇八七（八八九）三三八五
送金先　郵便振替口座番号　〇一六七〇―九―一〇二六〇
（会計担当）谷口　幹男

＜宿泊・観光ご案内＞

宿泊　マツノイ・パレス・空港グランドホテル　他
宿泊料金・一泊朝食付・税込み　六、〇〇〇～九、〇〇〇円
一名一室希望の方はその旨記入して下さい。
観光　①屋島コース　屋島・四国村・栗林公園観光
六月十四日(土)　十一時～十七時十分　六、八〇〇円
②琴平コース　うどん学校体験・こんぴらさん参拝
六月十四日(土)　十一時～十七時十五分　七、五〇〇円
③琴平（泊）コース　こんぴらさん・善通寺参拝
六月十五日～十六日　一二、〇〇〇円
（大会終了後から翌日十四時五十分高松駅着）
その他、小豆島コース（泊）があります。
最小随行人数二〇名とし、それ以下の場合は料金変更があります。
宿泊、観光の申し込み締切は四月十五日必着です。
別紙申込書に内容記入の上、合計金額を直接旅行社へご入金下さい。
送金先　UFJ銀行　千代田支店　普通　5464512
㈱ジェイティービー　高松支店

与謝野晶子と歌碑

河内天笑

情熱の歌人晶子は明治十一年十二月七日、菓子商駿河屋・鳳宗七の三女に生まれ、鳳しようといいました。堺女学校卒業後、家事を手伝いながら『よしあし草』という文学誌に歌を発表していました。

明治三十三年四月に、与謝野鉄幹が中心になり、新詩社が作られ『明星』が創刊されました。晶子は同人となり『明星』の二号に歌を六首発表、鉄幹は晶子の歌の素晴らしさを認めたということです。同年八月に晶子は大阪で鉄幹に会い、高師の浜での歌の会に出席しています。その後、晶子は鉄幹、山川登美子と三人で住吉や京都に遊び、数多くの歌をつくるようになりました。鉄幹と度々手紙のやりとりをするうち恋愛感情が深まり翌年六月、生家の人々の反対をおし切り単身上京、鉄幹の家に入りました。鉄幹には妻子がありましたが九月に離婚、十月に晶子と鉄幹は結婚しました。晶子は上京後二か月たった八月に歌集『みだれ髪』を発表、有名になりました。

明治三十七年九月、日露戦争にいった弟を心配して「君死にたもうことなかれ」を明星に発表。明治の世でこれほど思い切って歌うのは、よほどの勇気がいることです。非国民だとあざけられましたが、晶子は「ひらきぶみ」という文を書き、「ほんとうの心を、ほんとうの声をだして歌うのが詩であって、私は後の人々に笑われないようにしようと思います」と言って世間に負けませんでした。

はじめの歌集『みだれ髪』から最後の歌集『白桜集』まで、明治、大正、昭和にかけて数万首の歌をつくり、英語、フランス語、イタリア語、中国語などに訳されています。また鉄幹・晶子の新詩社からは、石川啄木、北原白秋、高村光太郎、吉井勇、岡本かの子、佐藤春夫、堀口大学らすぐれた歌人や詩人が出ています。

一方、家庭では貧しさとたたかいながら、五男六女を立派に育てあげています。このエネルギーと強い気持には、中世堺商人の血が流れていたのでしょう。

昭和十七年五月二十九日、晶子は東京の自宅で死去、六十五才でした。

鳥取砂丘や高野山そして京都など全国に晶子の歌碑がありますが、生誕の地堺にはありませんでした。故郷を捨てて鉄幹のもとへ行ったからでしょう。郷土の生んだ偉大な歌人を称えるため堺市は

海恋し潮の遠鳴りかぞえつつ
少女となりし父母の家

の歌碑を生家跡に没後二十年（昭和三十六年）にして建立しました。

昭和三十七年、堺の歌人たちが中心となり晶子の会がつくられ、堺に三つの歌碑が建てられています。鉄幹の歌の会に初めて参加した高師の浜（現・浜寺公園）、生家の約一キロ北東にある「北のごぼうさん」と覚応寺です。毎年五月二十九日の白桜忌には歌人たちは覚応寺に集います。

晶子の歌碑はその後、母校（現泉陽高校）に、そして市立堺図書館前にと続々建立されています。

座右の句
真心をあげて淋しくなりました　（薫風）

私の句
春を待つだんだん軽くなる心　牧野芳光

川柳塔　四月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　与謝野晶子と歌碑……河内天笑……（1）
雨　男……都倉求芽……（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選……（4）
自選集……（51）
水煙抄……奥田みつ子選……（56）
麻生路郎物語（16）……東野大八……（80）
愛染帖……波多野五楽庵選……（83）
誹風柳多留二四篇研究　53……（86）
茴香の花……政岡日枝子選……（88）
「迷　う」……宮川珠笑選……（90）
一路集「ジョーク」……中村金祥選……（90）
「　噂　」……片岡智恵子選……（91）

雨　男

都倉求芽

昨年の秋、京都塔の会は第四十九回吟行句会を催しました。それまでは概ね京都市内や近郊を中心にしておりましたが、一度マンネリを避けるためにと、考えて北山の奥深く大森まで足を伸ばしました。

当日は前の晩から雨が降っていましたが予報では午後は晴れる、というのがとうとう終日やみませんでした。西田柳宏子さんが当日雑感の一句で

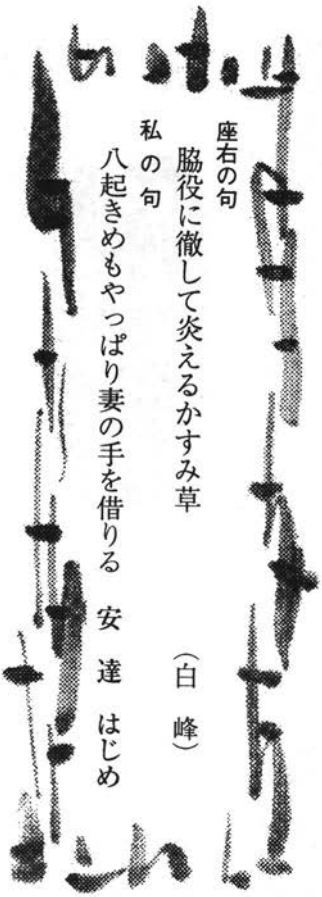
雨男誰やろ紅葉濡れている

と詠んでおられますがその憎まれ役の雨男、実は私なんです。

川柳塔には名だたる雨男が幾人かおられますが、私もまあそこそこの番付にのりそうです。若い時からその兆候は表れていて、現役の頃のレクリエーションでは私の班に入るのをみんな嫌っていました。（年中無休の職場だから数班に分かれて行きます）。

十和田湖ではそれるはずの台風が直撃、旅館に釘付け。栗駒山では豪雨。大台が原でも初日は濃霧でまずまずだったのが、翌日はや

初歩教室「もっと」……三宅保州…(92)
同人特集　嘘百句……(96)
秀句鑑賞「同人吟……西谷大吾…(94)
　　「水煙抄……丹下美津子…(99)
三月本社句会……(100)
追悼　石原靖巳さん……太田　昭…(104)
「金太ぁ」の呼名が今も……岩佐ダン吉…(105)
山門幸夫さんを悼む……仁部四郎…(106)
各地柳壇（佳句地十選／板東倫子）……(107)
柳界展望……(123)
四月各地句会案内……(124)
■編集後記……楓楽・希久子…(126)



座右の句

脇役に徹して炎えるかすみ草　（白峰）

私の句

八起きめもやっぱり妻の手を借りる　安達はじめ

っぱり豪雨。大杉渓谷へまわる予定だったが山小屋の主人に頼むから中止してくれと言われて観念。宿のノートに日の出の感激などが書いてあるのを見てただ恨めしや。種子島、屋久島では朝から龍巻が発生、その後やっぱり雨。屋久島へ行って屋久杉を見ず。もっとも林芙美子の浮雲によれば、月のうち三十五日は雨という所。飛んで火に入るなんとやら。

日光では珍しく快晴だったのに、午後になると一天俄かにかき曇り凄い夕立、雷鳴は続く。転げ込んだ旅館のテレビ、「今日は全国的に快晴に恵まれましたが、関東北西部で一部夕立がありました」。

しかしこれ雨男でまだ助かっているのです。もし雪男だったらヒマラヤの奥地に本籍も現住所も変更されそうです。

けれど家内は絶対晴れ女。昭和三十四年三月十二、十三、十四日。新婚旅行は伊豆半島、箱根のコース。初日から帰るまで富士のお山はすっきり全身を現わして歓迎してくれました。以後、家内との旅なら必ず晴れ。と、ここまで書いて突然心配になってきました。

今年、五月には吟行五十回記念にはじめて一泊句会を計画しておりますが、これを読んで参加者激減？…。いえいえ御精進のよい皆様のお力で是非是非奇跡をおこしてください。

お願いいたします。（122頁案内掲載）

川柳塔

河内天笑選

八尾市　宮崎　シマ子

生涯の伴侶を直感で決める
妻がにんまり笑うと意地悪が動く
マグロよりチリメンジャコをよく食べる
脱走兵のように私の白髪抜け
杉花粉舞うて敗北するヒト科
呼ばれたらハイと答える声が好き

富山市　舟渡　杏花

嘘にうそ重ね一日逃げのびる
のど仏きれいに男たべつくす
えんぴつの遺書ひっそりと男の死
好奇心に火がつく余生の春あらし
火を消せばふつふつ沸いてくる未練
どうしょうもない男を奪い合っている

寝屋川市　江口　度

おいてけぼりにならない内に木を降りる
坊さんと親しい医者にかからない
老妻のいびき貫禄ついてくる
目白見たくて庭の木にみかん刺す
相槌を静かにうたれ負けている
雑踏や味方に飢えた顔ばかり

大阪市　板東　倫子

王道を歩めと神の声がする
聖書には敵を殺せと書いてない
青い星と呼ばれた地球痛ましい
家族愛をタイムスリップして探す
若者に席譲られた他生の縁
じんわりと渇き潤すひとり酒

宝塚市　嵯峨根　保子

まだ耳に金太とひびく菜の花忌
二ン月をポンと蹴上げて春へ行く
三寒四温　年金つつがなく入る
添加物気にせず三食がうまい
さらさらと掬うて遊ぶ古稀の恋
羊より恋をかぞえて眠るべし

東大阪市　谷口　義

二人目は中山さんに行かぬまま
二番まで歌えるうたは一つだけ
マスクして大きなことは考えず
この皺がないと迫力にはかける
整形をするとにこにこ笑えない
集中力それが一番かけている

生駒市　飛永　ふりこ

アイゼンの底蹲る恐さあり
能楽が聞こえるような大和路よ
雪見酒窪んだ隙間浸みわたる
ふらふらと煩悩の道蹠いてる
背中にはしょっぱい涙溜めてある
情報がマウスの中に傾れ込み

米子市　野坂　なみ

九条が権威に弱くなる恐怖
忌を重ねそして私も日暮れ道
ゆたかな森はきっと魚の故里だ
インターホン覗きの窓とお留守番
二重カーテン窓よおしゃれをして上げる
星の瞳になってグリムに逢いにゆく

広島県　藤解　静風

コロンビアもひとも老朽化がすすむ
主の訃を知らずさくらは咲くだろう
仏壇を入れると温い部屋になり
年金は医者に貢いで生きてゆく
静脈に負けず嫌いの血が流れ
言い訳のきらいな父の帽子掛け

羽曳野市　安芸田　泰子

夢いくつ叶えただろう絵馬の数
口止めをする話には嘘がある
ほほ笑みの底にマグマが潜んでる
自惚れに後押しされてしゃしゃり出る
後悔が記憶の底で澱んでる
曖昧な答の中にある打算

青森県　西谷　大吾

岩木嶺を一気に春がよじ登る
雪崩音聞いて旅立つ雪おんな
じょんがらを唄えば芽吹く林檎園
頬被り脱げば地蔵も春の人
腰曲げて母は一途に麦を踏む
母の掌にひっそりと咲く蕎麦の花

砂川市　大橋　政良

一病息災これで済んだらありがたい
バラの棘一歩も引かぬ自負を持ち
なぐさめの言葉聞いてる暇がない
肚の中読んだつもりが読まれてた
父の背を出世のジャンプ台にする
勇退の椅子矢印の先にある

倉敷市　井上富子

お野菜が一番好きな長寿箸
メールならさらりと言える胸の内
私には私のリズム腹時計
道楽息子に勘当という薬
一人では元に戻せぬ大自然

竹原市　三宅不朽

久しぶり足跡を見る雪達磨
男には男の鬼が棲む鏡
湧き水へ歩幅を伸ばす誕生日
ならべては噛む五色豆だれも来ず
世話好きのまた年金の枠を出る

竹原市　小島蘭幸

遅刻しました言い訳はいたしません
羊よ羊やさしい顔はせんことだ
テレビよりラジオが面白いひとり
黙って咲いて黙って散ってゆくことに
ゴジラマツイが火を吹く春を待っている

竹原市　森井菁居

愛ひとすじ脇見運転などしない
人脈の縁を大事にして生きる
妙案は即実行のほかは無し
ろう梅が見守る中の服喪中
利回りを焦りすってけてんになる

広島県　福島万年

わが町に強盗が出る猪が出る
仁王様の足に踏まれている私
チンジャラジャあっという間の至福かな
増築もお墓もできたさあ遊ぼ
宝くじ当たらないから買い続け

熊本市　永田俊子

無意識にかけ声かけてふと哀し
無口同士鳩が話題をつれてくる
おしゃれは武器ブランド品に殺到し
女恐ろし万能鋏持っている
悔いひとつ小匙でつぶす冬苺

熊本県　高野宵草

童心に還れる友と流す憂さ
不都合な天気予報はよく当り
笑い声茶毘を待つ間の義理時間
倫理学深めるほどに自己嫌悪
老い二人となりの寝息たのもしや

唐津市　久保正剣

茶柱を死語にする気かティーバッグ
商店街まだらに暗し不況風
発泡酒タバコと書けば揚る凧
傲慢に映像ぶち切るコマーシャル
保釈金積んでる金も黒い金

唐津市　市丸晴翠

グルメには無縁体重だけは増え
引き止める炬燵と別れ豆を撒く
子育ての難所反抗期にかかる
結婚の誓詞ときどきちらつかせ
聴く耳はないと言わせるヘッドホン

唐津市　樋口輝夫

相合傘男の肩は濡れている
お開きと聞いて気になる残り膳
岩田帯締めて妊婦の顔になり
売れっ妓の帯にチップの束がある
退屈な日でも三べん食べている

唐津市　山口高明

欠点はパパ似で長所みんなママ
ブッシュとは気が合いそうな都知事どの
問題は実行するかしないだけ
手解きのゴルフ優しく肩を抱き
お宮では食えぬ宮司の書道塾

東かがわ市　池内かおり

せち辛い明日へ自分駆り立てる
残高ゼロ尻尾振ってもいられない
ありがとう素直に言えて陽が暮れる
生き延びる手立てか友の妥協癖
追い立てるように掃除機従いてくる

東かがわ市　成重放任

突然の客に畑の味みやげ
山鯨今日もあばれる鍋の中
エネルギー蓄え開花待つ牡丹
幸せよ心開ける友の居て
装いをしても写真が歳を告げ

東かがわ市　瀧井勝

ふる里の川思い出に逢いに行く
リハビリに励む未だまだ夢がある
浮き沈み出直し幾度対茶碗
年下が淀みもなしに経を詠む
飢餓の地へ旅に出したいグルメ族

東かがわ市　神保坊太郎

一日は長く一年夢の間に
化け道具仕込む狐に待たされる
言の葉の港にイカリ下ろしてる
薄墨の桜が見たい車椅子
啓蟄が待てず出たがる虫が居り

東かがわ市　清川玲子

大江戸で大もてさぬきかけうどん
若者にまだ負けられぬ鉋くず
口笛を吹けばあの窓開くかしら
帰り道少し迷わす風が吹く
孝行の真似事出来た一戸建て

松山市　古手川　光

健康祈願医者も家族と初詣で
えべっさんも面食いらしい福娘
お日さまに感謝しながら日向ぼこ
乗せられて今年も寿司の丸かぶり
本物の敵は味方の顔でいる

愛媛県　中居善信

谷崎のおんなへいつかのめり込む
小雨降る音きいている闇の夜
割り切れぬもの引きずっている明日も
肌を刺すようでも風は春のもの
毒舌へ笑い転げた事がある

高知市　北川竹萌

湯気たてて隣からくるふかし藷
ブロッコリー穫って隣へおすそ分け
九十でも北の原爆気にかかる
日あし伸び少し気分が弾みだす
お歳暮の残りの二本棚に立つ

黒石市　相馬一花

心電図済むと始まる不整脈
女房も私もポチも中古品
プチ整形すれば美人にすぐなれる
露天風呂女盛りも水着つけ
愛敬と舌で稼いでいるチップ

黒石市　千葉風樹

一日を軽く生きてるカラスたち
しみついた夢がボソボソ愚痴りだす
親友をこっそり笑う足の爪
祖母の掌に遠い日の雪降り積もる
母さんの手荒れが消えて惚けている

弘前市　高瀬霜石

ウサギにはなれず亀にはなりきれず
国会を見てると背中かゆくなる
やっと来た金曜サッと去る土日
右脳でも左脳でもない妻の勘
梅さくらお手々つないで咲く津軽

弘前市　福士慕情

地吹雪をまともに受けた謀反劇
田圃から余った苗は捨てられる
謝ればいいんでしょうと謝らぬ
体制のしんがりにいて風を読む
決裁の判子が並ぶ待ち時間

弘前市　櫻庭順風

八甲田の踏破に挑む晴れやかさ
真っ昼間向きを音痴にする吹雪
払っても払っても雪凍り付く
雪に身を埋めて佇立する兵士
猛吹雪阿鼻叫喚の地獄絵図

神様の答えに飢えている羊
栄転も左遷も同じ駅に立つ
春一番北のカードを解きに来る
咲き初める花の微熱はわが微熱
一歩身を引いて見つけた妥協点

弘前市　高橋岳水

絹の穂を川面に映す猫柳
早足の地虫が這って春陽気
リストラのない蟻がもう稼ぎ出す
太陽を必ず画く子一年生
春の夢ブッシュ　フセイン握手する

弘前市　今　愁女

小止みなく降る雪春を遠ざける
ゴム長がぴったり似合う雪の道
歳のせいにすればストンと楽になる
世間話しながら名前きき洩らす
また老舗消えたが誰も驚かぬ

弘前市　宮崎ヒサ子

初デート　テレビ喫茶の出来た頃
三年も飼えば目高も友になる
医者替えて違う診立てになお迷い
減る年金上がる医療費にも痩せず
新品種今年も菊の夢抱いて

さいたま市　八田敏

孫が来て姪来て新居あたたかし
買物の虫もそろそろ啓蟄か
泣いているタンスの中の着物たち
孫わたしパソコン頭と文字頭
宝石は安くなったが老いた指

東京都　岸野あやめ

如月の風あの友も連れて逝き
逝った人同い年だと知った通夜
道半ば未完の資料抱いたまま
心経の読経に数珠が打ち震え
花の顔干支の羊でまだ六十

東京都　後藤早智

もういいかい春の小川が歌いだす
手荷物を奪い男になりたがる
食べて歩いて減らさない骨密度
犬として生きよと犬に素っ気ない
何年振りかしら五十円拾う

東京都　播本充子

食卓の孤独へ猫のお相伴
百歳の猫の元気に励まされ
寝込んでも家事が気になる苦労性
短絡な評価人格傷つける
過ぎし事多弁を嫌う一周忌

横浜市　清水潮華

横浜市　菊地政勝

悔しくておかしくなった物忘れ
内視鏡楽しいですかお医者さん
平成の子に校庭が広過ぎる
外国の力士に国技支えられ
天皇と同じ病気で気が引ける

横浜市　小野句多留

墓地買って十年近く空けてます
現像に十年前の女が居る
神の眼を盗み命のクローン化
肝臓の機嫌承知で酒の見栄
へそくりに共有権を主張する

横浜市　田中笑子

貸し借りを作ってからの仲違い
言えぬこと抱いて夫婦の茶番劇
嫌なこと丸く見つめて晴れ続く
掛け声をかけて自分を勇気づけ
黙んまりの顔がほぐれる孫の所作

横浜市　保田絹子

ご機嫌の酔いに本音が聞ける頃
診察が終わり痛みが本格化
新老人夢と感性衰えず
少食といい大層な食べっぷり
どことなく亡父似の彼を許してる

富山市　島ひかる

立春に仏と分けるさくら餅
恙無く今朝も並んだ夫婦碗
回覧板　一泊二日好きらしい
二〇〇三年未来に生きていたアトム
ウイルスに人も機械も侵される

静岡市　安本晃授

病む床で喜怒哀楽が消えてゆく
思い出がもつれて回る夜の雨
普段着の暮らしで世間広くなり
美しく老いて明日の風に乗る
米寿の朝天眼鏡で見る手相

静岡県　薗田獏沓

パソコンは無いが何とか事足りる
北斗星　方向おんちに輝けり
呑み屋でも三人寄れば合併談
食後薬のむため三度飯を食う
アクションに熱中飴玉噛み砕く

愛知県　早川盛夫

知らなくていい事ぎょうさん知っている
働いた酒へ文句は言わせない
ここら辺からが危ない酒の量
無いようであるいざという時の金
好きなことさえしていれば取らぬ歳

京都市　都倉求芽

旧暦を葬るハウスの花　野菜
サラ金がわが世の春のコマーシャル
知る人ぞ知るとはバカにされている
夫婦の間に賞味期限などはない
今日の荷をまた積み残しのまま眠る

京都市　高島啓子

どう料理しても限界ある鰯
世の中にとり残されて朝の風呂
口答えせずトンカツを切り刻む
間違いの電話が春に多くなり
夕方から出ていくならばベレー帽

京都府　稲葉冬葉

仁王の形相見せた貴乃花
今年こそ素敵な出会いおみくじに
されど川柳微熱ぐらいで休めない
とても器用に十指が動く健康法
煩悩を撲る春の遍路笠

京都府　丹後屋肇

前立腺長い祝辞に中座する
小春日や古都の雅をハシゴする
動悸うって毎月開く投稿誌
列島にシベリア寒波の矢が刺さる
独居の身ベッドの下の預金帳

大阪市　小糸昭子

予約席ちょっとリッチな気分です
秒針を睨みつけてるゴール前
湯気のぼるけつねうろんの葱と揚げ
お迎えの車デイケア直行便
熱燗で寒さを弾くキムチ鍋

大阪市　前たもつ

満潮に橋は小さく見えてくる
人間の出す雑音であたたかい
駅員に見られたくない無料パス
公園に住む人が居て救急車
自分では選ぶことない火葬場

大阪市　奥村五月

少子化の世に犬猫がよく増える
野球さえ振り逃げもある生きてやる
喧嘩した妻に病気を励まされ
まだ生きる癌をなだめて湯につかる
休肝日友に出会ってはしご酒

大阪市　熊代菜月

犬までがブランド印の服を着る
味方にも敵にも変わる人がいる
棚ぼたの話この頃落ちてこず
糖尿のレッテル張られ酒やめる
稲架けの終りし能登の千枚田

難民の暮しを思う暖房費
Lサイズ慣れてしまえば普通です
医者知らずと言ってた人が先に逝く
お喋りがご馳走でした食事会
日の丸の旗も知ってる浮き沈み

大阪市　榎本　日の出

自信ないのでてにをはのトーン下げ
明日を描く慎重にかつ大胆に
たまさかに早寝をすれば寝つかれず
年ごとに春待つ首が長くなる
嶮しいがきっと花野へ続く坂

大阪市　西出　楓楽

特別と言われ財布を開けている
園児から家族順次に風邪を引き
気象予報ばかり見ているカメラ好き
坊さんも銀行に来る昼下がり
胃カメラの画像に食が進まない

大阪市　松尾　柳右子

ぐずぐずとしてたら逃げた青い鳥
冬木立　天に向かって毅然たり
東風吹いて小さい庭も春の彩
蟹ざんまい海老ざんまいのバスツアー
吊された絵馬にもあった運不運

大阪市　津村　志華子

鉢植えのトマト小鳥が試食する
観覧車うなだれている寒の入り
どのくらい血を流したのサービスデー
ふり向くのもう止めにする転ぶから
秘めごとの一つ二つを生き甲斐に

大阪市　星野　きらり

忘れるな小さい地震あちこちに
うどんよりわたしに効かす辛子振る
健康寿命のびて身辺整理のび
春風にふれて絵の蝶とんでゆき
道端の氷やっぱり踏んでみる

大阪市　渡部　さと美

何よりの癒しほこほこ蜜柑風呂
梅見頃天満宮へ礼詣り
腹八分毎日測る体脂肪
間食を促す友が二三人
なよなよと歌舞伎女形の芯を見る

大阪市　津守　柳伸

福豆もソフトになって歳の数
正恵方雪の散らつく寺めぐり
お賽銭一円玉が肩を寄せ
いもぼうへ散らつく雪もなんのその
奥入瀬で足湯たのしむ雪の中

大阪市　津守　なぎさ

大阪市　鈴木トヨ子

へそくりも躍る大学無事突破
露天風呂サルも親子で仲間入り
色艶に亡姉を重ねる落椿
人生の壁遠回りして今の幸
有頂天賽銭忘れ願かける

大阪市　川久保睦子

窓際でやっと笑ったシクラメン
飼い主に似てるため息猫がする
うっふっふ秘密が一つ増えました
幸せの時は神様信じてる
蜘蛛一匹見逃してやる仏の日

大阪市　神夏磯典子

石段の中ほどで身の程を知る
首相のいちにち　私のいちにち
五十年先のことなど阿呆らしい
奥さまも猫もレトルト気に入らぬ
ウイルスが私の旅行狙ってる

大阪市　古今堂蕉子

雰囲気に酔いかぶとぬぐ　よろいぬぐ
思い出し笑い幸せ二度運ぶ
新婚の味に酔うたも二年間
嘘の山築いて心寂しそう
飲める量教えてやると酔いつぶれ

大阪市　大川桃花

桃ちゃんと呼ばれいっきに輪に入る
こうやって秘境が消えてゆく車道
ふる里の少し塩味きいた餅
変わらないエクボに名前思い出し
マイコンにピピピと言われビビるボク

大阪市　川端一歩

戦争ノーそれが少数だろうとも
この人とここまで来たは奇跡なり
字を書いていれば輝く人が好き
太陽が顔を出したらみな笑う
先んじて人を制することもなし

和泉市　中川楓

心まで加齢はしないバースデー
大鍋のぜんざい空に厄払い
ハンサムな医者に血圧上りづめ
穏やかに毒吐いてます元気です
空を見たくて落花する紅椿

泉佐野市　山本蛙城

怪我人を出すも祭という熱気
謹呈書また来て書架の隙探す
義理チョコも無縁白々しい二月
イラクほか今年の一字争だろか
歳訊けば曽孫五人という答

大阪狭山市　矢野　梓

話す事いっぱい溜めて友と会う
桃色のスカーフ巻いて春を待つ
白黒をはっきりさせて疎まれる
風邪をええことに夫をこき使い
友が逝く旅の約束したまんま

河内長野市　山岡　冨美子

春爛漫艶を競っている平和
埋み火がふっと揺らいだ春の闇
戻り寒たしなめられる勇み足
行革へ春の財布が軽くなり
静止画になってしまった北の海

河内長野市　加島　由一

手作りのチョコが男を慌てさせ
好きになるたびに初恋だと思う
発火点過ぎても熱くなってこぬ
リストラの街で上手に泳いでる
保険契約これが私の値段です

河内長野市　村上　直樹

折にふれ仮病で愛を試される
遺伝子が輪廻転生駆け巡る
斬新な発想という羽目はずし
てにをはの深さを習い怖さ知る
四捨五入すればとうとう古希の坂

河内長野市　井上　喜酔

激流を避けて人生川下り
大寒の墓石両手で撫ぜてやる
やせた蟹大きな皿で威張ってる
平和でも時の流れは落ち着かず
口だけは達者なくせに筆不精

岸和田市　岩佐　ダン吉

ドクターが僕も腰痛だと笑う
霊長と言うなら核を捨てなさい
店閉じたばあちゃん　すんませんとある
沈黙をされたら恐いお母さん
自死三万豊かな国なんだろか

岸和田市　原　さよ子

郵便で配達された飲んだツケ
幸せを指にあつめて産着縫う
つまずいて友の注意が耳の底
思いきり喋った後はがらんどう
風邪癒えてめっきり目立つ顔の皺

岸和田市　宮野　みつ江

女神にも鬼女にもあなた次第です
裏鬼門でした　あなたのいたところ
逢えた日は陽も豊かなり産寧坂
鬼瓦にらみは効かぬ猫の恋
妻が子が待つから仕事の鬼になり

横綱の誓いしんどい四字熟語
手助けはいりそうもない白い杖
返すにはしのびぬ傘を貸してくれ
もの言わぬ妻は歯痛と思うべし
短命と嘆かれぬ歳まではきた

堺市　志田千代

目も耳もええ塩梅に疎くなり
賀状だけ三十年の深い縁
コンポートの胴は優美にくびれてる
行きずりのベンチ一緒に花を愛で
めしうどん　どんぶり鉢はすぐれもの

堺市　山本半銭

どの国の民も戦を望まない
人間になれたら武器を捨てられる
はみ出した奴が案外ものになる
今日からの酒は内緒になる数値
不平言う人が小粒に見えてくる

堺市　和田つづや

あと回しの家事がだんだん膨れ出し
こっそりと過去の扉を開ける音
お互いに好きなことして日が暮れる
思慮深く見える夫の重い口
手相から皺まで母に似てきたな

堺市　宮本かりん

ざっくざく雪の感触久し振り
ぞくぞくぞく風邪の悪魔にとりつかれ
風邪ひいて老々介護思い知る
フリーター　ラフなスタイルして稼ぎ
切り株で福の神待つのら息子

堺市　源田八千代

夢に出た友とひょっこり町で会い
お揃いのセーターを着て親子です
たまに会う父と漫才しています
健康な父ありがたし今のとこ
日溜まりの雀親子でたのしそう

堺市　齋藤さくら

女房の口癖いつか母に似る
選挙には行かずに批判だけはする
必勝の決意秘めてる無精髭
小姑が仕切る亡母の形見分け
生きているうちは雑念拭えない

堺市　村上玄也

なぜ急ぐ寒き黄泉路のひとり旅（石原靖巳さんの死を悼む）
生き様を見せてわが子と酒を酌む
線香の燃えつきるまで父と会い
今晩も内弁慶が酔っている
歳ほどに豆は食えぬと鬼にやり

吹田市　太田昭

吹田市　早川棲世

旅立ちへ妻は古着屋ほど並べ（旅の思索その四）
エーゲ海漁婦みな口も手も達者
クレムリン宮址の墓は党首たち
日本字でメニューにチップ置けとある
名月へ肉食民族無関心

吹田市　大谷篤子

運つかむ片手はいつもあけておく
縁日のリンゴの飴は孫も好き
テロなどで落す命は産んでない
思う事ずけずけ言って眠れない
花の季に人生の幕おろしたい

吹田市　野下之男

王様の耳は時々聞こえない
日本丸目を覚ましなと春の神
優しいね一日だけの妻の乱
国産が水に合うてるプロ野球
国技の名はにかんでいる大相撲

吹田市　山本希久子

いざ行かん花見へ母は九十五
少しずつ老いを認めて歩く坂
計算に弱い女の影法師
少子化をあざ笑ってるねずみ算
人目ひく桜咲く日も散る時も

高石市　浅野房子

燃え尽きて引退をする花吹雪
オルゴール開けると転げ出る運命
ああ言えばこう言うだろうから言わぬ
弱肉強食やがて誰かの餌になる
神経がチクチク痛む終身刑

高槻市　生田義一

好きだった他人のままで喜寿迎え
故郷帰り田舎なまりがすぐ戻る
目が覚めて勝手が違うここはどこ
細い目を更に細めて賜杯抱く
発泡酒飲まぬ爺が税を決め

高槻市　傍島克治

先生も別人となる参観日
布団干し昨夜の悪夢叩き出す
此処だけの話ばっかり聞かされる
かたくなに査察を拒む息子部屋
五時を過ぎれば気脈通ずる友がいる

豊中市　安藤寿美子

厄払う豆をあるだけ全部撒く
雀来て昨夜の豆を食べてくれ
にらめっこ野良猫ぷいと横を向く
手を貸してくれる人無し下り坂
やけっぱちも少し加えて余生の図

豊中市　吉田あずき

春陽さし冬の怠惰を見抜かれる
脱げそうでなかなか脱げぬ厚着ぐせ
御飯の香ぬくぬく誰もいぬ部屋に
豆の数増えて不況はまだつづく
私の影がわたしとずれてくる

豊中市　山門タミ

長電話楽しい最中時計出る
面白い会話もなくて夜の長さ
夫とは長い運転助手の席
私ってやっぱり大正女です
返事来ぬ友は一人で暮してる

豊中市　江見見清

カレンダー目立つ空白それも良し
夢を買いやっぱり夢で終るくじ
こんにちは声かけやすい橋の上
スマイルを絶やさぬ人について行く
後始末大変さ知る妻の留守

富田林市　藤田泰子

諺に例外もあり犬と猿
顔色ばかり見る癖がある膝の猫
国債にタンス預金を狙われる
シェパードのくせにご飯にお味噌汁
大正が匂う遺品のコンサイス

富田林市　中井アキ

いろいろとあってぼた餅配ってる
ハンドルは妻に任せている絵筆
野仏が見ていた僕の秘密基地
きっと拉致マリオネットが帰らない
マニキュアと春の音符を待っている

富田林市　片岡智恵子

紅い糸最初は青い恋だった
ハミングで少し落ち着く気の焦り
春うらら哀しいことは皆忘れ
ミニドック無事でご飯が旨くなり
手抜きした掃除夕陽に見破られ

富田林市　大橋鐘造

泣けるだけ泣けば時計も動き出す
風の呼ぶ方へ転んで運掴む
あやまちをしでかしそうな朧月
やわらかい月に誘われ肩を抱く
その先が見たくて時計進ませる

富田林市　中崎深雪

ケイタイもパソコンもなく足りている
うまが合う医者だと早く治りそう
年取れば取るほどお洒落しなくっちゃ
源氏よむモーツァルトを聞きながら
わたくしも宇宙自身を宿してる

意外にも汚れをためる洗濯機
ポピー咲くひよこのように殻割って
母を看る去年と違う冬景色
看護中夫が少しマメになる
バレンタインへ菜の花十本活けておく

寝屋川市　籠島恵子

きっかけが見つかりすぐに仲直り
肉親はおんなじことで何時も揉め
棒引きの何百億がわかりかね
青テント族の寒さを思う冷え
母に逢えそうな桜の吹雪く道

寝屋川市　冨山ルイ子

陽光へ背伸び上手なプランター
昨日今日お恵みうれし布団干し
お祭りが済んで光らすお鍋さん
乾杯のその一口でよい血筋
芸術は筆の先から生まれます

寝屋川市　平松かすみ

鯨飛ぶように列なすヘリコプター
シャッターが二軒開かぬ商店街
横町に煮っころがしが匂うなり
弓なりの眉にこだわる美少年
北風にふくら雀はたじろがず

寝屋川市　森西

仲直り真意を知ったコップ酒
ハイハイと重ね返事の不貞腐れ
シャトル事故嘆きの渦が世を走る
携帯で繋がれ妻の眼が光る
思い出を紡ぐおだまき繰り返す

寝屋川市　坂上高栄

まっすぐに目を見て話聞いてくれ
子供までプチ整形にのめりこみ
化けるのは朝の電車の空いた席
ミーハーの話になると目を覚まし
邪心なら腐るほどまだ持っており

羽曳野市　三好専平

抜きたての大根食べて満ち足りる
雪しんしんこの世の音を閉じ込める
豊かさの幻を売るコマーシャル
先のこと介護ロボにも頼まねば
ピストルを向けて正義を売りまくる

羽曳野市　徳山みつこ

春うらら忘れ上手になりすぎて
良い事が続いて暦はぎ惜しむ
一緒には死ねない人と月仰ぐ
七彩の夢を大事に老いている
激動の世じっと座って目刺し焼く

羽曳野市　川口信子

羽曳野市　吉川寿美

就職内定　息子が揚げるアドバルーン
給料が出るだけましかこの御時世
歳だとは言いたくないがやはり歳
手の平の明日へ播いとく花の種
病窓の月が優しい嘘を聞く

東大阪市　安永春

腕まくりしてもヘッピリ腰やんか
さっぱりと髭を落して捕まった
泣き虫で努力する孫ほめてやる
しばらくはチェロの音色に酔っている
押すことも引くことも知る歳の功

東大阪市　北村賢子

寒風の中　日日確実にふくらむ芽
喝采に酔う誠実なえんび服
辛酸をなめて明日へ胸をはる
キャッチボール親子のこころ通わせる
好きですと言えぬ思いを秘めている

東大阪市　指宿千枝子

宝くじ当てた話は聞いてない
鉄橋の電車に夢を連結す
土曜日のデートは内緒ないしょです
日曜日お猿に会いに動物園
物腰にお人を見せて青テント

東大阪市　中岡妙

まだしゃべり足りない人と居る温み
ほどほどの距離で笑顔が出せてます
母の歳越えて茶漬けが好きになる
外科内科眼科まとめた通院日
ポケットのカイロに感謝冬の朝

枚方市　宮川珠笑

帰省して同居の無理を確かめる
葬式の雨で故人が責められる
四肢伸ばし寝息整え今日終る
箸置いたばかりへ夜は何食べる
入院の妻に家計の指示を受け

枚方市　安達忠央

一万歩犬のリードでまだ続き
個性より人並みにまでいつなれる
土の橋お国訛りもまだ残り
席譲る茶髪を見つけほっとする
三次会ゆきつくところあべの橋

枚方市　海老池洋

失政の付け民衆は斬られ役
雪こんこん祈る姿になる木立
眠り猫そんな顔して日向ぼこ
ロダン像そんな姿に歯の痛み
大相撲輸入力士に支えられ

枚方市　寺川弘一

素顔に似せた仮面をつけてとぼけてる
素うどんを無言ですする定年後
古い時計も六十分で一時間
靴音をまだ待っている一周忌
一汁一菜自慢する人大嫌い

藤井寺市　鴨谷瑠美子

木の橋があるふる里の高瀬川
うす味になれてほのぼの暮しおり
くじ運の悪さ困ったことはない
無駄なこと書くのに手帳持っている
ちょっとしたものを挟んでかえす本

藤井寺市　髙田美代子

河豚も人も毒の辺りにある魅力
壊れないように力は抜いておく
人の目が気になるうちはまだ若い
住み辛い話も聞いた発泡酒
おおきにへ笑顔も添えるたこ焼き屋

藤井寺市　楠昭子

ふわふわとしてるようでも芯があり
許す気になったら視野が広くなる
がむしゃらに進み孤独がつきまとう
我れ先に進めば火の粉ふりかかり
人形が話せばきっと出る訛り

藤井寺市　中島志洋

このままの平和を祈る鳩時計
酒癖を知らず誘った花の宴
先生がとても優しい参観日
三寒四温焦らされている春の風
春うららお地蔵さんも目を細め

松原市　小池しげお

その事をマスク外して話しかけ
負け方を褒め来場所を期待され
大声を出すには歳を取り過ぎる
川柳の下五ができた露天風呂
食べるのがとっても早い河内弁

箕面市　岩津ようじ

アメリカと泥棒にある三分の理
終戦を狂喜した友癌に死す
精神科の医長惚けたという噂
なるほどね平家(ひらや)物語とも読める
生きすぎたとかいいながら医者通い

箕面市　出口セツ子

価値観が違うと親を切り捨てる
子が巣立ち刺激が減ってくる右脳
未消化の言葉溜まってくる胃痛
傷ついていても笑っているピエロ
ストレスの発散フトン叩かれる

八尾市　生嶋　ますみ

のたりのたり海が笑って春がきた
通販の甘い呪文に乗るものか
絵画展どきりとさせる裸婦の脚
脱衣籠たたみこまれるお人柄
大安にこだわりすでに負けている

八尾市　村上　ミツ子

生きるのにちょっぴりほしいうぬぼれも
気になることがあると血圧すぐ上がる
真珠婚たとえとうさんいなくても
ホームこたつの守りが上手になりました
雪山をバックに菜の花が満開

八尾市　井尻　民

年齢のほうが勝手に寄って来る
歳重ね違う風景が見えて来る
生き方を変えてゆっくり生きてみる
趣味ひとつ極める事のむずかしさ
デパ地下の値下げを待って買い過ぎる

八尾市　山本　宏至

恋という媚薬のんでる美しさ
子供等を見る目仏になっている
雪景色津軽三味線よく似合う
あり合わせ母は工夫をもりつける
つらい事忘れる知恵を持っている

八尾市　篠原　いつふみ

ポスターは若い美人の露天風呂
酔ってない言うから大分酔っている
親切で優しい人です他人には
銀行の監視カメラにVサイン
明日は明日その気にさせる酒二合

八尾市　吉村　一風

写真にはいつもうしろの端に亡父
寒椿落ちる刹那へ耳をたて
学ぶこと多くて過去をふり返る
赤ちゃんに指握られて動けない
財布から愚痴がころころ転げ出る

八尾市　内海　幸生

極楽は我が家に冬のバスルーム
あれだけの水と肥やしでこんな花
雲一つ無い富士山は背が低い
医者の瞳の奥を覗いて話聞く
みんな皆持病と闘い生きてはる

八尾市　神原　まさと

新年会河内音頭でしめる八尾
インフルエンザ恐くて医者に通えない
てっちりのテレビ見ながら茶漬食う
風邪引かぬ人を尊敬してしまう
正月のホテルで妻の骨休め

八尾市　高杉千歩

回収車追いかけるほどゴミもなし
墓参り予定に入れる回数券
アネモネの一輪ずつと春をまつ
頑張るも怠けるもよし白い画布
諦観が本音体がついてこぬ

大阪府　米澤俶子

電池切れしたか脳すぐ作動せず
賞味切れと品質保証切れ夫婦
スピード違反並みの速さで去る月日
気負っては見たがあべこべいたわられ
草の種少しの土も見逃さず

大阪府　籾山隆盛

初弘法失くした句集手に入れる
カーテンを替えて先取りしてる春
烏は町に子供は塾へ昼下がり
惚け封じ看板上げる古い寺
デフレの世思惑買いの株がない

神戸市　池田善守

日の丸も晴れ着も見ないお正月
我が足で歩けるだけで至福なり
小春日に妻の肩もむ梅香る
右向いて左向いたら忘れてる
定年十年まだ仕残しの夢でさめ

相生市　中塚礎石

背伸びした履歴書だから崩れだす
正論を心の中で鬼笑う
言い訳をしないと決めた夕茜
表札が留守番をする寡婦の門
銭湯の煙突けむり出ていない

芦屋市　黒田能子

きっぱりと出来ずうろちょろ生きている
読みさしの本があちこち置いてある
聞き役に徹して少し疲れ気味
妻の風邪食べたいものが食べられぬ
お先へどうぞ　わたくしはマイペース

尼崎市　山田耕治

手を振って茶飲み友達バスに消え
五七なり十日戎の掛声も
女房の訳の判らぬ不機嫌さ
あなただけ背中掻いてと言えるのは
ああ言えばこう言う孫にお年玉

尼崎市　田辺鹿太

嫌だねえ食べ放題という旅行
合併でわがふる里の名が消える
泣き寝入りする位ならボケてやる
投げやりな答えがかえる倦怠期
ソフトにもハードにもなる父の酒

尼崎市　長浜澄子

歯刷子が寄り添うようにある新居
美味八珍まだまだ生きる欲がある
それなりにポリシーを持つのほほん茶
どんと来い裏も表もない強味
胡座かく横顔これぞＤＮＡ

川西市　西内朋月

寿命まで生きられるから飲んでいる
税金は請求通り納めてる
千円の予防注射をしてもらう
とりあえず放免された歯科の椅子
図書館の順番を待つ新刊書

川西市　米原雪子

コンサートの余韻を星に語りかけ
爽やかに毒舌吐けて羨まし
買い替える決心させる修繕費
お互いに痛い話で盛り上り
バス一台遅らせ友と立ち話

三田市　久保田千代

キッチンの椅子母さんの指定席
スノーボーに行くか若さがあるうちに
善人の証頼れる大きい声
駄菓子屋を覗けば昔よみがえる
燻し銀の人生だった父偲び

西宮市　山本義子

十字路は鈴鳴るほうへ足がむく
初対面すこしお洒落をしておこう
母さんの魔法が詰まるお仏壇
摩崖仏に送られ下山　足軽し
八方破れ他人は度胸と申される

西宮市　亀岡哲子

夫と孫と自分のお守りして冬日
漬物の刻み加減も喜寿となる
流感へマスクいろいろ買い替える
豪雪を知らずロマンの雪を恋う
ほんの少しミモザ黄色く小雪舞う

西宮市　門谷たず子

箸二ぜん転ばぬように箸枕
穏やかに波長を合わすことに馴れ
旅はよし　やさしいわたし取戻す
ゆったりの波に身を置く日暮れどき
春はもうそこに陽の色風のいろ

奈良市　米田恭昌

美辞麗句中にも嘘の隠し味
ウッソーホント　ママ若ぶった電話口
ライバルのニコニコ顔が曲者だ
わたし看護師白衣の天使じゃありません
金力ないが美人の妻がいる

香芝市　大内朝子

真っ直ぐな君の背中を忘れない（金太さんを偲ぶ　3句）
お先にと微笑みかけてくる遺影
満点の呼名は永久に耳に棲む
一本の歯を引き金に老いてゆく
妻の吐く愚痴はどんどん逆のぼる

橿原市　居谷真理子

横書きが似合う一句に会うショック
光ってはいるが神父の古い靴
会議室女が混じっている湿度
人の首キリンの首にある都合
路地の店　軍歌聞かせるために酔う

橿原市　安土理恵

同性の匂いの過ぎる専用車
廃線を行ったり来たり蝶二匹
夕暮れは哀しい酒の酔芙蓉
許すのも許さないのも好きだから
眠れ眠れ眠ればきっと無に戻る

奈良県　渡辺富子

合格へあたり一気に春になる
貸ししぶり貸しはがしする妻である
羊水のいのちと聞いているショパン
抜け穴をたんと知ってる猫のひげ
浮揚力風にもらってジャンプする

和歌山市　桜井千秀

サンタルチア歌う菜の花咲く丘で
ムキになる質で歳取る暇が無い
自己満足小鼻ぴくぴく動き出す
お年寄りと言われて誰か気付けない
けなしつつ値切る客には脈がある

和歌山市　武本碧

とれたての味が滴る朝の市
なるほどと言いつつも目が泳いでる
駆け落ちへびっくり箱の置き土産
頼まれもせぬのに悩みまた一つ
悲しいね宇宙の勇士花と散る

和歌山市　田中みね

立春へスタンバイする杉花粉
終焉まで思う子の事孫の事
鳶が鷹生んだ自分を褒めてやる
美辞麗句並べた後に聞く無心
颯爽と歩き小石に蹴躓く

和歌山市　松尾和香

若者をふわふわさせる親の見栄
秘め事は浄土へ持って逝きはった
背かれて初めて知った母の愛
一粒の梅と茶がゆで風邪封じ
星まつり雪景色映え高野山

反省のポーズが続く影法師
早春賦　女が今日も塗るぬり絵
自画像が深い欠伸を一つする
おとし話がとても上手なチョコレート
心境の変化で遺書を書き直す

和歌山市　西山　幸

闇半分ひかり半分春の空
今はただ騙されておく冬苺
待ちあぐね香りを放つヒヤシンス
情勢は春告げ鳥にきいてみる
てにをはの坂に喘いでいる迷路

和歌山市　福井桂香

肉付きの位置がモデルとずれている
寝る前のお酒わたしの吐息かも
胸の底見せたい人が振り向かぬ
本命か義理かにんまりチョコレート
作戦のひとつハンカチ置いてくる

和歌山市　楠見章子

春めいてビザ配達の茶髪の子
導火線がついてる君からのチョコレート
さっきまで畳んであった一張羅
鱗一枚剥がれ落ちそう背が痒い
病人の足では廊下長すぎる

和歌山市　古久保和子

子育ての腕が孫へと乗り換える
腕一杯に乳の匂いを抱きしめる
腕の中でもらした音は大人並
家丸ごとパニックにして泣きわめく
干柿の甘ったるさは祖母の膝

和歌山市　榎原公子

誰も来ない一日だったさむい椅子
佇ちつくす海が応えてくれるまで
お静かに今包丁を研いでいる
魔女になる呪文唱えて春を待つ
昼の月おまえこれから何処へ行く

和歌山市　木本朱夏

結び目のひとつひとつに人の恩
句読点突然に置く神の意思
遺伝子を揺すって亡父を思い出す
多数決動き出したら止まらない
相部屋じゃないよ夫婦しています

和歌山市　牛尾緑良

テレビ漬け画面へシャトル墜ちてくる
人畜無害ばかり集まる午後のお茶
リストラと言わず肩書きとれました
一番の励み黄色いサポーター
車間距離凍った道の落し穴

和歌山市　福本英子

和歌山市　細川稚代

ほんまもん見たくて眼鏡かえて見る
花形が休むとさむい風が吹く
約束が気にかかりつつ風邪の床
友という温い絆に救われる
時々は休みたくなる古時計

和歌山市　上地登美代

怒るからついしてしまう隠し事
立ち上がる毎にどこへと聞く夫
豆まいて私の邪気も追い祓う
ブロッコリーのけなげな首を切り落とす
霜枯れのすぐ立ち直る冬野菜

海南市　三宅保州

お客さん自動ドアとは違います
活断層の上にひしめいてる積木
炊飯器無くても炊ける世代です
全自動なのに失敗してしまう
アッというまにコンビニが建っている

鳥取市　山本益子

人生の高いアンテナ模索する
ペテン師の口車からどん底へ
へそくりを上手に貯めて知らんぷり
擦り減った靴も退職ありがとう
何もかも書く遺言に嘘はない

鳥取市　武田帆雀

エプロンの紐も私もだらしない
話は済んだ出前寿司呼ぼう
役職の衣を脱いで餅を焼く
封切りの焼酎今日はこの目盛り
どちらかの手に決めなはれ蟹二匹

鳥取市　美田旋風

年賀状自筆の文字に浮かぶ顔
平成の不況は自分史に残る
気持よく歌う音痴の変奏曲
夢よりは足を地に着け日銭追う
平成の庶民いじめが目白押し

鳥取市　近藤佳子

お布団も私も干して春を待つ
遠花火わたしの万華鏡まわす
いつからか腸に住みつくテロリスト
やご　めだか　菜の花春を漲らす
春愁のあれこれせせらぎに流す

鳥取市　有沢せつ子

連休も終り目覚しオンにする
立ち読みはレシピ童話を二冊買う
一気読みするには惜しく句集閉じ
長靴の児がわざと踏む水たまり
熟年を刺す漫談にほくそ笑む

鳥取市　山宮愛恵

新という響きに人間群れたがる
天然水もらう地鶏の艶がいい
名門の鯉は清水で育てられ
鯉こくを吸うてお乳が張ってくる
百歳のバナナを食べる口がいい

鳥取市　植田一京

人の世や忘れることは薬かも
川柳を除くとわたし居なくなる
ケイタイと仲よく家族の輪の外に
背をのばし輝きながら歩こうか
こころ無になど凡人に出来ません

鳥取市　倉益一瑶

橋渡るすこし迷ってみたかった
気がつけば影にときどき角がある
群にいて己の彩が出て来ない
ふところの広さ溺れてしまいそう
善人の真似が上手な胸のバラ

鳥取市　福永ひかり

職人の腕を不況が折って行く
九分九厘成功だったコロンビア
二〇〇三新世紀にももう慣れる
自由とは命を懸けるほどのもの
借金の初めはちょっとした赤字

鳥取市　夏目一粋

友情が愛になりそう線を引く
掌にフーとかけた一息あたたかい
リストラの窓に侘しいシルエット
誕生日もうこの辺で忘れたる
素直さのない子供らに恐さ見る

鳥取市　田中憧子

モーニングコールに来ない雀たち
誕生日忘れていても駆けて来る
吊し柿祖母は達者と干してある
枯れ野にも燃える火種が潜んでる
雷鳴が深夜の雪を告げに来る

鳥取市　岸本宏章

二日分書く日記には嘘もある
目に見えぬ首輪ケイタイ鳴っている
階段を降りる速さで歳を知り
合併へそれぞれ悩み持って寄り
ご親切ホームページを見ろと言う

鳥取市　岸本孝子

ぬくもって帰れとくれた酒が効き
大器晩成夢みて育て子も初老
ネオンまでしょぼしょぼみえる不況風
年金で老後の金を貯めている
春ですと花屋が春を売っている

点滅の命生命維持装置
矢が尽きた事は誰にも気づかせぬ
柔らかな布団背骨に甘すぎる
モンゴルの力士俵が狭すぎる
占いは福相と出て金が無い

倉吉市　最上和枝

我がルーツ調べておこう惚ける前
私にも名前はあるにオイと呼ぶ
八十路来て夫を追い越す酒の量
機嫌よく今朝の目玉は巧く出来
雪かきに力のなさを思い知る

倉吉市　淡路ゆり子

おんな五十手持ちのカード底をつき
プライドが邪魔して眼鏡作れない
薄着にはカイロ　ババシャツつけてます
差別と区別じつに線引き難しい
孤食増えちさな鍋物よく売れる

倉吉市　猪川由美子

嫌なとこばかり私に似た娘
豚小屋も老いた夫婦のマイホーム
香るまで待って下さい姥桜
弥次喜多のような夫婦で恙ない
一声が何にもまさる力です

倉吉市　米田幸子

お多福を嫁さんにした果報者
福袋開けないうちが花でした
裸木のパワーがやがて花になる
鼻の利く犬が近頃花粉症
手袋と帽子目深かに万歩計

倉吉市　松本よしえ

お見舞に大安の日を選っている
病院から風邪がこっそりついて来る
話好き忙しい足止められる
取れ立ての魚が睨む南無阿弥陀
惰性から抜け出したくて墓参する

米子市　木村春枝

足元が悪く外出禁止令
窓を拭くもっと私が分るよう
少しずつ昔放して軽くなる
シャガールの窓切りとって貼りつけた
窓の外風がウインクして通る

米子市　中井ゆき

わたしの中の他人が意見して困る
四つん這いになって渡った丸木橋
アルバムの雪合戦に関の声
なつかしい家が消えてた遠回り
猫柳の春に出逢った土手の道

米子市　澤田千春

米子市　政岡　日枝子

窓の向う他人の芝居は面白い
朧月わたしの窓に来てくれた
橋の上まだシナリオは変えられる
心疲れてしきりに起こる立ち眩み
足首は気丈に罪を支えてる

米子市　林　瑞枝

婿殿へよろしく熱く二度握手
新郎の戸惑うアメリカ風日本語
アメリカ育ちのスピーチ英語大拍手
明治神宮で結婚式が夢だった
旅好きのわたしの背なに羽根が生え

米子市　光井　玲子

歩道橋によも山話してあげる
寸分も狂わぬ老父の腹時計
亡父のふところ童話いっぱい詰ってた
長い橋あと幾とせと想う日も
海の青釣り人たちを魅了する

米子市　白根　ふみ

臘梅をつつきにおいで鵯(ひよ)待つ
居酒屋へ鬼は出たきり日が替わり
心もち立春からは弾みだす
立春にいまだ吸いつく聴診器
ギフト券にんまり握りしめられる

鳥取県　鈴木　公弘

合掌のかたちに若葉溜めておく
言う時期を逃した肩が凝ってくる
ほろ酔いは帰宅しましたお月さま
夕焼けの味覚を忘れないように
水を抱く愛情はない杉ひのき

鳥取県　新家　完司

気にはなるインポテンツという言葉
テレビカメラ向けると弾むピアニスト
土産物ぐい飲みばかり目に止まる
高いのはやっぱりうまい明太子
震度四以上は見舞い状を出す

鳥取県　岩崎　みさ江

食い縛る歯が抜け落ちていい笑顔
きっと罰当たる残飯捨てながら
妻からのチョコとは知らぬ夫の顔
魂を燃やし余白を輝かす
野仏のおつむに春よ早く来い

鳥取県　土橋　はるお

恋のはなしと銭の話は内緒だよ
田舎の人のモラルに最敬礼をする
見たこともない面の魚が売ってある
脚が寒そうな都会のシルエット
金がない金がないとて坂のぼる

鳥取県　西原　艶子

シュガーレスの暮しに慣れて艶を増す
ユーモアが一滴あれば生きられる
Eメール冬の陽ざしに似た温み
夢で逢う亡夫は私より若い
炎え尽きた恋も記憶の底で生き

鳥取県　石尾　かつ乃

和紙の里すてきな水の音がする
欲張りはしないわたしの習い事
好きな色溶かして春を画いている
老年の夢キャンバスに書き残す
ぎりぎりに間に合い残り福あてる

鳥取県　石谷　美恵子

春蒔きの種もひっそりまだ眠り
切るような冷たさが生む温い和紙
いい夫婦してます内緒少し抱き
赤い花ズバズバ憎いことを言い
福相の人だがとても細かくて

鳥取県　田村　きみ子

わたくしも桜も好きな笑い声
家事解放さあて何から遊ぼうか
戦争のはなしは嫌い聞かせない
大家族なのに休日ひとりぼち
老人を大切にする本を読む

鳥取県　小谷　孝美

機嫌とるように夫の早帰り
ウソ見抜く証拠を隠し持っている
春一番恋の迷走加速する
許すこと忘れることが難しい
ため込んだ切手メールに貼り場なし

鳥取県　乾　喜与志

眠ったまんま浄土だろうや祖母の顔
耳古りて読経する声高くなり
久びさに眠たげな春さて白寿
難問を解くナマンダブナマンダブ
猩々と獅子と鬼ごっこの祭り

鳥取県　村上　信子

日溜りで猫ゆっくりと背を伸ばす
春の陽に硝子の汚れ目立ち出す
入園に備え排便しつけられ
猪の被害に畠囲まれる
孫の嫁選ぶメガネの度がきつい

松江市　銭山　昌枝

飲み込めぬ話が溜まり嗽する
許したらわたしもきっと楽になる
不本意な妥協わたしが消えてゆく
お守りと堪忍袋すり切れる
渋滞の中で言い訳考える

松江市　安食友子

牡丹雪　有終の美をありがとう
ブルジョアさん痛みをお分け致します
地蔵顔　閻魔顔する年度末
いい湯だね蛙泳ぎがしたくなる
好奇心新酒と聞いて嗅ぎました

松江市　小川注湖

白寿へ一つ加える祖母の初詣で
人にとって運とは何か考える
城見えるところに住んで夢がある
花見ござ笑顔の中に手話の人
女房も家計の柱担いでる

松江市　川本畔

壊れたガラス私の指紋消している
天の声浄土は順序不同なり
波の音ベートーベンの第九だね
茶柱は立たぬが今日も無事だった
切り株に疲れた身体休ませる

松江市　三島淞丘

醜態を真似てくれるな影法師
自分史が恥で真っ赤に染ってる
溜息で重い風船膨らます
愛嬌につられいつしか千鳥足
そんな子に育ててないと母は言う

出雲市　青山久子

住みなれた町で素顔のまま生きる
新顔の風がわたしの木をゆする
最初から軽い財布で生きてきた
カラオケに元気な喉を持ってゆく
老いてゆくことを忘れていた月日

出雲市　小白金房子

一日が始まる牛舎靴の音
熱燗で今日の疲れを押し流す
終バスを下りる娘の身を案じ
デフレなど知らぬ大空鳶舞う
棚田にも春の喜び陽がおりる

出雲市　城多喜

花の芯つめたいものを抱いている
愛と言うたった一字をもてあます
わたくしの小さな花が枯れました
スープ皿いとしいものが浮いている
友達の主人やさしい人ばかり

出雲市　久谷まこと

ふる里の安らぎもらう出雲弁
愚痴一つ添えてる母のランチジャー
知っていて居留守にチャイム二度三度
間が悪く解いてやれない子の疑問
献立表　輸入野菜に思案する

出雲市　岡　あきら

快諾を得て口笛が出て来そう
菓子折を見てニッコリが出てしまう
厳寒も早く去れよと豆を撒く
よく喋る人の話を聞き洩らす
塵ほどの税でも同じ申告書

島根県　榊原秀子

雪が舞う見てみて見てと雪が舞う
人形のかわいい顔がお友だち
自転車をやめた未練が未だ残る
スーパーへ行く坂道を試練とも
親しみへついぞんざいになる言葉

島根県　伊藤寿美

鐘が鳴るもう決心は変わらない
髪洗い臍も洗って明日はオペ
真夜中に病夫の寝息確かめる
悲しみを流す川から春の音
雲間から聞こえる亡母の日和下駄

島根県　森　茂美

終列車みんな無口になってくる
土壇場になれば絆が固くなる
バスの来る方を見つめる雪の朝
戦争へ命の重さ説いた記事
試着室にっこり笑い妻が出る

岡山市　井上柳五郎

予防接種転ばぬ先が仇となり
折りに触れ精一杯を生きた日々
世の移り終身雇用死語入りか
血圧の機嫌いい日の軽い足

岡山県　大石あすなろ

土たん場を二枚の舌で切りぬける
娘の恋にまず母が折れ父が折れ
父さんの靴音存在感がある
質問をされると困る一夜漬

岡山県　小林妻子

旧暦を追うてる老母の季節感
厳冬の最中に春の賀状くる
七草もまだ芽吹かない新暦
また一人鬼籍の友の名を数え

岡山県　富坂志重

感情線が響かなくなった傘寿
いねむりの客あるとつげバス降りる
時々はのみ込むにがい嫁の味
傘寿来てまだまだ米を研ぐ元気

岡山県　矢内寿恵子

蝋梅も開きはじめる春の使者
煩悩があふれ人間止められぬ
今日もまた似た者同士数え唄
未完の詩抱いて生涯走らねば

どっと春無口をさそう風の音
風の向き心次第で西東
追伸のまたその先に置く想い
春浅しまだ鶯も音痴にて

岡山県　山本玉恵

山林を守る父の眼が温かい
未完の絵夫婦ゆっくり彩を塗る
針箱の底でへそくり寝かせとく
一粒の種を泣かせぬ父の汗

岡山県　福原悦子

立候補者知恵と力をふり絞る
ナナカマド氷柱の中に身をひそめ
今だから言える戦時の辛きこと
ほめられたことは今でも覚えてる

広島市　森田文

ノンシュガーただそれだけで買ってみる
一つでも秘密持てたら楽しかろ
菌という見えない敵が咳込ます
掛け捨てがおらねば保険困るだろ

竹原市　時広一路

ストレスで肥えたとゼイタクを申す
大アクビ誰も見てないはずだった
一番の敵が味方になることも
だんだんといい顔になる夫婦松

竹原市　正畑半覚

丘雪を金色に染め陽の昇る
水仙に風花愛のメッセージ
光る春慌てて芽吹くチューリップ
人生にアクシデントと言う師あり

竹原市　石原淑子

手相しみじみ半世紀の記録
ここまでが去年の雪だ雪まつり
ケイタイをリモコンがわり妻を呼び
三月の空にネコヤナギが似合う

竹原市　岩本笑子

ドレミファを陽気に歌う春の雨
新聞もテレビも株も先読めず
医師免許本物ですか問うてみる
ストレスを今日も吐いてるテレビ局

竹原市　古谷節夫

父親の仮面貰った二世議員
身から出る錆は生きてる証かも
混浴の隅へ寄ってるのはおとこ
美人より男心を惹く悪女

宇部市　平田実男

平凡に生きて序列を気にしない
ダム底にいつかは沈む柿たわわ
ストレートに言えばやっぱり腹が立ち
雪々雪は天から地から降る

美祢市　安平次弘道

皿割れてこの日一日注意する
緊張が解けて笑顔が美しい
脚の保護格好などは気にしない
昼下り湯治のつもり慣れ通い

熊本県　岩切康子

虫食いの背広平気な定年後
地引網雑魚は捨てられ生き残る
要るものは要ると家計簿止めにする
小商い訳ありそうで値切れない

唐津市　宗水笑

人の輪に生きて情けの灯がともる
老いふたり娘もたない愚痴しきり
ぶって見てもお里顔出すアクセント
ライバルが逝って俄かに老けてゆく

唐津市　井上勝視

三百六十五日炊事をして老いる
個性など無駄と組織の長が言う
小金持つ哀しさ詐欺の的になり
生れて死んで宇宙の中にある輪廻

松山市　宮尾みのり

空元気試されている坂の道
下り坂急ぐと膝が笑い出す
言い訳が通らず嘘をつみ重ね
四捨五入そんな妥協をゆるしてる

松山市　高橋宏臣

今さらと夫が笑う美顔術
里帰り母の料理は目分量
爆弾の落ちる気配へ猫も逃げ
父と子の手垢のらくろ一代記

松山市　丹下美津子

もしかして検査に時間かかりすぎ
夫婦とて二ツ三ツあるかくし事
天職と思った釘が横を向く
お世辞など言えぬ明治ののど仏

東かがわ市　川崎ひかり

君が代がひびくと背すじしゃんと伸び
原色の似合うあの娘は島育ち
御先祖が朝鮮人かキムチ好き
バースデー黄泉の道への一里塚

高知県　赤川菊野

血糖値君もそろそろつらかろう（三度目の教育入院）
灰色の故郷を夢でたぐり寄せ
老春の日記イニシャル消えてゆく
献立を見事につくり不養生（食事療法三度チャレンジ）

高知県　小澤幸泉

切り取ってこのいい景色送りたい
亡き妻を偲びつつ飲むコップ酒
想うまま生き抜いている無位無冠
チョッピリと若く見せてる薄化粧

十和田市　阿部進

弘前市　小寺花峯

おでん屋で箸が酔うてる三次会
自給自足時計要らない生活です
人格を落とした酒が午前二時
値段一流見栄三流無農薬

弘前市　須郷井蛙

お目出度う祝福受ける低い靴
朝夕の夫婦の散歩うらやまれ
焼き鳥へカーブを切った妻の留守
気まぐれな父であったと一周忌

弘前市　蒔苗果林

誰よりも節分の鬼はまり役
雪下ろし先ず大声で景色褒め
雪下ろし遠くの屋根と腕信号
宇宙船の事故にカマクラ点し合う

弘前市　一戸ツネ

ローマ字の表札出して日本人
貧乏も慣れれば何時か福になる
無人駅降りて二キロに母がいる
夢追いの旅に疲れた足の裏

弘前市　相馬銀波

度忘れが続きピンチは隠せない
リハビリと読書日課の快復期
娘の若葉マーク不安を募らせる
風は春生きる力を見る土筆

弘前市　岡本花匠

雪の愚痴解放されて土匂う
妻が眉たおやかに引く春鏡
法話聞き人間性を取り戻す
鷹ヶ丘さくら侍らせ城映える

富士宮市　渥美弧秀

郵便受けにこない日があり気の抜ける
ふる里の風に癒してもらう傷
リハビリを待つ間富士山見て倦かず
人形の姿いじらし人を恋う

滋賀県　中宗明

初日の出無心に拝むもみじの手
壮健を筆で伝える年賀状
追い込まれ手の内曝し尻まくる
怒気孕む部屋の雰囲気避けて逃げ

奈良市　天正千梢

雪まつりはかなく消えるから魅力
自衛隊が雪を運んで雪まつり
法話集みんな知ってる事ばかり
八十歳自分の事と思てない

亀岡市　井上森生

この年もさあ始まるぞ梅だより
春の声もちらほらぼくはフキノトウ
六十六歳旅の終わりの唄に酔う
朗らかな心は翳りも包みこむ

雨の日は明るい服で出かけます
連絡もれ仲間外れと拗ねている
ぼけはったらしいけれども笑顔よし
外出の数も私が多くなり

大阪市　榎本舞夢

その昔思い出させた北テレビ
如露で水かけるつもりか通り雨
忘れぬと次が入らぬ僕の脳
歳の差はずっと三つで喜寿傘寿

大阪市　伊藤博仁

小兎くんうちの家族になりました
お買物運動兼ねて歩きます
北風の猛威ウイルス撒き散らし
ユーモラスな鬼が顔出す京の寺

大阪市　町田達子

水ぬるむ日を待っている万歩計
湯どうふも女もうまく掬えない
頂点を極め平凡にはなれず
吹く風に添い風紋のごとく生き

大阪市　小泉ひさ乃

建国日国論ゆれる右左
お金より心豊かに老いを生き
あでやかに笑って年に触れません
北国へ春のリズムを告げる風

大阪市　安達はじめ

真っ赤な粒小雪に映える実万両
親切が詐欺の手口と後で知る
節分の孫の絵鬼が笑ってる
子のおさがり貰ろてパソコン四苦八苦

大阪市　川原章久

思いきり手足伸ばせる春の朝
学校も行かず泳いでいるメダカ
痴漢して先生首がおちました
缶ビール片手に友と通り抜け

大阪市　清水利武

ロボットは心やさしい地球の子
友達も好きだがひとりぼっちも好き
きょう草津あす白浜とわが家の湯
好ききらい花占いの嘘ばっか

大阪市　浦田綏子

甘い汁吸う談合で大やけど
独酌で愛想のいらぬ馴染み客
人生の累積赤字限度越え
点滴が洩れてポパイの腕になる

大阪市　岩崎公誠

春が来るうんとお土産持ってくる
宵の月春を食べてる木の芽和え
風に案内されて梅林お茶の店
片付けて片付けすぎて捜し物

大阪市　本間満津子

干されたらするめと名まで替ってる
生きるという大きな事が出来ている
眠れない二時半牛乳温める
理に叶う暮らし元気な百余歳

大阪市　玉置英子

貴乃花あの日の魔神忘れない
グローバル世界は一つハッケヨイ
傘寿喜寿夫婦揃って生きる幸
節分の豆端数食べ年を越し

大阪市　中村叡子

大輪が一つ消え行く大銀杏
一時をお手玉作るボランティア
大寒に背筋伸ばしてウォーキング
義理チョコを息子の分も買ってやり

大阪市　西川更紗

こつこつの御飯に炊けた妻の留守
根まわしをしてから計画をたてる
旅プラン孫の意見も取り入れる
孫がもう男臭くてかなわない

大阪市　中澤伽羅

学なくも亡父が守った人の道
乾杯のムードに下戸も盃高く
ガン告知あとは気力の運不運
立春や床の椿もふくらんで

大阪市　清水絹子

冠婚葬祭　下方修正する不況
新郎の父が泣いてた洗面所
結婚記念日また子供らに礼を言い
俺だけに超人的な妻の勘

大阪市　鶴田遠野

ブレーキを踏んでもテロはおさまらぬ
こつこつと入浴後にはシワ伸ばす
無茶でんな無いような利子に税をとる
毎日が楽しい発見待っている

大阪市　寺井東雲

寒紅梅咲いて天神さんに春
休耕田ふえて藁束陰もなし
輸入した藁で神社の大〆縄
ニューヨーク入りした人気の松井君

大阪市　中田あい子

夜明けとはかけ声ばかり闇深し
手ごたえのないまま今日も菜種つゆ
青い空信じてもがく蟻地獄
貯えは三途の川の渡し賃

大阪市　杉澤汀

ガーデニング妻に楽しい趣味があり
シナリオに妻独断の我が世帯
空白がこの頃増えた日記帖
短めに髪切り若さ誇張する

和泉市　西岡洛酔

玉青の絵が楽しみで待つ柳誌
共に居て楽しい人であり続け
おうちから子供社会へ新園児
縮むより背伸びをしてる方が良い

和泉市　岡井　やすお

信管を抜いて無理難題を言う
金がいる企画に日本呼び出され
君だから頼むと課長如才ない
貧乏性小走りになる癖がある

茨木市　藤井　正雄

後光さす妻からのチョコ食べられぬ
豆の数七十粒に歯が応え
鬼よりも寒さが怖い福は内
妻の顔口だけになる丸かじり

交野市　森本　弘風

横綱はみな外人という国技
古稀からは年をとらずに生きてゆく
七十歳気持ちは今も十七歳
良い運か頭におちた鳥の糞

交野市　山川　日出子

残照に余生を重ね響き合う
空港料企業努力のない値上げ
お歳暮の配達もない無位無冠
レストラン禁煙席に匂い来る

岸和田市　長谷川　呂万

人が好き人の間を縫い花見
誤住所に手配達する年賀状
賀状くじ末賞から見る幼稚園児
カニの旅蟹食べきれず見るも嫌

岸和田市　藪野　けい子

雑草はゆめゆめ土を選ばない
妻の後付かず離れず今日も追う
煽てられ昼飯抜きで貼る障子
お湯加減どないですかと独り言

岸和田市　木村　正剛

横綱の道遠くなる過保護弟子
民の痛み大したことでない総理
フセインとブッシュ乗せたい宇宙船
拉致問題核の行方に埋もれそう

岸和田市　井伊　東吉

いい出合い夢を託して縫う晴着
売り時のチャンス逃して懲りもせず
気づかずに逃してしまう青い鳥
番地あるかぎり配達荷がとどく

岸和田市　原　苑子

歯こぼれのように大正散る二月
ライバルに熱いうどんを奢られる
泣いている姉に弟ガムをやり
値切ったらすんなりまけて買う破目に

河内長野市　水谷　正子

河内長野市　植村喜代

優しい頃もあったのにと思い出し
出来るなら押し返したい年の暮れ
ほしい物はばあちゃんときめている
いつまでも明日があると思ってる

堺市　神原文

愛されることを知り梅白く咲き
紅椿咲いてあの子も独り立ち
麦の穂が出て不景気の鬼やらい
老いてなお春待つ心ピンク色

堺市　西村りつえ

がん張って歯が怒り出す豆の数
にぎやかな鬼を待ってる梅古木
スキーからさくらさくらのカレンダー
絵画よりゴッホで上るオークション

堺市　河内月子

雛まつりおじいおばあで梅酒など
テリトリー広げて忙しうちの猫
お隣の犬に毎日吠えられる
山口弁と大阪弁が入り混じり

松原市　國見蘭香

犬の目に癒されてます冬ごもり
超高層私が蟻に見えるだろ
身勝手を許す心も持ち合わす
春風をいれる懐空けておく

羽曳野市　酒井一壺

才能に溺れて自分見失う
ライオンもハイエナもいる会議室
責任の柱となって知る苦労
男には決断の坂待ち受ける

藤井寺市　太田扶美代

威張らせてあげるあなたは力持ち
特急に抜かれた時間楽しもう
もう六十まだ六十と呪文かけ
忘れない賀状二枚もくれた人

八尾市　宮西弥生

近すぎて遠いこれから坂いくつ
川光る過去のためらいから抜ける
寒さだけ残して男たち帰る
魚呼ぶ歌に追われて魚買う

八尾市　長谷川春蘭

天気予報図雪だるまの絵北を埋め
追えど人ふりむきもせぬ白い息
たんぽぽの土手に光れるただ一つ
再生を願う冷凍魚の目玉

東大阪市　笠井欣子

ハングル語二十四年の血が滲む
足腰を気迫でささえ八十路坂
ポリ袋下げた男の細い腕
針供養千人針をした昔

寝屋川市　太田　とし子

国挙げて豆を蒔きたい福は内
おおきにと言い過ぎたらしぽち袋
スカーフが胸にヒラヒラ沈丁花
大阪弁店の主が身構える

寝屋川市　堀江　光子

在るがままに生きると決めて去年今年
ニュース暗し僅かに和む梅便り
聞かずとも親子と分る後ろ影
年毎の花尋ね合う友を持ち

寝屋川市　酒井　勇太朗

さあ次は喜寿を目指すぞ古希の春
腰痛で来た病院で風邪貰う
休肝日なのにスコッチ下げて来る
医者嫌い院内感染受けてから

枚方市　鈴木　政子

シャロン再選またも平和が遠くなる（イスラエル）
ラジオ党いつもポッケに家事こなし
肝炎のウイルスに医師も恐々と
美智子さま御髪の白髪に見る年輪

枚方市　森本　節子

娘婿のラストフライト便乗す
立春すぎそわそわし出すヒヤシンス
ネックレスもつれ気長に春の縁
スムーズに行かない娘との会話

枚方市　二宮　山久

六十の手習いパソコン友が出来
パソコンの知恵が生みだす未来地図
退職を待ってましたと長い旅
二人目の孫抱く夢は男の子

大東市　児玉　蛙

つまずいた石の数だけ丸くなり
腕時計はずして友と旅の空
迷いから覚めてうす紅ひいて見る
裏町で静かに回す夫婦独楽

四条畷市　吉岡　修

きっとまた忘れられるさ古時計
運命線ここが一番老化した
魂は抜いたと仏はたかれる
損をする予感の方はよく当る

守口市　結城　君子

炎えていた六十歳の句の整理
楽天家にしてくれたのは昼の月
大中小鴨の一家は見飽きない
映像の富士しか見られない足に

守口市　井上　桂作

のり越えよ未来は無傷で得られない
ホームレス仕事ないので青テント
喜寿きてもまだよう捨てぬ見栄と意地
悪童と言われた昔なつかしい

横綱の門出ずばりと朝青龍
グダグダとストレス解消旧き友
献立につまり湯豆腐喜ばれ
寒空に客足遠のく小商い

豊中市　岸田　知香子

すぐ消える寒さ残してささめ雪
亡夫眠る雪よ優しく積ってよ
落椿こころ許して雪の画布
節分に巻ずし売場福たのみ

豊中市　樫谷　郁子

寒い空見上げて急ぐ子等のもと
福は内鬼も仲間に入れてやろ
正月の衿美しき古女房
裕福で他人の痛みわからない

豊中市　松岡　久留美

行く当てもなく十年のパスポート
鍵二つつけて心配性の人
壁の人誘ってダンスやっともて
無駄ですねライトアップの城と寺

吹田市　瀬戸　まさよ

前略で窓から届く春の風
人様に言えない花を咲かせてる
火星から見ればわたしも宇宙人
月面に地球のラスト見る思い

吹田市　岩屋　美明

フセインの顔見て思う独裁者
水仙が今年も五本咲きました
我が庭に名もない花が咲いている
好きだったと言えず八十路にもちこみぬ

池田市　岡本　吉太郎

叱られたこと懐かしく母を恋う
スパイスを利かせた恋を振り返る
つごうよいほうへうらないよんでおく
青空へただひたすらの葱坊主

池田市　栗田　久子

ろうそくの灯りに心洗われる
目を閉じて心を開く蓮の花
み心に委ねて和むアヴェマリア
さきがけて春を知らせる座禅草

高槻市　左右田　泰雄

百年て短いものだ傘寿越え
大正二人地酒が旨い湯のほてり
残り少ないページにメガネ買いかえる
世の中がどう変わろうと春はくる

高槻市　江原　秀夫

福の神逗留隣サクラサク
腹の虫なだめすかして今日がある
女から見ればしがない鰥(やもめ)だな
お隣は煮ても焼いても食えぬ国

高槻市　乙倉　武史

街角の銀行ひらがな横文字に
懇親会割り勘負けが多くなり
呆けたこと言うて呆けたと疑われ
歳一つ満と数えでもめている

高槻市　井上照子

愛しくて自立の吾が娘ぐっと抱く
メモ置いて母もストレス捨てに行く
幼なじみ電話はいつも会いたいね
ブティックの半額の紙目に悪い

大阪府　澤田和重

泣きごとを言うてる方がお金持ち
悪いのは僕にしとけば済む話
逃げ道を与えて攻める思いやり
ほっこりと腹を脂肪がふくらます

尼崎市　内田美也子

春の夜は独居の灯さえ華やいで
千羽鶴千の心を封じ込め
お誘いを孫から貰うひな祭り
老境へ人の別れが後をひき

尼崎市　松下比ろ志

粗っぽい事件が続く都市砂漠
梅開く街で安売り店じまい
南南東向いてもやはり暗い雲
何故か良く笑ってすぎた今日だった

尼崎市　軸丸勝巳

撫で牛の膝も冷たい初天神
リハビリの箸ガンバレと福の豆
盆栽展土が足らんと拗ねている
花遍路杖が喜ぶ土の道

西宮市　刈田泰司

ブルースもタンゴも酔えば同じ足
除夜の鐘試行錯誤がまだ続く
一年中猫はおんなじ声で鳴き
花鉢の草も図太い同居人

西宮市　秋元てる

御自慢のえくぼが皺に変ってる
一つ覚えのモカ用意して友を待つ
身に合った願い賽銭軽く投げ
なけなしの知恵と金とで生きて行く

西宮市　坪井孝一

マイボトル残り寂しい与作です
ライバルも妻とも握手したくない
厩舎見に赤エンピツがそっと来る
おとうさん頑固でもいい優あげる

西宮市　長谷川淳

春四月花見に行けぬ人もいる
人さまになぜか優しい妻の声
人ごとと思いし米寿すぐそこに
老後より死後が気になる歳になり

福袋思いがけない良い品だ
初詣で一気に鳩が飛び立った
盆栽の松の手入は父の役
きっぱりと断り言うてすっきりし

西宮市　菊池　トミヱ

探しもの一人歩きをしたらしい
遊ぼうと出て来たような赤い月
七・七忌終えればぽつりぽつり降る
白百合の花芯へ眼虫になる

西宮市　牧渕　富喜子

大切にしよう神が逢わせてくれたひと
羅漢さん中にとぼけた顔もあり
ふわふわと雪もわたしもマイペース
ＩＴの世に大安にこだわりぬ

西宮市　西口　いわゑ

断われぬマイナス遺産子に孫に
靴箱にひそめたチョコに感謝する
冷凍のうどんが続く寡婦の昼
閉店のお知らせ寒い風にのる

神戸市　木村　貴代子

三寒四温今朝は冬帽子の出番
紅梅の紅がうれしい春立つ日
血圧計に今日の機嫌をきいてみる
作り笑いの頬せき止めている涙

神戸市　山口　美穂

心までふつふつとなるどぜう鍋
懐かしの活弁に血が熱くなり
一声をかけると温い風が吹く
川柳こそシルバーライフの宝もの

西宮市　井上　松煙

今どきの古希日向ぼこしておれぬ
多機能で使いこなせぬものばかり
捨てられた猫と目が合う橋の下
あした抜く歯をていねいに磨き終え

西宮市　緒方　美津子

飯盒が形見となった亡夫思う
夕暮のメロディーとなる焼芋屋
宗教を味方につけて気が強い
古里ののどかに踊る風の盆

伊丹市　小熊　江美

明日は雪何かつぶやくシクラメン
シバレルね雪降る夜の長電話
義理チョコ廃止ホッとしてるは男性か
戦争反対紅茶に浮かすレモンの輪

伊丹市　山崎　君子

福耳も雑音拾うことがある
誘惑に勝った心が満たされず
拍子木が鳴ると瞳は主人公
口きかぬ仏に答欲しい時

三田市　北野　哲男

五センチの雪でマヒする文化都市
西風を悟りベランダふとん干す
愚痴りたい事水割りでのど洗う
相棒のリズムに乗って酔いつぶれ

姫路市　古川奮水

初詣で鬼も破魔矢を受けている
持つべきは太いパイプと七光り
農を継ぐ大根足に自負を秘め
ぬくもりを運ぶ春風待っている

兵庫県　大谷幸次郎

梅満開春先取りの花むしろ
三寒四温春手探りの猫柳
五体満足釈迦の御加護にありがとう
臑かじりやっと箱から出る娘

大和郡山市　坊農柳弘

喜寿近く迷路を未だ抜け出せず
片減りの靴に出て居た自己主張
戦争と平和経験して老いる
年金が次々消える義理出費

海南市　谷口義男

球根の生命力を見習おう
山の幸一杯抱いて紀州富士
情熱はまだまだ秘めた休火山
感謝すれば谺のように温い風

海南市　堂上泰女（泰子改め）

怪我多く心のゆるみモロにでる
もめてます大したことない発言に
多角化で借金増えて倒産す
目に見えぬ恐ろしい事多すぎる

和歌山市　宮本三喜夫

心の地図に砂漠が続く春の闇
火のつかぬ胸に記憶を埋めておく
素顔のまま見詰め合うから打ち解ける
激しくなる頭痛よ寒い過去がある

和歌山市　松原寿子

裏木戸の柊鬼も寄せつけず
南南東むくちで寿司の丸かじり
体重に弾みをつけるちゃんこ鍋
デパ地下の限定品はいつも列

和歌山市　吉村さち子

カラ出張オンブズマンがいぶり出す
スマイルを武器に不況へ立ち向かう
タダで食い不味いと言えぬレポーター
赤紙に生木裂かれた苦い過去

和歌山市　青枝鉄治

梅一輪春を待ってる白い部屋
雪空とわたしの鬱と根競べ
安定剤機嫌とる日がまだ続く
柄にない言葉に舌がもつれだす

和歌山市　玉置当代

和歌山県　中後清史

値上がりをしても煙草はよう止めず
晩酌で老化の脳を宥めてる
請求書背なに貼られて朝帰り
言い訳をすれば誤解を深くする

鳥取市　中村金祥

戦慄をおぼえ羊は群れ乱す
合併へ慣れ親しんだ名が消える
たいしたことはない公約に欺かれ
当たらないくじの魔力にまた負ける

鳥取市　杉本孝男

スランプと言う隠れ場で深呼吸
どう見てもうちの父ちゃん隙だらけ
しばらくは棒立ち親友の訃が届く
幻を追って愚かさ積んでゆく

鳥取市　徳田ひろこ

献立てに効能書きをつけておく
大盛の皿には福の神がいる
休日は七福神がみな揃う
若者のはなしに挟む老婆心

鳥取市　前田一枝

ありがとう素直に言えた良い日和
ありがたやまだ生きていた預金帳
たてに振る首を横見てまた迷う
病んで知る健康こんなにありがたい

鳥取市　加藤茶人

倖せは愚痴まで心地よく聞こえ
ぜいたくに慣れて横着病を病み
外づらがいいから妻にある悩み
子育ての遺物のような乳が垂れ

鳥取市　冨山檳榔樹

クローンベビー命の親は語らない
寒紅梅冬の嗚咽を聞いて咲く
赤セーターロマンが匂い若さ湧く
食材は地産地消で身を守る

鳥取市　春木圭一郎

図書館で自分を探す毎日だ
図書館に生きるヒントが置いてある
図書館を出逢いの場所と決めている
図書館の文化講座に夢がある

鳥取市　福島庸二

沈黙の山が一気に語りかけ
目いっぱい反抗したい時もある
百円の値打ち問うてる品の山
恋の路赤信号も目に入らず

鳥取市　田村邦昭

ぬくもりが遠く離れて核家族
白黒をあいまいにして平和なり
信念の脆さ風にも逆らえず
少年の大志ふらふらしゃぼん玉

鳥取市　宮脇道子

省エネと心で決めて床の中
休日は皆んな留守電母無風
夜の砂丘恋の温もりまだ消えぬ
豆よりも笑顔がこわい鬼の群れ

鳥取市　福田登美

鬼は外自分の中の鬼を追う
雪の中幸せくれる蕗のとう
家中が小声になった母の風邪
賑わいの中に気配り幹事さん

鳥取市　西村黙光

本棚に埃払えと笑われる
酔い痴れて舌が勝手に踊り出す
米粒が昔話を語り継ぐ
年金が大きな声で酒止めろ

鳥取県　原みさを

日めくりにスライスされる命かな
白鳥の喉の深さへたにし落つ
人脈の梢でひとり干からびる
介護法のフックに父をぶらさげる

倉吉市　山中康子

寒空に二月のこよみ逃げていく
今日という日はもう来ない夫婦みち
大切にされて素直にひとり膳
プログラムどおり賢くしゃべれない

倉吉市　牧野芳光

狂い咲き今日は冷たい風にあう
生真面目になったら顎が痛くなる
憤懣の声を道路に撒いている
野良猫に声かけてみる寂しい日

倉吉市　山本玲子

招待の酒には酔うた振りもいる
あんな顔こんな顔して福笑い
野焼きして煙にむせる愛煙家
春一番つくしん坊も勢揃い

倉吉市　野口節子

輝きが失せないうちに逢いに行く
腹帯に愛の息吹きが芽する
人間が好きで仙人にはなれぬ
お互いを杖と頼りの夫婦坂

米子市　木村富美子

かすむ窓その日その日を拭いて生き
身のほどの窓もたたいてくれる春
ふる里に土橋と牛が見あたらぬ
あと少し残った橋に油断せぬ

米子市　神庭詩郎

病弱になって妻から手をつなぎ
五百羅漢の一つ戦死の兄に似る
心電図自覚無いのに不整脈
賀状来た後追いかけてきた訃報

米子市　青戸田鶴

花時計私も春が待ちどおしい
子らの眸に魅せられ童話朗読に
納得は出来ないけれどお茶にする
橋の上冷たい風にさらされる

米子市　永井三津子

よいしょこらしょ踏んばる老いと春迎え
三途の川渡り切る足鍛えとく
本心で物が言えないのが大人
渋滞の先頭見れば教習車

鳥取県　吉田孔美子

短日を惜しんで励む花作り
短命も遺伝か兄も五十三
心房欠損蝉そっくりに生終わる
次々に入会一週間埋める

鳥取県　羽津川公乃

二ン月のけじめ義理チョコ爺サマに
日を追って尋常でない物忘れ
気にすれば日々悶悶と眠られず
いい天気運勢欄も気にならぬ

鳥取県　平井栄翁

立たされた廊下懐かし父兄会
木枯らしが今宵の膳の上変える
靴紐をキュッと結んで出る散歩
老境がテレビの音を高くする

鳥取県　国森武子

一代を農婦でおえた人ばかり
色々と話せば似たりよったりで
特別にうらやましがる事もなく
ある程度あきらめ納得して別れ

鳥取県　下田茂登子

千秋の思いで嫁の返事待つ
私も喋ってみたい横文字で
これもまた運命だった離婚劇
忘れてる過去が生きてた老いの坂

鳥取県　太田幸枝

金と力無い美男子に惚れました
お多福のかあちゃん家の福の神
どんな明日あるか夢見る高枕
米シャトル夢が空中分解する

鳥取県　黒田くに子

福は内ひ孫がひとりふえました
にんまりと可愛い顔でいけずする
飲めないが酔って泣きたい時もある
迷う事許りコントをくり返す

鳥取県　佐伯やえ（さえき改め）

三歳が字をひろい読み得意顔
春うらら遺跡に光当り出す
荒れていく地球の隅に花の種
わだかまり写経の筆にとけていく

穏やかに福を運んで来る日差し
花びらに切って繕う春障子
愛の鞭もらい力を溜めている
行動の浅い私がもどかしい

鳥取県　西川和子

面白い話茶菓子を出し忘れ
居心地のよい末席で咳払い
なにもかも雪が隠してワッハッハ
攻め守る五体だネジに油差す

鳥取県　西沖彰雄

雪のんのきずついた街白く消し
舌下錠悲しみ溶かしほろ苦い
靴下も女もやはりまだ弱い
向い風翔び立つ背なを母は押し

鳥取県　奥谷彩子

変化球愛なら素手で受け止める
畑仕事素手で野菜が良く育つ
原色が好きで個性を見抜かれる
細く長く生きた証の深い皺

鳥取県　近藤春恵

柳友が突然逝った年の暮れ（故権代康女氏）
娘や孫と共に暮らせてただ感謝
春を呼ぶ音につくしがうごきだす
水虫よ孵化して蝶になる気かい

鳥取県　山本正光

体重が増えて激減思考力
体重が脚腰攻める老いの春
よいおんな賞味期限なんぞない
瞑目のまま永眠を賜う欲

鳥取県　林露杖

羊さん不良債権食べてくれ
惜しみなく送る援助に自立せず
味見した愛が深くて溺れそう
人間を磨けば渋味生きてくる

鳥取県　小谷はるみ

踏まれても路傍の石は意地を見せ
戦争が平和のためという理屈
爆撃機見上げるだけのホームレス
戦争も平和も権利民にある

鳥取県　谷口次男

初詣でつまずいた石飾っとく
猪鍋かこみ吹雪を聞いている
義理チョコもなくバレンタインを忘れてる
凭れ合う人という字を信じたい

鳥取県　上田俊路

ド忘れと愚痴はおかしくなる手前
職業欄無職に非ず主婦と書く
花柄のステッキ買うた春よ来い
塗り残しあって絵手紙温かい

鳥取県　埒寛子

歳と共頑固に粘りへそ曲げる
あの時がチャンスだったと春を悔い
煩悩がふくらんで来る曲り角
世の中に睨みをきかせ鬼は外

鳥取県　土橋睦子

百過ぎて銅像のよう母座る
かくし味秘密にしてる夫婦仲
回り寿司考えるひまないようだ
おだやかに咲き切る老いを願ってる

鳥取県　鳥羽玲子

好きだったリンゴ供えて供養する
感謝して食べれば味も滲み出る
言い過ぎたひとこと壁を高くする
うれしいな元気で今日も起きられる

鳥取県　鳥羽直市

冬眠から覚める怖さへ梅さくら
大声で叫びたくなる海がある
先まるく母が日課の庭箒
夢で会い夢で別れるだけの恋

松江市　津川紫晃

追伸にやんわり本音見えている
シャンデリアの下で独りの夕餉とる
吊りしのぶ春の陽ざしがまぶし過ぎ
贈る言葉幾度聞いても気がはずむ

松江市　佐野木みえ

甘かったプラン低温火傷する
妬ましいほど惜しまれて花が散る
繕わぬ私シックな春に逢う
ターゲットない人生に明日がない

出雲市　園山多賀子

手の中に入れていとしい福寿草
葱届く大根届く有難さ
山小屋に浮世離れた水ぐるま
哀しみを抱いた小鳩がクククククク

出雲市　吉岡きみえ

忘れ傘わたしを待っているだろう
花散って昨日の事は昨日まで
他人には見せない顔が家にある
喪の家は矢印があり行きやすい

出雲市　岸桂子

良い事があって美味しいお茶を飲む
想い出を共有旨い酒になる
きっかけが欲しくてくぐる寺の門
全国の天気山陰のけにされ

出雲市　竹治ちかし

懐の奥に見せない顔ひとつ
仁王様がひょっこり笑い声を出し
急かすから化粧の順を間違える
はるよ春出発点に戻る老母

出雲市　石倉芙佐子

もう一人子を生めそうな恋をする
鳩の目と合って素直になる私
陽炎が昇る足元から春に
川柳に嫉妬を抱く同居人

出雲市　佐藤治代

皮財布見せる能しか無い中味
皆健康そのうれしさについ涙
どん底を嫌って逃げた妻の春
渡り鳥空一周しさようなら

出雲市　板垣夢酔

いただいた命だ明日へ精いっぱい
ちょっぴりの力を夢で倍にする
福は内どこもおんなじ事となえ
まだまだと思った孫に教えられ

出雲市　富田蘭水

立春へ梅も私も始動する
追い出した鬼が後を振り向いた
メロドラマ女すわりで見てる午後
トンネルを抜けてもやはり雪だった

出雲市　小玉満江

神棚が守ってくれたヒ・ミ・ツ
寒がりを誘って山の湯にひたる
道端の小さな息吹踏むまいぞ
健診を待っている間に風邪もらう

出雲市　伊藤玲子

前向きに若さを抱いて群にいる
輝いて真ん中にいる二十歳
恙なく役目を果し帯を解く
一輪の梅の枝から春の彩

島根県　多々納テル子

（つづき）

手をとれば誤解も泡になりました
不釣り合い言われ続けて長続き
前向きに歩く道だけあけておく

東京都　清原悦子

守秘義務を大きな声が邪魔をする
自転車も私も錆を取って春
ロボットに好きな人の名付けてやる

横浜市　巖田かず枝

第18回国民文化祭・やまがた2003

作品募集15年4月1日～6月30日

ダム＝平井　吾風選　ゲーム＝大場　可公選
米＝佐藤　岳俊選　民謡＝竹森　雀舎選

詳細は次号に

自選集

鯨呑も蚕食も世のありのまま
寂しさに食べてばかりよ飲むばかり
三日月で鉛筆削る山の家
酒行脚そないに遠く行かいでも（悼　高須賀金太氏）
チャンギーの月隊長へ頭右っ（悼　山門幸夫氏）

橘　高　薫　風

仁王さんと仲良しになる春が来た
にくめない奴にたっぷり酒を酌ぐ
病人の笑い声聞きお茶にする
ふくよかな顔して河豚を食べている
肩越しに甘酒飲みつ景を褒め

黒　川　紫　香

ぬくもりが欲しい暫くゲーテ読む
好意抱く人の棲む街雪が舞う
胸に棲む鬼があれこれ無理を言う
蛾を蝶に見せてネオンでよく稼ぎ
逢うだけでぬくもる予感花を買う

小　西　雄　々

春の膳　超特撰の封を切る
腹一杯食べぬと腹が承知せぬ
世界から見れば小癪な日本かも
新人のがむしゃら恐いものがない
エイプリルフール一杯食わされた

小　林　由多香

地吹雪に太宰の酒を購うておく
迷うことなく春の陽へ種を選る
みそ汁の香り広がる家族の輪
とっておきの笑顔一枚撮っておく
シンビジュームまだまだ旬は続きます

斉　藤　劦

飛んで来た北野の梅に会いに行く
知り人の塚か卒塔婆が立ててある
梅ケ枝餅も一寸土産に買いました
此の世では添えぬ縁の比翼塚
亡骸は偉い人ほど深く埋め

田　口　虹　汀

九九から先の暗算もして八十路
百までの素数八十路でたしかめる（11、13…97の類）
道問えば一時間だよいいですとも
跨線橋へ老若を詰めエレベーター
名物だんご試めそビールに合うそうな

竹内紫錆

旧友が次々と逝く去年今年
一枚の私遺して散った画家
一筋の道を歩んだ友が逝く
盲目の妻を残して去りし友
三人は三様なれど死は同じ

田中正坊

古時計私の過去を知っている
美しい丸を描きたい夢がある
妥協せぬ暖簾が揺れる城下町
パドックの毛並みにいつも騙される
一徹な男無印良品派

玉置重人

脇役がいいからうまく運んでる
高齢という言い訳が効いている
顔でない心だなどとくすぐられ
生きのびて二乙がたどる八十路坂
最初から調子に乗って騙される

恒松町紅

計報欄ゆっくり読んで起きて来る
経済大国なりコンビニで水を買う
風邪ひいたくらいで死ねる世とはなり
花時計咲いてやさしい風になる
気をゆるめてる間に二月通りすぎ

遠山可住

うぐいすの真似が上手になってきた
大好きな女に拉致の真似をする
死んだ真似していて飯を二杯食う
温泉行きの相棒を頼まれる
雪やんで今日も明日も日曜日

土橋螢

事故現場テレビのような血が流れ
転倒(ゆ)てから俺は矢っ張りオッチョコチョイ
口だけは元気を地で行くように転け
停止　止めろ救急車　救急車騒ぎ過ぎの声耳に
こんなことなければ入院出来ぬ大病院

西田柳宏子

肩書きの幅が世間の安全路
肩書きがとれて世間が広くなる
選り好みした肩書きで影がない
肩書きはないが名刺がやはり要る
棚ぼたの肩書きだから杖になる

仁部四郎

友最高智者医者福者結ばれる
米寿誕生陛下と同じ日の誇り
三食昼寝瞬時にお湯も沸く
縦の物横にしたがる臍曲がり
地球儀を回し溜め息吐いて寝る

野村太茂津

姉と言う一字を消しに旅支度
吹雪かれて別れが突然だったのか
雪揺れの翼喪服が重かろう
化粧していても遺体に違いない
遺書もなく遺言もなくさらばです

波多野五楽庵

感謝御礼むらくも五十四年の春
余命表訂正がいる二千三年
世相がかわる悪事をまねをする
桜の下は朗らか花びらの舞う中で
柳友と別れる杯へ花吹雪

藤井明朗

名も知らぬ人との会話長い旅
草も木も芽吹くと春が喋り出す
青い草芽吹くと炎えてくる命
心許すと風は何でも語り出す
軽やかな会話聞いてる一人旅

藤村〆女

夫婦独楽傘の上でも回って見せ
拉致と言う人質の居る遠い国
羅漢さんは愚痴を沢山聞いてくれ
先生と呼ばれ飛んでる不精髭
不景気で他人の命を粗末にし

舟木与根一

石畳踏みしめ登る男坂（万里の長城）
岩肌に初雪残る八達嶺
長城をロープウェイで散歩する
どの顔もわくわく午門通り抜け（故宮博物院）
出迎えがたのしい銅の鶴と亀（太和殿）

芳地狸村

自分史に五十五年の日記帳
大寒というのにトマト ナス キュウリ
賞味期限今日まで値引き買ってくる
じゃが芋を植える二月の畑仕事
缶ビール一本丁度良い妻で

宮口笛生

欲情の逃げ水追って風に悔い
命火のつぼみ恋する赤いバラ
ぼんやりと若い善意にあぐらかく
遅々として進まぬ余命の残り火が
ひとり旅小瓶の中で揺れている

森下愛論

桃も桜も春の時計とにらめっこ
花にかまけて時計のずれはそのままに
あと何分　あと何分と困らせる
利き腕に巻いてもだらしない時計
陽炎にいつしか時も置き忘れ

八木千代

古い書架カーマスートラそこの隅
立派だな私語を許さぬ蟻の列
また素通りかピカソの目笑うてる
長年の酷使を覗くカメラ飲む
断ち切れぬ思いに迷う冬木立

八十田洞庵

しっかりとノルマ背を押す尻叩く
満点の妻です息が詰まりだす
リストラよ神のテストに違いない
丸腰の人生なにも恐くない
桜吹く鬼も浮かれて見ませんか

両川洋々

単純な男で先をすぐ読まれ
思い違いと気付いて帰る夜の冷え
心電図に心の揺れも見抜かれる
老いてなおちょっぴり背伸びする暮し
他人のこととかく気づかううちの妻

阿萬萬的

原発嫌い太陽があり風がある
欲しい物ないから客足遠くなる
おみくじ大吉いいこと期待して終る
玄関の三ツ指本では読んだことがある
超ミニ挑戦爺サマ向いてくれません

石川倪流洞

ひとり旅梅咲く黄泉へ急がれし（石原靖巳氏）
梅便り黄泉の句会へ置手紙（高須賀金太氏）
誓願やくんち祭りを観に逝かれ（山門幸夫氏）
水ぬるむ亡母へ知らせる咲くサクラ
ふる里のサクラを想う糸電話

板尾岳人

編集に交わした言葉なつかしき（高須賀金太さんを悼む）
伸びをしてあっけらかんと生きてゆく
肩の力抜くと思わぬものが見え
いいことがきっと巡ってくる風だ
茜雲炎え立ち旅はまだ続く

奥田みつ子

義理欠いて世間だんだん狭くする
穏やかに諭して悪を覚らせる
風見鶏気ままな風に逆らわず
奮起さす友の真意が読み切れず
しみじみと回顧起伏の五十年

河井庸佑

砂時計お前正直過ぎないか
晩学のつもりの本は閉じたまま
諦めの悪い男の自尊心
根性が曲がっているのか字も曲がる
妻の勘不思議と当るから怖い

川島　諷云児

花の宴箸をタクトに盛り上がる
楢山の道にも咲いた山桜
極楽の浄土を目指す遍路旅
ひたすらに海を目指している小川
草千里遊牧の民今日もゆく

木村　あきら

菜の花と共に繰り出す遍路笠
流れても流れても川無表情
俎板の鯉いっぺんは跳ねてみる
酒だけはよせとつれない心電図
世の中の悲喜こもごもの百度石

工藤　吟笑

金太さんのことばがびっしりと句帳（高須賀金太さん）
ひょろひょろととぶ冬の蚊を遊ばせる
冬越えた大きな蝿がとんできた
スキー靴もう履くことはなくなった
パンチくう練習もするボクシング

河内　天笑

第14回 時の川柳交歓川柳大会

日　時　**5月4日**(日)　10時30分開場
会　場　兵庫県民会館9Fホール
JR元町駅西出口・阪神元町西出口歩10分
会　費　2,000円（記念品・発表誌呈）
昼食は各自（地下に食堂あり）
兼　題　「髪」　西宮　八尾和加子 選
（各題2句）「断」　堺　久保田元紀 選
締切12時　「弱い」　鳥取　新家　完司 選
「素面」　弓削　長谷川紫光 選
「零(ゼロ)」　岡山　西川けんじ 選
「太い」　大阪　柏原幻四郎 選
「雑詠」　西宮　小松原爽介 選
特別課題　「甘い」　三木　小笠原双城 選
講　演　百代の旅人「松尾芭蕉」　平山繁夫
賞　知事賞、市長賞他（兼題合点11位まで）
懇親宴　5,000円（当日受付　申込順60名まで）
◎当日ときせん賞他の表彰を行います
主　催　時の川柳社
後　援　兵庫県、神戸市、神戸市教育委員会他

第4回 井笠川柳会笠岡大会

と　き　**5月24日**(土)　締切午前11時
開会午後1時　閉会午後4時
ところ　笠岡市保健センター（ギャラクシーホール）
笠岡駅より④バス伏越下車歩4分
課題と選者
第一部　「傘」　卜部　晴美（神戸）　濱野　奇童（久米南）　久本にい地（岡山）　共選
（当日投句、2句出句）
特別課題　当日発表　高木　勇三（笠岡）（1句）
第二部　「丘」　泉　比呂史（加古川）　八島　白龍（三原）　小島　蘭幸（竹原）　共選
（事前投句、2句並記）
お　話　泉　比呂史
会　費　2,000円（昼食・発表誌）
出　句　第二部（事前投句）用紙自由
締切4月30日
住所・氏名・電話番号・所属柳社
欠席投句　1,000円　入選句後日郵送
投句先　〒714-0081 岡山県笠岡市笠岡507-68
井笠川柳会　TEL 0865-62-6200
句碑除幕式　5月24日　午前11時　古城山川柳公園
主　催　井笠川柳会　**後援**　岡山県他

奥田 みつ子 選

奈良県　江波正純

まだ幕は閉じるものかと竹を踏む
寒い朝怠け心を遊ばせる
清貧といえば貧乏格あがり
振る袖はないと胡坐をかいて生き
ドジをした話で心通じ合う
閉じられたとびら開けと宝くじ

田辺市　大峠可動

油断大敵生命線が褪せて来た
向い風追い風謎が解けますか
忘却のうたと相思のふるさとよ
仏には仏の恵(めぐし)百度石
人嫌いしっぺ返しの指を打つ
有縁無縁みんな不況に耐えている

堺市　梶本哲平

地球の裏へ不帰をも辞さぬ旅に出る
残日のいのちを惜しみなく燃やす
空港の銃持つ兵の眼は見ない
雑踏のなかで捉えた日本語
乗り継ぎが出来た天下をとったよな
帰国してめくぼの落ちた鏡見る

綾部市　藤田芳郎

添うてまだ指のサイズを聞いてない
言うことは山ほどにある笑い皺
酔いどれて妻に一筆仕る
朝帰りしてからポチが尾を振らぬ
ぼくんちにある綱渡りする財布
掴んだのは神の見捨てた藁らしい

池田市　多田契子

屈託がさらりと消えたよき目覚め
かけらほど悟りの境地顔を出し
元気な日用意しかけた遺書もどき
淡々と子に添うている老いの今
雪景色すべて私のものに見え

和歌山市　内田結実

つっかい棒ないから背筋ぴんと張る
戦争は止せと叫んでいる南瓜
乗り遅れないよう春の色を着る
口笛が耳の奥から春の土手
手抜き料理一人だからを許すまい

和泉市　横山捷也

説教がチョット途切れる熱いお茶
一番に報告したい母は居ぬ
終い湯でハミング妻は機嫌良い
嫁ぐ娘に注いでもらった苦い酒
山のよに動かぬ父の背がぬくい

日立市　加藤権悟

出稼ぎを待ってる里のモモサクラ
Uターン大地をしかと踏む素足
そして春絵馬に散る花ひらく花
七人の敵をむかえる髭を剃り
一本の葦はひたすら風に耐え

横浜市　芦田鈴美

義理チョコの振りで本心嗅いでみる
カーナビに先ず我が家まで案内され
おばさんのパワーが欲しい日本丸
愛犬のドレスユニクロ連れ歩く
さざんかの垣根あたりの暖かさ

岐阜市　平野あずま

寒の水飲み干し五体引き締める
太陽より北風好む雪ダルマ
セールスも同じ音色のドアホーン
発泡酒お前も庶民裏切った
手紙焼く一瞬炎赤く立つ

鳥取県　澤裕子

春うらら口笛吹いてみたくなる
影法師だけは私を裏切らぬ
水平線見たくて坂をかけのぼる
好奇心そそる内緒の好きな耳
自分史に添えておきたいシルエット

和歌山市　土屋起世子

あの人もこの人も好き冬みかん
噂など軽く流して冬の駅
軌道修正短く髪をカットする
巣立ち行く子の頼もしさ憎らしさ
少しだけ跳ねてみようか春日和

大東市　南原正和

今朝の顔夕べの顔を知る鏡
ナツメロの映画に重なる若い日々
なに着てもお似合いですと試着室
嘘を吐く幸せ守る嘘を吐く
ホルン吹く飛びくる鹿の息白し

高知市　小川　てるみ

いい事が降って来そうな青い空
明日というドラマがあって生きられる
戦争の好きな男が吠えている
菜の花へ無情土佐にも雪が降る
わたくしの心を覗く冬鏡

高知県　桑名　孝雄

武士道も騎士道もない核論議
ヒイラギを植えて鬼門の守備固め
自販機の酒でロマンは語れない
小三の孫が僕より論理的
卒業をされたおもちゃの独り言

高知県　近森　功

八十年歩き続けた細い足
生命線ちょっと修正したくなる
あの時の火傷にこりずマッチする
虹だいて割れる運命のシャボン玉
袴も足軽もいる自由席

今治市　塩路　よしみ

子育てが花道妻は光ってた
迷いから脱皮少年風になる
立ち枯れの蓮に未練の意地がある
もう一度翔び立つかまえ羽づくろい
愛百態いのちを燃やす火を燃やす

愛媛県　花岡　順子

若者が集うと明日の話する
立ち話ゆっくり回る花時計
ジョーカーを使いこなせぬ不整脈
毒舌という暖かい鞭もある
間違いなく明日はしわが増えている

東かがわ市　原　賢

ライバルの辞書見て負けたなと思う
尖らせた口が文句を言いたそう
貧乏神予告もなしにやって来る
言い訳はよそう正論が筋とおす
ダイヤより料理上手を褒めてやる

東かがわ市　伊勢　八重子

支え合い福も分け合う長い道
喜寿の母真ん中にしてハイポーズ
母という釘一本に支えられ
一言が過ぎて無口がまだ続き
じんわりと母の一言効いてくる

府中市　馬場　利子

沈黙の土とたたかい虹を追う
淑女にも悪女もなれぬリンゴむく
古里の昔を語る風が好き
錆ついた風車に残る春の音
陽溜りを包んで母の童歌

今日の月幸せそうだまん丸い
命生みいのち育くむ土の幸
お返しの笑顔が嬉しボランティア
群集の流れに痩せていく正義
ほっこりと土持ち上げて春隣

岡山県　国米きくゑ

ふきのとう春の便りを連れて来る
アンテナを広くときめきあるように
腰曲り笑っているのは影法師
歳だとは言わないようにしています
余白でもなければ息が詰りそう

松江市　山根邦代

煽てられふんわり春の風に乗り
それとなく五感に伝う春の音
傘寿までせめて跳ねたい痩せ蛙
気遣いへ子供じゃないと子が笑う
形見分けぴたり体に合う絆

島根県　武島ちよえ

愛情を刻んで歴史くり返す
新しい年だ笑顔を積み上げる
孫のこと話せば笑顔すぐ戻る
風向きで聞こえなくなるいい耳だ
ストーリーいくつも越えて黄昏れる

鳥取市　永原昌鼓

ホカ弁に負けてなるかと腕ふるう
親は子に自分のレール敷きたがる
好きだけどやっぱり胸に秘めたまま
休耕田無策のままの草いきれ
誤字脱字あっても温い母の文

倉吉市　酒井芙美子

丸い背で立てば料理の手は抜かぬ
つんどくを読めって雨が雪となる
凍る道足を運べば肩が凝り
老いの知恵聞かない見ない振りもする
貧しくも心豊かな日々望む

倉吉市　青砥菊枝

夢だけは大きな夢を見るとする
通り雨やむまで無視をきめこもう
グラビアの大きな胸にあこがれる
法律を犯さぬほどの悪である
ハードルは高いが決してあきらめぬ

鳥取県　前坂なお美

しあわせは欲を出すほど遠くなる
遅咲でいいんだあせることはない
先ず笑えそれで元気が出るだろう
がんばった自分を誉めてやりたいな
あれこれで通じる夫婦早六十路

鳥取県　奥田保子

薄墨に妥協許さぬ和紙の意地
笑おうよ七福神の輪の中で
畔道に父よ母よと曼珠沙華
おはいりよ鬼は福はと差別せぬ
卒寿なお母は元気に野良仕事

鳥取県　福西茶子

泣き笑いごっちゃな顔で生きている
仏間の柱何万巻の経を聞く
落葉舞うふわり地蔵の頭なぜ
人の道行くほど奥の深さ知る
逃げ道を開けて息子に意見する

鳥取県　西垣美知子

反逆の影絵がゆらり揺れている
花束を貰った日から敵が増え
真っ白な地図埋めて行く子の巣立ち
車間距離守り大人の恋進む
ヒーローもいつか挽歌を耳にする

奈良市　乾春雄

朝刊が冷凍で来る寒なかば
温水に愛を感じる寒の朝
寒肥の効き目どう出る春を待つ
いいことがあると買いたくなる土産
幸せは妻の料理が口にあい

神戸市　木村忠義

巣立ちせぬ雛に気をもむ親ごころ
涙など見せぬおふくろ陰で泣く
時どきは群れを離れて考える
鬱憤が積りつもって崖っ縁
挫けずに心に春を持ち続け

神戸市　山口光久

ノックする前に言い訳考える
似た過去があって私は笑えない
今年こそ恋の方程式を解く
切り札をまだ持っている笑顔
友達をかばう子の目を信じたい

神戸市　両川無限

春が来た気分もちょっと桜色
若い頃無かったものと失せたこと
なんぼでも人は居るのに犬が供
手探りのまま人生も果て近し
前例という物指しの不確かさ

泉佐野市　稲葉洋

善人の仮面がちょっとずれている
踏み込まぬ線引きをして無二の友
プライドをくすぐる高い化粧品
相槌を打っただけです共犯者
飽食の顔がラーメン屋に並ぶ

河内長野市　石堂潤子

岸和田市　雪本珠子

歳重ね生きる喜び日々感じ
勇気あるその一言で場が和み
ストレスを逆手にとって活力に
いつまでも自由になれぬ影法師
伝言板ねぎらいの文字書き添える

吹田市　木村無禄

物知りと言われ事典を買い漁る
夢の中僕は昔のアスリート
痩せた身を密かに浸す露天風呂
夜のしじま今日の内緒を抱いたまま
もう少し生きて居たくて南無阿弥陀

吹田市　須磨活恵

春風に遠い希望がまた燃える
信念を貫く釘は曲らない
諦めたらあかんと春の風が言う
埒もない自問自答をくり返す
パレットに倖せいっぱい春を溶く

吹田市　木下敏子

水飲んで朝の散歩に気を入れる
ストレスを体育館へ捨てに行く
残高にあわせ描いていく余生
つまずいてから反省の足の裏
お互いに解け合う彩を混ぜて生き

吹田市　二宮栄子

嫁病んでまた九州の人となる
三猿飼って嫁の代役しています
当てにされる方が花だと言い聞かせ
息子の心中読めて張り切る代理主婦
帰りたい児等の瞳が帰さない

高槻市　田中初恵

一癖があって衆より抜きん出る
ほどほどの自信が人を輝かす
建前の隙間に本音見え隠れ
騒音の中で孤独をかみしめる
春宵の街に別れてワイン買う

豊中市　藤井則彦

二番手につけて後ろを見るゆとり
すやすやとロマンスカーの一人旅
ここだけの話が弾む無二の友
毎日が休養なのに肩が凝る
止まり木も飲み友達もやがて減る

羽曳野市　福田悦子

スキップをする気にさせた春の風
友達が出来たか春のランドセル
一本の桜に人の和が出来る
春ですよ墓にも舞った花吹雪
見せたかった桜に浮かぶ亡母の顔

枚方市　二宮紫鳳

故郷の春がチラホラ電話口
春はそこ孫を待ってる赤い靴
片言の孫のコールに元気づく
鞍馬路へ二人を癒す露天風呂
子ら巣立ち空き部屋二つ淋しそう

八尾市　松葉君江

気のゆるみ怖いまさかが待ちうける
冗談を本気にされてうろたえる
押し入れの国旗むかしを語りかけ
反抗期過去の我が身をだぶらせる
ストレスを癒してくれる母の海

八尾市　田中トシエ

ナベ囲む湯気の向こうに母笑顔
売り言葉買ってしまった春のうつ
正直が取り柄で青い鳥逃がし
平仮名の多い便りに情がある
押して見る車椅子にもコツがある

京都市　清水英旺

冬枯れた樹にひっかかる凍てる月
鬱の気が天空の青に昇華する
酒の席手酌寂しい烏龍茶
つくばいの厚い氷に石つぶて
干飯に群がる雀着ぶくれて

京都府　前上英一

先人の足跡慕う回顧録
寄り合いの団地乾いた風が吹く
千羽鶴翔び立つ頃か薄日射す
本心を探る言葉が的を射る
遣り遂げた祭のあとの空虚感

東京都　やまぐち珠美

祈るときひとは無心をてのひらに
怒るより悲しくなった唇を噛む
物騒な遺品を過去の火へくべる
天秤にオレしか載せぬ一人っ子
崖の絵を飛び降りてきた青い鳥

武蔵野市　亀井円女

おおきにとはい一言で円い仲
はんなりは大阪生れええ言葉
勇み足またやりました元気です
憎いほど皺を見付けるひる鏡
八十路でも愛の詩なら大声で

秋田県　湊修水

水をやり花の笑顔と話する
約束を違えぬ花に安堵する
音の無い部屋を残して友は逝く
思い出をたどればうるむ走馬灯
大雪が老いの心を埋めつくす

支え合い金婚まぢか歩は軽い
やんわりとのばせば心皺も消え
花便り友の消息連れてくる
余白には大きく幸と書いてみる

鳥取市　横田春名

懐メロの歌手ビロードの声を持ち
物忘れ脳も水洩れするらしい
名案がポンと出て来た朝の道
過去を焼けばダイオキシンが目に沁みる

東京都　井上つよし

真相のそばまで行って以下次号
一年の若木の伸びよ孫の背よ
白票とするささやかな自己主張
人という文字を支える妻がいる

札幌市　三浦強一

人生は夢　川柳は夢の夢
往診の主治医に風邪をうつされる
百歳で百万やると言われても
いずれ散る花と知ってか咲き競う

河内長野市　大西文次

桃の花胸に明かりの点る色
お返事はトラが優勝した時に
パラサイトを卒業させた赤い糸
瀬戸内に鰆が来たら春はそこ

岡山市　大森純子

飲みこんだ言葉に腹の虫騒ぐ
湯豆腐と政治改革すぐ沈む
豆拾う子なく追い出す鬼も居ず
添え書きにほんのり温いものを見る

八尾市　與田明

児の笑顔心のひだに解けて行く
旅の前女ごころが顔を見せ
老いた今手作りびなに春を待つ
心にも晴れ着を着せる春間近

八尾市　脇俊子

唄声も脳もまだまだ元気です
一輪を挿してテーブル暖かい
風花のふわりと鼻の上で溶け
腹の虫一夜明ければどこへやら

島根県　菅田かつ子

勝ち負けもゴールもなくて夢がある
心得る猫も甘える女正月
不器用のげんこつ一つ躱される
片手袋指の形で泣いている

八尾市　平川幸枝

如月の旅は三原の仕込桶
深呼吸しても昭和を語れない
出無精はあかんと寒中見舞い出す
路郎師と呑んだ店だす阿倍野裏

草津市　久保和友

アルゼンチン　松井美稚子

一株の竹を植え込み日本呼ぶ
実らないピラカンサとの日向ぼこ
澄む水に祖国の逆立ち恋し過ぎ
数知れぬ試練にたえて余白読む

ニューオリンズ　阿良喜　聆

亡き母のおせちの味が懐かしい
屠蘇一ツ頬そめし母思い出す
親不孝未だ胸にある重い石
日記帳どの頁にも孫が居る

唐津市　坂本兵八郎

退屈をさせてくれない妻がいる
ときめきが散歩コースを決めました
子の育ち別のレールを走り出す
君なりに咲けばいいよと水を遣る

南国市　小原圭二

車椅子押して段差の重さ知る
孫の世話焼いたあげくのオフサイド
コーヒーの匂いがやっと朝にする
戦争のうわさを遠く聞く平和

今治市　渡邊伊津志

リズミカルなくらし楽しむ心から
やるからにゃ一所懸命向かうだけ
全力を尽くした汗はひからびぬ
知らんから教えてもらうのが楽し

今治市　野村清美

静寂にポトリポトリと落ち椿
日だまりに昔話の花が咲く
吹き溜まり枯れ葉が集うしゃがれ声
叱られて情け感じる言葉尻

愛媛県　黒田茂代

落葉してポプラのっぽを曝け出す
冬の雨街が明るい傘の花
回れ右左と気持ち切り変える
閃いたヒントをものにまだ出来ず

愛媛県　宮本末子

見栄捨てて捨ててさわやか我が余生
大切な仕舞いどころをまた忘れ
初雪は父母の国から来た気配
飼われても野性は失せぬ雉子の面

倉敷市　撰喜子

旅衣脱げば厨の主婦の顔
彼岸へも持って行く気のあれやこれ
買い溜めて賞味期限にあせり出す
携帯に孫と亡夫のツーショット

出雲市　加藤スズコ

汚れ消す雪の正月祝い膳
農に生き長寿足跡子に遺す
一仕事終えて安らぐ椅子がある
風邪引くな亡夫の口調で子は帰る

出雲市　荒木英子

安らいで今日という日を振り返る
わたしにも一日暮れるスケジュール
風だより花の息吹も聞こえ来る
嬰児の十指の開き春を呼ぶ

出雲市　川島和歌子

いい笑顔長寿を祝う福寿草
故郷の駅立てば迎える風の音
ほのぼのと程好い燗の雪見酒
大家の絵分からぬままに見て歩く

島根県　毛利幸

親切が時には仇ではねかえる
老父母の元気な声に生かされる
はればれと気分大空闊歩する
年輪が顔に漂う六十路坂

島根県　福間博利

市になれば税金下げると言うてない
前向きに仕事がくると湧く元気
何もすることがないのか長電話
二人ともこれでいいのかよくねむる

鳥取市　河田のり代

可愛い孫の憎まれ口にキス返す
ダイヤ婚目指す夫婦の意気が合う
愚痴を言う愚痴を聞いてる仲の良さ
重い荷を背に負うて行く道楽し

鳥取市　岡田信恵

古稀過ぎて笑って暮らす日々願う
手作りを着せて喜ぶ孫の顔
必要とされる時ほど幸せだ
逃げ腰の自分を恥じるむちをうつ

鳥取市　森美智代

健康管理怠けたつけの医者通い
歩調が合わぬあなたとわたし右左
少しだけ灰汁も残して生きて行く
本音でしゃべる私はいつも斜(はす)の席

倉吉市　森川あらた

神様が決めたレールの上歩く
馬鹿になることも大事と教えられ
人形はわたしを騙したりしない
ポンコツと言われないよう背伸びする

米子市　足立由美子

どの窓もやる気いっぱいあるらしい
息抜きの窓があるから蘇る
情報の窓もいつでも開けている
ひとつだけいつも笑顔の窓がある

鳥取県　平尾菜美

六十路坂つかずはなれず息が合う
生きべたな靴がおやおや身軽いぞ
言い訳はよそうよポトリ寒椿
哲学を極め尽くして森の中

新春は夢を肴に酒を酌む
降れば嫌降らねば淋し冬の朝
外は雪こたつは老いの話聞く
喜寿近く余生のプラン考える

鳥取県　岡村孝明

祈りのなかに花道が開かれる
末長く秘密を持たぬ狭い庭
続編がぞくぞく春をうたわせる
だだこねた熱い視線を抱っこする

鳥取県　竹森富久江

難問をふたりで解けばいとやさし
汗と恥　書をかくことも呆け防止
うれしい時悲しい時も酒の席
来る春へちから溜めてる冬木立

鳥取県　吉田弘子

初対面心の化粧厚いまま
今年こそやさしい風と会いたいね
捨てて来た夢を肴に酔いつぶれ
告白へ包みのチョコが溶けている

鳥取県　細田裕子

張り替えて和紙の匂いのする障子
窓拭いて小鳥のダンスよく見える
ゆっくりと歴史の道を散歩する
朝の陽を拝んで精気みなぎらせ

鳥取県　山岡久枝

鰤大根冬に勝てそな力湧く
満点の春に頬摺りしたくなる
そう急ぐな輝く時がきっと来る
後々のために苦労も拾っとく

鳥取県　蔵本悦子

初詣で無神論者もはしごする
土筆つみ春の息吹を膳に盛る
何にでも馴染む大根出しゃばらぬ
親の夢子の見る夢に重ならぬ

鳥取県　平木公子

無職だがタバコを買って納税者
生活は低く思いは高く持つ
パソコンがなんだ私は字が書ける
もう一度訪ねてみたい赴任先

鳥取県　西原真一

亡母の歳越えて私の役果たす
人生は泣く日笑う日やじろべえ
笑う日を明日もつづける自信もつ
うれしい日今日を冷凍保存する

鳥取県　橋谷静江

雑談の中でヒントを思いつく
最初はグーそれから個々のストーリー
へそくりを始めた頃は若かった
ありがとう一言ですむお付き合い

鳥取県　山下節子

古本処分過去軽くして旅支度
健康診断安心をして無理をする
歳重ねいさかい避ける道探す
仏壇へ今夜の無事を頼んでる

和歌山市　今　一歩

フェイントをかけたつもりの落とし穴
ひと言が淀み水捌け悪くなり
相談に六法めいた返事され
勇気ある意見を吐いて辞める腹

和歌山市　喜田准一

四苦八苦みな川柳に吐き出そう
老いてゆく日々ユーモアをちりばめて
ユーモアの分かるお医者でリラックス
自己主張あってそれぞれ子が背く

和歌山県　森下順子

人が好き焼き芋両の手で包む
七日目に会釈の人を思い出す
追憶は優しレールを刻む音
故郷は過疎で魚が新しい

和歌山県　辻内次根

間の悪い時はおとぼけ決めている
なるほどと唸らせている知恵袋
家庭内別居で休みやり過ごす
角界も日本男児を待ち望む

和歌山県　中村君枝

野菜との対話の中味妻に告げ
聞いてほし人を選ばぬいい話
めだたない補聴器を買う自尊心
老いたとて男であると背を伸ばす

和歌山県　村中悦男

わたくしの受賞喜ぶ夫がいる
一つ買い一つ捨てて豊かなり
いざいざと掛け声ばかり冬の朝
なんびとも夢見る自由奪えない

神戸市　田中章子

棒読みで総理そろそろ賞味切れ
物言わぬ初孫出せと電話口
初節句孫の笑顔で座が弾む
ヒソヒソと飲む相談を子機でする

神戸市　伊勢田毅

自覚ない若者親になっている
凍る夜の靴は屋台を知っている
もがいても迷路の出口分らない
土壇場になると力が湧いてくる

神戸市　山田婦美子

ゴールイン　スタートですと祝辞述べ
生涯に二三度男の顔をする
枇杷の花目立たなくても寒の風
深い川相談ごとがあるようだ

尼崎市　林昭三

還暦を越えて人生二毛作
行き届く心配りに姑は揺れ
昔気質従いて行けない世の運び
ゆっくりと胸の痛みを消す月日

尼崎市　河津正治

力みすぎて未来の絵図がまだ描けぬ
シャルウイダンス愛の轍を確かめる
振り向けば敵も味方も待つ楽屋
一汁一菜この手で貰う小さい幸

伊丹市　延寿庵　野　靄

グルメ旅入れ歯安定剤を買う
早起きを日の出と競う万歩計
旅帰りやはり落ち着く古寝間着
妻が茶を黙って淹れる通夜帰り

川西市　井本清山

茶柱に夢の奇跡を待っている
諸行無常晩鐘のかげ亡夫といる
風邪嵐去ってひとりの湯に浸る
縺れ糸解けて寝言も楽になり

篠山市　谷田多美子

クラス会恩師のほうが若く見え
色紙換え季節先取りして暮らす
相槌を打って事無く日が暮れる
携帯の会話が弾む土手の道

三田市　石原歳子

老いるなら溌剌過ごす寡婦の知恵
カラオケの余韻へ月も仲間入り
踏む草も春への息吹散歩道
異国から眺めた夕陽同じ色

兵庫県　黒崎美紗子

老い雛も出せば微かな息づかい
細腕で積んだ積木は崩すまい
咳をして咳の数だけ愚痴を消す
程々の幸せでよい鈴を振る

大阪市　三浦千津子

百まで生きる地獄の鬼に嗤われる
目覚ましに想う喇叭の音がいい
治らないものに老医の悪筆よ
熱し易くて冷め易くして善人だ

大阪市　尾崎黄紅

酒とろり大言壮語の顔になる
ねじり消すタバコに自信のぞかせる
沈黙の対話がながい尉と姥
以下余白こんな贅沢手離せず

大阪市　升成　好

捨て猫を宝のように抱く娘
鉢植えに当たったボール投げ返す
バンダナを親父が巻くと鉢巻きに
間違って掛けた電話がキューピッド

大阪市　井丸昌紀

さわやかな過去の話に嘘がある
いい出会いありそう枕かえてみる
坂道の途中で妻を振りかえる
自分史にまだいきいきとした余白

和泉市　千葉　武

料理教室申し込みから尻込みす
エプロンの顔見合わせて歳探る
胡瓜もみ爪は削いでも切れていず
あれは何処それは何処かと妻を呼ぶ

和泉市　小坂　凡英

背伸びの児赤い実千切り雪うさぎ
廃館に来て欲しかった人の波
四代のおんなばかりの雛の間
嬰の笑み覗いてみたい夢のなか

泉佐野市　備後　三代子

騙された振りを楽しむ四月馬鹿
酒一合これで充分古希の春
胸襟を開き切れない休肝日
朝の鏡今日を見据えて歯を磨く

大阪狭山市　羽田野　洋介

温もりへこころ残しておいとまを
エプロンへエンジン起動言い聞かす
咳きこんで待ち侘びてますお水取り
きな臭い戦争止めて　叫びたい

柏原市　永浜　加津子

健やかに老い順調に呆けている
ふわふわと孫の守りして日が暮れる
専用車またも女の陣地増え
ノーベル賞あんたまだかと婿に聞く

交野市　田岡　九好

終戦で拾うた命ながらえて
丹念に古都を歩いた日の遥か
凍てる朝しんどいだろう現役は
青テント今夜の寒さいかならん

河内長野市　木太久　正一

花は咲くただひたすらに咲いて見せ
花は咲き散った桜は忘れられ
同窓会裸でものが言えそうで
峯打ちの情けが後に分る人

岸和田市　亀井　皎月

縄のれんみんなストレス捨てに来る
サラ金のCMどこも明るいね
骨太を畳み始めた小泉さん
ぬくもりと笑い残して孫帰る

岸和田市　坂口　英雄

宝恵籠に見とれて福を抜き取られ
福もらう顔それぞれの足運び
蟹つつく笑顔に手形などは無し
冬ぬくし今日年金の振り込まれ

堺市　藤井　一二三

春一番ゴビの砂漠を手土産に
飲める賞候補が多いわが家系
いい人に会う日は風もワルツ調
春風に春と気付いた退院日

堺市　柿花和夫

頼りない男に母性くすぐられ
特攻とだぶる悲壮な自爆の子
もう追いかけてくれなくなった影法師
傾いた老舗を嘆く鬼瓦

富田林市　稲川惠勇

抱え込む病ひとつを飼い慣らす
誰にでも笑顔振る舞う生き上手
片隅に寄るどんぐりの内緒ごと
後継ぎが都へ土を蹴って行く

羽曳野市　森下一知

縄文の美人で妻の太い腕
縄文にスローフードのグルメたち
共生を社是にリストラ社訓とし
憂国の士となる僕の三箇日

羽曳野市　吉村久仁雄

川柳を学んでいのち燃えている
今日を消し明日へ挑むやせ蛙
何もかも話せる友がいて嬉し
風カタコト南の便り連れてくる

東大阪市　田中美弥子

土俵にもグローバル化の嵐吹く
故郷は美味い煮付けと母がいる
感動を土俵に埋めた貴乃花
修身の教え抜けない戦中派

枚方市　小川良吉

いろいろな音で目覚める大家族
我が生き方夜空の星にそっと問う
昨日の問いに答え無いままた問いが
出世道逸れてもあった人の道

枚方市　大昇隆広

はなやかな笑顔のうらに涙あり
言いすぎを笑顔でかえす妻の知恵
快方につれて優しい夢を見る
クラス会ニトロ見せ合う歳となり

藤井寺市　西村栄一

年一度今日は鰯もそり返る
灯明の影凛として二月堂
何故に生きるか月に問うてみる
日溜まりに背もほんわかと軽くなる

藤井寺市　吉田喜代子

人生に往復切符あったなら
残り雪集め可愛い雪だるま
愛されていると信じて生きている
残雪も解けたと老母の便り来る

藤井寺市　伊藤アヤ子

藤井寺市　若松雅枝

影法師動き始めた選挙戦
足もとを見ずに遠くへ行きたがる
布鞄亡母の刺繍が生きている
喜寿傘寿今日一日に感謝して

藤井寺市　増井ヨシ枝

闘病の友の笑顔に励まされ
黄泉からの亡夫の便り待つ日暮れ
正座して良い話待つ春日和
良い話くるのか耳がこそばゆい

八尾市　中島春江

焼芋よお前こんなに高値かと
頷くのみ孫との会話噛みあわず
電話帳には亡夫まだまだ健在で
寒いねと娘のでんわ温かい

八尾市　西川義明

妻の風邪治って部屋に風通す
ワシ掴み心の鬼に豆を撒く
春日和　服も笑顔も軽くなり
弾む音郵便受けによい知らせ

大阪府　藤井郁代

春一番桜一瞬花吹雪
春風と新芽摘み取りよもぎ餅
就職で希望に満ちた孫の顔
老いの坂うき立つ心希望湧く

大阪府　小栢こずえ

手間かけてお金遣わぬ老いの知恵
もう少し夢の続きが見たかった
健康に良いから粗食しています
入選の便りポストに花が咲く

大阪府　高木道子

霜柱うれしくなって踏みしめる
還暦を迎えて赤が好きになり
雑草の芽も愛おしい老いの日々
陽のシャワー浴びた布団で春の夢

大阪府　前田あすか

アメリカ産の節分いわしでっかいな
トンガ産のかぼちゃも同じ黄色だな
散ってから名横綱と褒めそやし
時に鬼時にほとけのわが迷い

大阪府　東文江

墓参り思い出話花そえて
生きている暑さ寒さにたえながら
百歳って長いようでも近くなり
春つげるニュースに心うきうきと

京都市　三宅満子

芽吹き待つ根にたっぷりと肥料やる
節分は戸締りゆるめ福を待つ
凍りつく水面に遊ぶ冬の使者
球春へ快音聞く日待つファン

孫自慢相槌だけで聞いてない
女房の留守だ一杯呑むとする
どうがまんしても体重計はふえ
ボランティアですと本心あかさない

新潟県　高野不二

待ち合わせかけ寄る様のよい仲間
往く道は皆同じですいそぐまい
空想に夢ふくらませ冴えてくる
九十歳階段一歩前進す

静岡市　中西雅

結婚をしよう忍耐力がつく
サンプルで試す美人になるくすり
CMの笑顔不気味なキャッシング
バレンタインきっと夫は待っている

横浜市　川島良子

誤解まだとけず友情軋ませる
百歳が生きる見事な平常心
老いでしょか病気の話ばかりする
一歩引くわたしを卑怯だと思う

横浜市　近藤道子

煩悩の迷路が続くエンドレス
音もなく減る人生の砂時計
マンネリの手がパンドラの函にのび
笑ったら笑顔に会えるブーメラン

横浜市　秋元和可

温暖化当てがはずれた温度計
出来るなら冬眠したいこの寒さ
日溜りに冬も元気な蟻見付け
豆まきの声も聞こえぬ街になる

横浜市　金森徳三

移された移してないと咳しあう
ヒデ　松井　他所の子逞しく育ち
蘊蓄と摘んだ七草粥に入れ
産地表示魚困惑してるかも

横浜市　長島亜希子

指先についた泪をそっとなめ
言いすぎた後の和解にみかんむく
花便箋女はいつも若さ欲し
しなやかに生きるがための嘘を言う

野田市　那賀島雅子

正論を春一番が連れてくる
やるだけはやった勝機に恵まれず
耳打ちが隣ばかりに良く聞え
自分史はところどころに夢の跡

日高市　根岸方子

予防接種しても食い着く鬼に豆
雪山に発車する声縄電車
喜寿と言う未だ大人にほど遠し
風邪癒えてシクラメンとの日向ぼこ

青森県　福士トキ

富山市　松見たえ

脇役に徹した母の心意気
したたかに生きて八十路を楽しまん
嫁姑仲が良いのにまだ不満

八尾市　笹倉ひろし

少年の心大志に満ちている
知恵の輪を貸そうか国の金庫番
魂も居場所を探す老い支度

藤井寺市　俣野登志子

手術無事済んだの知らせ茶が旨い
凶と出たおみくじちょっと気にかかる
空気にはまだなってない修羅もある

高槻市　大崎侑子

女　妻　母を演じて黄昏れる
年寄りの知恵が役立つ決まりごと
身構えて歯の浮くような世辞を聞く

大阪市　伴洋子

沈黙は有無を言わさぬ自己主張
失言を無言で責める目に刃
悲しいと口笛さえもしめりがち

鳥取県　竹信照彦

海鳴りに肩を寄せ合う舫い船
忙しくなれば無くなる思考力
夢のある話を持って来る詐欺師

子羊とたわむれ遊ぶ陽が温い
願かけへ孫にひかれてつつがない
散歩道春のおとずれ感じとる

鳥取県　藤山弘子

仲間にもちょっと苦手な人がいる
本音言う妻の小言は痛かった
温まり鍋もくつくつ嬉しそう

奈良県　藤村重之

努力して掴んだ幸は逃がさない
触れたくはない古傷にさわられる
無理にとは言わぬと無理を言ってくる

高知県　百田幸

いつまでも信じることにしてひとり
産声の初孫には名前呼ばせよう
冬枯れの山で小さな芽に出逢う

鳥取市　大坪天涯

揺れる心に春風ほしい昼の月
雪景色いやしてくれる福寿草
蕗味噌で熱燗すすむ夫笑顔

府中市　岩本雅代

ふるさとは霊石山が見えるとこ
厳寒に犬もひっそり閑として
人生は教科書通りには行かず

鳥取市　近藤秋星

銘仙も柄を忘れるほどむかし
観光を兼ねて来る客待つきずな
口癖の泣いて帰るな父やさし

宜野湾市　杉谷一栄

立春の声で重たい腰をあげ
生まれ出る佳句は匂いを持っており
己が字となして一気に書きあげる

唐津市　岩崎實

人生の達人何か彩がある
卒業式終われば私服街へ翔ぶ
春の香りパステルカラーのチョコを買う

高知県　貞岡佐紀子

心ない人が自然を踏み荒らす
雑踏に押され孤独がついて行く
ゆっくりと仕舞い風呂での一句二句

松山市　山之内八重美

荒れ狂う海へ無言のコップ酒
留守番が豆腐肴に手酌酒
兄弟がライバルだった子沢山

愛媛県　安野案山子

金ゆえに命絶つ人奪う人
仲直り新婚気分に螺子を巻く
きな臭い花火が上がる消費税

香川県　松村輝夫

踏まれても花咲く草に教えられ
鈴の音やチョウも道づれ春遍路
わだかまりも話せば晴れる胸の内

香川県　向山治延

逃げられぬ老いと素直に付き合おう
丁寧に言われた一語突き刺さり
言いそびれ聞きそびれして老い平和

宇部市　高山清子

待つことが苦手な母のゆで玉子
北側にホッとする場所四畳半
粉にして節分豆を食べる歳

松江市　松浦登志子

桃活けて雛さま飾る部屋は春
愛嬌のいい子だ未来広いだろ
波の間に謎秘めたまま日本海

松江市　松本知恵子

子を思い星空見ては夜が更ける
孫二人お手玉作ってはしゃいでる
丸い顔姉妹二人母に似る

出雲市　栂ミツヱ

コーヒーに抹茶煎茶という家族
それぞれの家風出雲はお茶どころ
諍いも十時三時のティータイム

安来市　原煩悩児

島根県　持田多輝子

野暮な事は言わずにおこう春のうつ
亡夫の歳越えて長らえ春彼岸
ハミングを桜吹雪の風に乗せ

鳥取市　山口千代子

言いたいがいってはならぬ深呼吸
仏間には生きているよな亡夫の顔
親しさも一線引いて長つづき

鳥取市　西尾敬之介

鴨鍋が里の噂で盛りあがる
命運がつきてあきらめ考える
語り部の面白おかし所作まじえ

鳥取市　谷岡清子

底辺は世の裏表教えくれ
温もりを柚湯に貰い気も解ける
朝月に願掛けようか福こいと

倉吉市　前田喜美子

背を伸ばし勇気をもらう赤い靴
赤ちゃんを見ると笑顔になる不思議
筆箱が背中でおどる一年生

倉吉市　大下智子

セーターの温みと似てる母の膝
犬飼って楽しい会話弾ませる
末っ子の話で茶の間楽しませ

米子市　小塩智加恵

自信ある足がO脚見せ始め
抜け目無く爺と握手で帰る孫
日本人居ない土俵に魅力失せ

米子市　猪森スミヱ

弟へゆずるセーター母の指
Gパンの小窓を覗く膝小僧
犬　猿　きじ連れて太郎は核退治

米子市　池尾保子

へらず口たたいて孫に嫌われる
名画見た帰りはブラック珈琲か
カタカナの手紙にまたも泣かされた

鳥取県　池澤大鯰

片意地もぬくもるにつれ解けていく
のびのびと育った末に臺がたち
過疎の村伸びるにまかせ八重葎

鳥取県　岩崎和子

声高でお祭りマンボ好きな女
人寄ればその楽しさに酔いしれる
ぎしぎしの心の手鞠弾まない

鳥取県　鈴木一弘

限りなく夢描いては屑と捨て
丸いこと言っても角が見え隠れ
健康な五臓六腑にテロ組織

夫唱婦随表向きだけなんですよ
パートナー男美人を選りたがる
患者より見舞いの方が青くなり

鳥取県　松川行男

粕汁で酔ったかみんな上機嫌
要らぬ事考えまいとまた悩む
裏表あるも良しまた無いも良し

和歌山市　根田美子

便箋に恋の残り火そっと添え
まだ若い人生これぞ老いの坂
節分に鬼も我が家で年を越し

和歌山市　橋爪佐一

残り柿寄り添う姿愁い見せ
気の乗らぬ付き合いあれば雨うれし
客帰り妻の疲れのどっと出て

和歌山市　北村光男

春闘も座り込みなし不況風
政界で経済通の人募集
老いたかな顔はわかるが名が出ない

奈良市　成橋邦造

母を追う孫の姿に我を見る
クラス会昔馴染みの語りあい
ぶらぶらと古都の歴史を訪ねゆく

生駒市　小西稔

振袖の孫を囲んで写真とる
甲山登った頃を想い出す
独り住み南南東へ丸かぶり

尼崎市　古川正子

ちょっかいを入れて後悔四面楚歌
露天風呂夜の飛雪も　つと浸かる
不況風社長の椅子を譲り合う

尼崎市　桑原東園

乳のみ児の香りと声が春を呼び
命日は姉とおしゃべり墓前で
携帯を手にしてメール仲間入り

三田市　辻開子

カラオケへ帽子脱がずに歌うひと
物買うに生年月日いる通販
鏡かて映したくない顔もある

姫路市　服部一典

冬草へ鍬入れ春を急がせる
亡夫ならの守り気付かす道しるべ
決意してパソコン習う歳を越え

兵庫県　岩本美緒子

値切らない値切る物なら求めない
女性の脚伸びてうれしい古希でいる
感謝しているかと妻に念おされ

兵庫県　安達厚

自慢の子いないがみんな親思い　大阪市　池上清治

歯に衣を着せぬ意見に聞き惚れる
待ちかねて孫が頬ばるせち料理　大阪市　中村忠敬

帽子から靴のさきまで中国製
竹箒下からのぞく蕗のとう
不作でも来年がある野良仕事　大阪市　寺井弘子

義理で行く友の個展は義理で褒め
凛とした冬木立見て背をのばす
回復期病院見舞う足軽く　大阪市　大向ナツ子

人生の心の重さ二分する
淋しいから嬉しいからと森の中
淋しいなあ庭いっぱいの白椿　大阪市　平井露芳

失敗は成功のもとノーベル賞
合併の障害庁舎決まらない
元凶は癒し邪魔する塩砂糖　河内長野市　印藤智子

留守居する夫料理の腕も上げ
戦争はいやとテレビに叫んでる
昼下り掛ける電話は留守ばかり　河内長野市　内海綾乃

節分にメインの鰯影おとす
堤防で親子ほのぼの凧上げね
声かけて焚火の中に入れてもらう　岸和田市　森元ふみよ

寝込む事無かった友が逝った冬
ネックレス亡母の形見が幸語り
寝た切りになりたくなくて歩きます　岸和田市　土橋房枝

尖る石やさしい水面が丸くする
ジハードよ神の声など聞こえぬか
本心を聞いて見たくて酔ったふり　岸和田市　堤楢代

コロンビア世界の頭脳つれて散る
すこしずつ春を押し出すヒヤシンス
戦いはもうやめといてブッシュさん　堺市　荻野像山

美人湯へ向かう背中の丸い老母
障子紙張り替えて待つ未年
止める気になってまともなことが言え　堺市　河盛龍三

その後が気になる義理の保証人
親の言聴かない質は親譲り
夫婦でしょラストダンスは残してね

松阪の牛はバケツでビール飲み　堺市　奥時雄

土煙馬券と共に消えて行き
親ばかの品定めする参観日　摂津市　望月遊美

若草姉妹枯草姉妹となりました
危ないっと息子の手が老母の前に来る
子等の列ゴメンなと徐行しつ息子　高石市　小島百恵

人間に知らされてない世紀末
ストレスで傾いている父の靴
アリとキリギリスどちらも生きてみる　高槻市　安田忠子

幼児の笑顔と握る祝箸
盆梅展ここは長浜冬日和
末期ガン痛みに堪えて口述記　高槻市　執行稲子

鉄瓶が御奉公とて消えた過去
尻尾振り隣の客も目利きする
暦からやさしさ貰い書く賀状　高槻市　浅田憲夫

春雷や布団に潜るお父さん
器量良しと言われて化粧厚くなり
釣竿のたたみも早い稲光り

養ってくれる地球の出す悲鳴　豊中市　源田啓生

寒に耐え梅花微笑む試験場
土俵退き阿修羅を脱いだ貴乃花　富田林市　古田千華

クルーズで伝説尋ねエーゲ海
六日間噂の航海カリブ海
クルージング海の素顔に触れる旅　寝屋川市　岡本勲

取柄ない僕にも妻が居てくれる
朝起きて今日の自分に捻子を巻く
長生きもしたいが年金先細り　寝屋川市　中川恵香（恵子改め）

メールより窓へさよなら息白く
暮れなずむ空のキャンバス寒紅梅
駅へ行く追いつ追われつ朝の道　羽曳野市　永田章司

スローライフ侘び寂の価値見直され
黒電話今も健在老いの家
赤旗もストも見られぬこの不況　羽曳野市　濱口フジ

はるばると砂丘を越えて蟹食べに
蟹を食べいい温泉に浸かりほっこりす
旅をして土地の名物舌づつみ

すずめ達付和雷同で飛び去りぬ　枚方市　荘司弘之

妻出かけこころゆっくり一人酒
同世代思い出酒を酌み交わし　藤井寺市　喜島芳江

選挙前犬や猫にもほめ言葉
ながら族聴きながら寝て覚めて聴き
所どころ英語のまざる子の日記　箕面市　寺井柳童

鬼は外懐いて鬼が離れない
踊りにも戦い祈りエトセトラ
いいように踊らされてた一本気　八尾市　寺川はじむ

土砂降りの雨に叩かれ喘ぐ株
穏やかな笑顔の奥にある気迫
天仰ぎ悔しさ空へ突き放し　大阪府　野田栄呼

病めるのも人生必要経費です
脳ふたつ本音建前フル稼動
漢字だけどうにか孫と並んでる　大阪府　桑田ゆきの

神風のジンクス死語に世の移り
パソコンの指迷わせる脳細胞
地下鉄の出口迷った日の記憶　大阪府　畑中節子

一人旅写真頼んで頼まれて
注連縄の新藁の香に初春の夢
ななかまど雪の帽子が愛らしい（北海道にて）　三重県　南海美知夫

もう御免命を奪う爆音は
年毎に喪中遠慮が増える暮
遺伝子が巡りて祖父の申し子に　横浜市　布山嘉信

脳味噌にモーター欲しい血の巡り
福は内弱い鬼とは共に住む
宰相の大風呂敷がほつれ出す　横浜市　平達也

今からの夢捨てさせた要介護
老いの食感謝と祈り込めて噛む
やり繰った妻は経済学博士　横浜市　石原三郎

節電は言われなくても老夫婦
来ぬ賀状去年天国の師を偲ぶ
付き添いの妻がお先に鼾かき　川崎市　浦野昭志

公園を孫と歩くとハトが追う
ケイタイの進歩のかげに魔が潜む
福寿草見てると体温まる

（清原悦子・巌田かず枝さんの句は50頁に掲載しています）

麻生路郎物語

―路郎〝妻〟を語る―

(16)

東野大八

この辺で路郎は妻の葭乃をどのような眼で眺めていたのであろうか。その恰好の資料が『川柳雑誌』(S39年5・6・7月に連載)の〝妻を語る〟である。葭乃書簡に少々おんぶしすぎた不公平さをここで均等化する意味で、その愛妻記のダイジェストで今回は文字通り埋め合わせをしておこう。以下は全文、路郎が書いた。

葭乃と私が大正三年四月九日に結婚してからこの四月九日(S39)で丁度五十年になる。五十年といえば半世紀だ。しかも激しく移り変った世代であった。いくら恋愛結婚にしてもよくも今日まで続いたものだと自分でも呆れている。しかし振り返ってみると、続いた理由がないこともない。その当時の私は肺尖を患らっていたので、妻を娶るなら第一は健康であること、第二に嫉妬心のないこと、第三は愛嬌のあることという三条件を目標にしていた。

自分が病人でありながら妻の健康を第一条件にしたことは、今にして考えると随分自分勝手な条件であるが、それには大きい理由があった。私の母が肺結核で私が生れて一年三ヵ月の時、郷里尾道で亡くなった。それから私はかなり厳格なおばあちゃん育ちで、母の愛情というものを知らず、学友の母から可愛がって貰ったが、母の無い淋しさは身をもって体験したので、妻を持ったら私の生きる限り妻の命を護ってやろうと考えたのであった。

葭乃の母も、葭乃が六歳の頃、肺結核で亡くなりおばあちゃん育ちで、おばあさんがまもなく亡くなってからは父と親一人子一人で育ったのである。

私が蘆村(葭乃の父)にはじめてあったのは、西田当百の二階で句会の晩だった。大正二年の頃である。若い女学生と並んで座っていたので、妹を連れて来たのだとばかり思っていたが、それが彼の娘だった。それほど彼は若く見えた。この娘が後に私の妻となろうとは夢にも思わなかった。

私は大正二年に、海外へ流出の許可願のため、東京から帰阪、姉の病気を看護しながら川柳を創っていたので、葭乃の父との交際がはじまり、私が指導的立場でロシヤ文学の英訳本を一緒に研究したりした。葭乃は学校で英語の古典ばかりやっていたので、アップツーデートの英語や思想的な文学は私に教わる立場にいた。こうした交際からいつか葭乃は私に魅力をもつようになり、私は葭乃を愛するようになったのである。彼の女は伝道の生涯に生きようとする意志を翻えして私との結婚を受け入れることになった。

そこで私は葭乃の父に、妻にいただきたいという手紙を出した。その返事は「さしあげないことはないが、条件があるので一度お越し願いたい」ということであった。どんな条件があるのか勇敢に出かけていった。父蘆村の注文というのは次の通りだった。

「私は長い間、この娘一人を力に生きて来た。が、娘さえ承知であれば差し上げてよろしい。しかし一人娘をあなたに差し上げると私の家は絶家になる。それも差支えはないがあなたの方に籍を入れることができますか。それからもう一つ条件がある。私は今も言ったようにこの娘一人を力に生きて来たので、今更女中をおいて暮らす淋しさには堪えられ

ない。二人が結婚しても一緒に住ませてもらいたい。私は現在教職にあるので、経済の方は心配かけないが、働けなくなったら面倒を見て欲しい。私の言いたいのはこれだけだ」と言うことであった。そこで私は

「籍の問題は私がすぐに解決します。あなたと同居も結構です。若い二人より少しでも早く世渡りに経験を持たれるあなたと一緒に暮らせることはいいことだと思います」

「それでは仲人をどうしますか」

「それはあなたもご存じだし、私も親しい西田当百に頼んで来ます」

ということで、この縁談はトントン拍子に運んだのであった。二人が既に愛し合っていることは打ちあけなかったが、蘆村はそれと気づいているようであった。二人に顔を赤らめさすようなことは言われなかった。当百は

「ホンマかいな、担ぐのとちがうか」

とはじめは信じなかったが

「よし承知した。しかし、うちの家内はそんな席へ出るのイヤだというがどうする?」

「じゃ仲人は君一人でいい、野合だと言われては困るから君をたのむんだから、結婚当夜の謡だけは君の名調子でやってもらえばよろしい。万一の場合は私の責任だ。君とこへ尻は持って来ない」

と言うことで芽出度し芽出度しと簡単な結婚式を挙げたが、籍を入れる難問題も一ト月のうちに解決、すべて約束通り履行して、翌年には一人の姫を儲け、次々と四男五女の親となり四人の孫が出来て今日に及んでいるのだ。そして葭乃は九人のこどもを生んだ顔もしないで、年よりは若く見えますと言われている。

葭乃は無口で、必要以上のことは言わなかった。声を出して笑うようなことはしなかった。喜怒哀楽色にあらわさず式のお嬢さんだったのである。私の結婚条件の三番目には愛嬌あることとなっているが、この条件だけは外ずして結婚したのであった。

私は私の娘等によく言った。結婚の相手は大学出であること、スマートであること、家は相当の資産があることなどといろいろ条件を持ち出すのもいいが、先方が同じように数多くの条件を持ち出してきたら、お前の方がパスしないことは明明白白だろう。結婚条件は必ず割引することだ。でなければいつまで待っても結婚なんか出来るもんではないと、それで私自身も第三の条件を外ずして結婚したのであった。新婚当時

—夕食が済むと川柳三句出来

という楽屋落ちの句で、ぞめかれたものだった。この句はだれが作ったか知らないが、多分楽屋落ちの句の巧い五葉の作ではないかと思う。かくして幸福な日日が過ぎて行き新婚のよろこびを満喫していたことは世の常の新婚夫婦と同じだったといえよう。その頃の葭乃の句に

—繋ぐ手の羞しいほど月が冴え

と言うのがあるが、おそらく実感を詠んだのであろう。押売りに凄まれて変な売薬を高価に売りつけられたのも、夫の健康を祈る純情のあらわれだと思えば、バカだなあと一喝するわけにもいかなかった。

葭乃は主婦の座にあっても、世間的な奥様ぶりは発揮しないで、いつまでも女学生型で来訪者があってもただお辞儀するだけである絶えずやって来た柳友の川上日車にもアタマを下げるだけなので、私が

「何んとか言ったらどうだい」

というと「言ってます」と言うが、声は少しも口から外へ出ない。それほど無口だった。

しかし、葭乃の無口は私にとって困る場合もあるが、ムシロ有難い場合の方が多い。私が何をしていようが一切干渉しないのである。徹夜で原稿と取っ組んでいる時に、あなたお茶よ、とか近所のニュースをきかされたり、もう遅いからお寝みなさいとか何んとか言われたのでは気分が殺れて、折角の原稿も滅茶苦茶にされてしまうが、その段、飯の時間が来ても、飯を運ばないので私の創作的な仕事には世にもありがたい良妻なのである。

そんなときには彼の女は、ハワイの柳友が送って呉れたアメリカの雑誌を読んだり、ドラマの脚本を耽読して、私の筆のおくのを待っているか、机にもたれて眠っているかであ

る。何ん時でも眠れるし、何んどきでも眼を覚ます芸当を持っているので、夜更しもやるし、早起きもする。疲れたら三日でも四日でも眠る。それが彼の女の健康法でもあるという。まるで猫のような生活を平気でやってのける手際は一寸マネができない。この習性は九人の子どもたちを育てて来た彼の女の特技であろう。

葭乃は無口のせいもあるが、若い奥さんがよくやるように他人に宿六ののろけを言ったりしなかった。私が「商業之大日本」主幹をしていたころに葭乃は次の歌を詠んだ。

ヘルメット冠れる君の年少し
老けて見ゆるも頼もしきかな

それが彼の女の紙の上でののろけだと言ってもいいだろう。クリスチャンの彼の女は啼かぬ蝉のような存在だった。

よその奥さんたちは、宿六のポケットを探って女性の名刺があったり広告マッチがあるとすぐに根掘り葉掘り訊問されるそうだが、葭乃は幾ら名刺が入っていようが、あっちこっちのマッチでポケットをふくらませていようが、そんなものは眼もくれない。キモが太いというのか、その方面の神経が少し足りないのか、彼の女のいうじょうがない哲学没法子の実現に徹しているのであろうか。では嫉妬心のカケラも持ち合わさないのかと思うと

—お帰りにならず刺身も色変わる

という句を創っている。この句には妻の折角の心づくしも、夫の帰宅が遅いので変色して「もったいないわ」という経済観念から詠んでいるのではサラサラないし、料理の変色をなげいて報告しているのではない。句意は嫉妬の炎を婉曲に燃やしたものと解すべきである。若いサラリーマンを夫に持つ時代の妻が夫の帰宅が一刻も早くありたいという共通の悩みは、この句に巧みに表現されているとみていい。しかし句の底に潜んでいる嫉妬心を見逃してはこの句の価値は半減してしまう。

ある夏の朝だった。出勤前の食膳に、かき氷を載せただけで何一つ運んでこないので

「飯は？」と言ったら

「これで」と氷を指さしたから

「オレは出勤するんだぜ、朝っぱらから氷を食べて働けるか」

「暑いやろ思うて」とさしうつむいた。

「オレは今後、よそで飯を食うことにする」と宣言した時、葭乃のアタマに閃めくものがあった。それは私が給仕なしには食事をしないし、お酌なしには盃を手にしないことを知っていたからである。

そして彼の女の膝にパラリと冷たいものの落ちたのをみて、私もそれ以上言わずあわてて出勤してしまった。今でも暑がり屋で有名で、首のあたり一面にアセモを出し、家ではほとんど裸に等しい薄着をしているし、ルームクーラーをしてやる資格のない夫は、彼の女が毎日のように昼日中をデパートに避難して、日舞を鑑賞し午後五時ごろ御帰館遊ばすのを寛容するより手がないのである。若妻の頃すでにその暑がり屋であったらしい。自分が暑いので夫も暑いだろうと食事の代りに氷を食べさせようとして、一もんちゃく起きたのであった。今でもそれを延長したような自分本位の親切さは持ち合わせている。

葭乃は金銭に執着を持たない。浪費癖と言うのではないが、どっちかと言えばあり使いの方である。なければないで平気だ。

その昔、電車に乗ったが財布に金がなかったので、四ツ橋で市電から降ろされ、車掌の集会所へ連れて行かれた。幸い車掌の中に川柳家がいて証明してくれたので、キップを借りて帰ったことがあった。市場へ出かけてもエエ海老があったと予算外の買いものをすることがあるが、しゃれの方へはカネを捨てない。

—スフにしてあとは梯子で消える金

という句がそれを証明している。

芝居へ行っても帰りに料理屋へ寄らぬと、行った気がしないというのである。それも小さいこどもを荷物のように横抱きにしてのれんをくぐったものだ。これも見ようによっては、私に打ってつけのベターハーフだったのである。

愛染帖

波多野五楽庵選

追憶の母は石臼碾くばかり　青森県　西谷　大吾

自画像にさむざむとした眼が二つ

両の掌で余生の淡い夢掬う　東京都　やまぐち珠美

砂つぶになるまで貝殻の気骨

開け放つたびに心へ陽が伸びる　和歌山市　木本　朱夏

待ち人は来たらず椿耐えている

見つめあえば椿ほうほう開きだす　鳥取市　夏目　一粋

人ひとり亡くなり今日も日が沈む

席ゆずる君も疲れているだろに　和歌山市　西山　幸

敗因を合わせ鏡でたしかめる

春になっても春になっても女坂　富田林市　池　森子

どこまでも青　主語も述語も透明で

春は幻　夢のつづきは戯画の中

紙の箱　女は信じ難きもの　藤井寺市　太田扶美代

半熟のままでいつまでも人間　和歌山市　桜井　千秀

一日で成らぬローマに夢がある

ノンベンダラリ羨ましいが真似られぬ　鳥取県　石谷美恵子

見てくれで決めるなと鮟鱇の自負

拘泥りが解けたあの日の青い空　弘前市　高瀬　霜石

線香を百本立てて追いつかず

木洩れ日の中にんげんも脱皮する　弘前市　斉藤　劦

魂を置き去りにせぬ冬の葦

脈拍が弾んでそっと置く受話器　西宮市　門谷たず子

鍵穴から覗くと幸せ色に見え

鬼も一匹飼うているのはナイショです　鳥取市　岸本　宏章

ガリバーの墓石のようなビルが建ち

三人も寄れば一人がボスになる　熊本県　高野　宵草

戦禍とは天から火事が降ることだ

リハビリの医療まじめに悪くなる　海南市　三宅　保州

傘置き場お前も忘れられたのか

他人が皆立派に見える啄木忌　和歌山市　福井　桂香

天使たちともしも連弾できたなら

地図にない国に行きたいオルゴール

煮こごりをゆっくり溶かす春の宵　横浜市　近藤　道子

溜息が酒か涙か問うている　藤井寺市　高田美代子

風の子をぽろりと産んだ雪おんな　東京都　播本　充子

黄昏れて佳境に入る鬼ごっこ　黒石市　千葉　風樹

母の涙が溜ってる満月の青　和歌山市　武本　碧

パンドラの箱追いかける森の中　高知市　小川てるみ

踏ん切りがつかぬ男の未決箱　綾部市　藤田　芳郎

手加減の傷が浅くて塞がらぬ　寝屋川市　江口　度

いちにちの靴が静かに脱いである　松原市　玉置　重人

独りとは寒い電気がついてない　弘前市　高橋　岳水

来る運を信じ流れに身を任す　弘前市　福士　慕情

悲しみが癒えぬ蛇口の半開き　弘前市　一戸　ツネ

寝そびれて白い酸素を吸うてます　弘前市　中山　雅城

雪国に寒い噂が吹きだまる　弘前市　櫻庭　順風

雪害の怖さ人情まで縺れ

富田林市　中井　アキ
予期しない情けに爪が狼狽える

堺　市　奥　時雄
親の歳越えて鏡の奥覗く

大阪市　川原　章久
貰い泣きしてきて帰る雪の通夜

大阪市　神夏磯典子
椿ポトリしばらく別れ惜しんでる

鳥取県　西原　艶子
今さらに昔のことを言われても

唐津市　山口　高明
才媛の妻が別姓振り回す

米子市　足立由美子
気のあせる時計に指図受けている

吹田市　山本希久子
私の鉛筆　ためらい傷のあと

大和高田市　鍛原　千里
二ん月の空　女心かも知れぬ

大和郡山市　坊農　柳弘
ピリオドの先に転がる春のウツ

東京都　岸野あやめ
水を得た魚になりたい余生です

倉吉市　米田　幸子
四畳半老いた二人の大宇宙

八尾市　井尻　民
どこまでが本音まつげのうるむひと

枚方市　海老池　洋
雪こんこんきれいな嘘を積むように

鳥取県　田村きみ子
椿いま落ちそう　花の雨なのに

米子市　白根　ふみ
割り切れぬ日がある迂回してみよう

弘前市　相馬　銀波
焦点を絞り笑顔は外せない

美祢市　安平次弘道
隙だらけの妻がなかなか打ち込めぬ

八尾市　村上ミツ子
真実の顔した嘘にのせられる

鳥取市　田村　邦昭
どしゃ降りに逆らえないで妻は逝き

札幌市　三浦　強一
長短の針で夫婦の日を刻む

寝屋川市　籠島　恵子
荒れた手に言い訳ばかりしてしまう

京都市　都倉　求芽
服み易くなった薬をまた忘れ

大阪市　前　たもつ
一本橋まだまだ人に譲れない

八尾市　篠原いつふみ
玉葱で無かった母のあの涙

竹原市　正畑　半覚
待っている人の笑顔の灯がともる

宇部市　平田　実男
添削のようにはいかぬ子の躾

尼崎市　長浜　澄子
外見はどうあれ今が私です

鳥取市　岸本　孝子
筆跡という隠せない顔もある

砂川市　大橋　政良
上っ面だけの笑顔が見抜けない

豊中市　樫谷　郁子
縄電車私ひとりを置いて行き

奈良県　渡辺　富子
首のない男がずらりキー叩く

黒石市　相馬　一花
泥棒も予算を作る年度末

八尾市　高杉　千歩
下積みの苦労話は喋らない

横浜市　芦田　鈴美
沈黙を数え忘れていた誤算

和歌山市　古久保和子
真四角の部屋の時計に針がない

鳥取県　岩崎みさ江
点滅の蛍光灯のいとま乞い

高槻市　左右田泰雄
まだ脈があるから揺さぶりをかける

横浜市　保田　絹子
師の影を踏まぬ迂回路捜してる

青森市　漆戸凡々子
雪愛し雪憎み雪国に住む

川崎市　浦野　昭志
ボーナスを減らす会社へ今日も行く

倉吉市　青砥　菊枝
つぶやきが尾鰭を付けて泳いでる

堺　市　和田つづや
温めればむなしさの増す一人酒

弘前市　蒔苗　果林
大型車餅焼く香り置いて去る

弘前市　岡本　花匠
補聴器がプラス志向の貌でいる

松江市　安食　友子
十字路に立つと迷ってばかりいる

和歌山市　玉置　当代
一芸を貫く背中見て育ち

四条畷市　吉岡　修
裏表ないと言うけど味もない

堺市　山本　半銭
膝に猫抱いて見送りにも立たず

武蔵野市　亀井　円女
ひとり旅まださす積りと亡夫に愚痴

和歌山市　松原　寿子
美しい破滅が蒼い凪になる

富田林市　片岡智恵子
熟年の過去はぼんやり風ばかり

鳥取県　佐伯　やえ
つらかった思い出坂を越えてゆく

和歌山県　中後　清史
花活けた時は訪問客がない

和歌山市　榎原　公子
誘惑に弱い涙を溜めている

茨木市　藤井　正雄
許されて二人で降りる里の駅

高槻市　田中　初恵
ちぐはぐな返事で用の足るふたり

寝屋川市　太田とし子
世界中病んでカルテが未だ書けぬ

大阪狭山市　羽田野洋介
豊かさに慣れて礼節置き忘れ

松原市　小池しげお
馬耳東風　昔噺はもうしない

高知県　桑名　孝雄
やがて春　絵の具の色を買い足そう

松江市　津川　紫晃
水たまりまたいで軽い恋でした

愛媛県　中居　善信
百姓にもう切り札は何もない

富田林市　大橋　鐘造
一陣の風が散らした花言葉

出雲市　園山多賀子
眠れぬ夜羊一匹飼い馴らす

高槻市　乙倉　武史
あと僅か太く短くともいかず

鳥取市　武田　帆雀
新しいライバルだろう新漢字

愛媛県　花岡　順子
歳を取ったな昨日の話ばかりする

香芝市　大内　朝子
葬列へ明日の我が身をダブらせる

鳥取県　鳥羽　直市
不器用で悔し涙が隠せない

香川県　川崎ひかり
おこぼれがほしくて尻尾ふってみる

唐津市　田口　虹汀
節分が済むとポカポカする日和

唐津市　岩崎　實
花見酒一晩大樹と添い寝する

唐津市　宗　水笑
均等法敷かれ亭主にやっと春

唐津市　久保　正剣
起立多数で他人に任せている不安

日立市　加藤　権悟
一日の翼いたわる縄のれん

鳥取市　福田　登美
振り返る背中に悔いが残される

八尾市　生嶋ますみ
振り向いたすきに幸せ逃げたらし

弘前市　宮崎ヒサ子
真っ正面厭味をさっと受け流す

堺市　志田　千代
西高東低　気圧配置も不景気も

今治市　塩路よしみ
山越えて帰ってこない青い毬

唐津市　市丸　晴翠
今日の悔い流すシャワーの高い音

和歌山市　青枝　鉄治
化かされた振りして乗ってみる野心

横浜市　金森　徳三
氷雨の夜どうぞ雪にはならないで

横浜市　秋元　和可
父親の座が失せてゆくいろり端

岡山県　山本　玉恵
ボロボロの辞書から貰うかくし味

鳥取県　土橋　睦子
涅槃への道がだんだん近くなる

鳥取県　土橋　螢
ほんとうにフランス料理食べただけ

神戸市　田中　章子
MRI豊かな脂肪写し出す

倉吉市　牧野　芳光
犬の目を見て恥ずかしくなってくる

誹風柳多留二四篇研究 53

橋本秀信・粕谷長生
山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾
清博美・佐藤要人

409 **美しい顔をふくらし舩に乗り**

清 遊山船に招かれた踊り子とも取れるが、ここは矢張り仙台侯に請出された高尾、というのが動かぬところ。

請出されて苦界を抜ける、それは遊女にとってこの上ない幸せ。しかし、意に染まぬ請出され方をした高尾は顔をふくらませて渋々仙台侯の舟に乗る。吊斬り直前の図。

佐藤 賛。

410 **金持を見くびって行鰹売り**

清 金持ちは無駄な出費をしない、故に金持ちなのである。

高い鰹など無駄な出費の最たるもの。買うはずがない。そこで、鰹売りは「このけちん坊野郎」と見くびって走り去るのである。

小栗 賛。「金持を見くびる」という表現の面白さ。

佐藤 賛。

411 **旅籠屋ハちつとゝいへバちつと盛り**

清 飯を盛るのに、客が「少しにして下さい」といっても「まあまあ遠慮なさらずに」と多めに盛るのが世間の常識。しかし、旅籠では「ちっと」と言えばちっとしか盛らないし、沢山と言ってもそれほど盛ってはくれない。

これが営業経費節約の原点。

佐藤 賛。

412 **うす雲ハ当世高尾古風ゥ也**

清 仙台侯綱宗をめぐる二人の遊女の対比、一人は当世風であり、一人は古風だ、というのである。

薄雲は高尾事件のあった後、仙台侯に請出された遊女。仙台侯の話に嬉々として請出されたという。そこには、吉原遊女としての張りや意生地が微塵も見られない。

吉原の遊女の意気地のみならず、遊び方も時の流れとともに変化していったのであろう。もっとも、

うすくもかせ中そのころゆびだらけ　天六福1

と、薄雲の態度に対し非難めいた句もある。

佐藤 賛。

413 **一ト声でわれもくと顔を出し**

清 状況のよく解らぬ句。「一声」といえば、時鳥と鶴。

時鳥とすれば、その一声を聞くために皆が顔を出したとなるし、鶴とすれば、殿様の一声で家来達が雁首を並べた、というようにも解せる。或いは、もっと具体的な例があるの

かも知れぬ。

小栗　時鳥説に賛。

橋本　同。「ヒトコエ」の柳多留の類句64のうち「鶴の一声」より、時鳥の方がはるかに多い。やはり初音であろう。

めつらしさきく一ト声も百歩一チ　三〇32
一声に茶つみも笠をかたむける　八〇2

佐藤　同。

414　**す壱分ハ用向キの無イ中野丁**

清　吉原中の丁について、『川柳大辞典』は『吉原雑話』によるととして、「享保の頃は種々の商人見世多く、麩屋、畳屋、米屋まであり、間に茶屋があったとあるが、それ等は茶屋の勢力に推されて皆茶屋となり……」と記している。

句は、素一分の分際では、茶屋などを利用することもなく、中の丁は全く用の無い通り、というのである。

素壱分ハまん中を行く中の町　傍三30

佐藤　賛。

415　**横しまな美食などする樽ひろひ**

清　「よこしま」は正しくないとの意。とすれば「横しまな美食」は盗んだ食べ物か。或いは、便所に隠れて食べ物を食べるとの意にも解せる。

何れにしても、樽拾いが「らしからぬ」食べ物を食べるのであろう。

橋本　賛。見られたくないところを見られた者が口留料を出した。それは正当でない収入という意。それで身分不相応な物を買って食べた、という解と思う。

色文を拾ッて御用百にうり　一〇3
間男を御用百にて他言ンせず　十三9
何申やしやうと御用百にぎり　十三19

粕谷　橋本兄の樽ひろいが口留料をもらった説に賛。

佐藤　同。

416　**休メもふよしといわれてつよくもみ**

清　身体を揉んでいた者が、「もうよい」と言われ、最後の一揉みを強く揉んだというのである。何気ない動作をちょっとうがった句。

佐藤　賛。

417　**はらわたを入れかへにするさかな売**

清　『川柳辞彙』は、「さかなうり」の項に本句を引用、脚注に「本物は抜き捨て」と説明するが、よく解らぬ。

本句、むしろ范蠡の句とした方が面白いのではないか。即ち、魚売りは敵を欺くための范蠡の扮装、腸と密書を入れ換えにしたのである。

小栗　范蠡説賛。『太平記』巻四「備後三郎高徳が事付呉・越軍の事」。

橋本　同。范蠡が幽閉中の勾践へ魚腹に手紙を入れて励ましたことは類句も多い。

半平と名をかへさかなうつて来る　二〇6
はんれいハさかなのはらでいけんする　安八礼2

佐藤　同。

418　**かけまなど居そうな所いろは茶屋**

清　いろは茶屋は谷中感応寺門前町にあった私娼窟。場所柄、寛永寺三十六坊の坊さんが大いに利用。得意先が得意先だから、陰間などが居そうな所でもある、というのであろう。

いろは茶やぞくをそ引くにほねがおれ　二二22乙

―俗人の客を引き込むのが大変。

佐藤　賛。

女性コーナー

黄香の忠

政岡日枝子選

窓の内無風の中で風を見る　米子市　中井　ゆき

はないちもんめうめもさくらも失語症　富田林市　池　森子

風花と舞うおかっぱの塾帰り　和歌山市　福本　英子

亡母を呼びたくて食器棚開ける　藤井寺市　太田扶美代

気負わずにおろし大根ほどの愛　米子市　白根　ふみ

春うらら　うららとしぼる白絵の具　和歌山市　楠見　章子

一筋を違えて路地が他人めく　和歌山市　古久保和子

人参がチラチラしてる走らねば　堺　市　志田　千代

線引きの道をゆるりといく老後　弘前市　宮崎ヒサ子

ぽつねんと樹は置き去りに陽は西に　松江市　川本　畔

すこし迷ってたどり着いたは花の里　西宮市　門谷たず子

平熱になると鴉は黒かった　倉吉市　野口　節子

生たまご握る力を考える　鳥取市　徳田ひろこ

まずどこを留っていこう初対面　横浜市　川島　良子

指切りの指を哀しく思う日よ　和歌山市　西山　幸

お洒落には遠く二ン月着膨れる　和歌山市　田中　みね

明日より今日一日を持て余す　藤井寺市　高田美代子

いい人をやめると深くなる眠り　東京都　播本　充子

考える葦がこの頃ずぼらする　香芝市　大内　朝子

ちぐはぐな返事足元浮いたまま　大阪市　神夏磯典子

出がらしの急須がしてる生返事　寝屋川市　太田とし子

虹が出てどんな飾りも色あせる　大阪市　川久保睦子

花見して美しい風邪ひいてくる　富田林市　片岡智恵子

咲くときに音あり胸に恋のバラ　吹田市　山本希久子

失敗をするから温みある美人　箕面市　出口セツ子

やわらかい色をまとって妥協する　八尾市　生嶋ますみ

くじ運を風をひゅるりと裏返す　藤井寺市　鴨谷瑠美子

期待という袋を背負い春が来る　西宮市　西口いわゑ

石橋を叩く遺伝子だと思う　東京都　後藤　早智

こそこそとするから不信持つのです　愛媛県　花岡　順子

生まれたて良い旅してね春の水　大阪市　渡部さと美

厄介で自分を見つめようとせぬ　米子市　野坂　なみ

前向きのはずが後ろへ後ろへと　米子市　青戸　田鶴

よろよろと風に男の旗立てて　橿原市　居谷真理子

落し蓋ひとりぐらしを煮含める　東京都　岸野あやめ

人間を止める日までの夢作り　大阪市　三浦千津子

黄色からピンクに春の絵の具皿　羽曳野市　徳山みつこ

淡雪に宿って春へ会いに行く　東京都　やまぐち珠美

ひねくれた昔も今に辿り着く　鳥取県　西原　艶子

ちぐはぐな話に風の音がする　寝屋川市　森　茜

自動巻き若さなくしてから止まる　熊本県　岩切　康子

フィナーレ飾る余力を蓄える　和歌山市　桜井　千秀

どの道をとってもあった幸不幸　東京都　清原　悦子

歯を抜かれ夫の人相変わったよ　大阪市　松尾柳右子

老眼鏡おやこの方もそんな齢　寝屋川市　堀江　光子
呑気だなハッと気づいた口座ゼロ　大阪市　鈴木トヨ子
吉報へ二階の猫も降りてくる　奈良県　渡辺　富子
雨に泣き風にも泣いて今がある　岸和田市　雪本　珠子
花道にしたい最後に渡る橋　芦屋市　黒田　能子
チャンネル権握るチャンスを待っている　神戸市　田中　章子
口出しの一言予定狂わせる　大阪市　小泉ひさ乃
義理チョコももらえば少し恋の味　神戸市　山田婦美子
もたれ合う人も頑固になってきた　香川県　川崎ひかり
ひと呼吸おくとまあるい輪が描ける　尼崎市　長浜　澄子
身勝手に怠けたつけはすぐに来る　鳥取市　永原　昌鼓
スケジュール明日の色は決めている　寝屋川市　籠島　恵子
ボロボロの顔で失言食い止める　倉吉市　山中　康子
好いひとと言われ真相語れない　鳥取県　土橋　睦子
譲られた席に感謝と淋しさと　横浜市　秋元　和可
セーターのぬくもり重ね街へ出る　鳥取県　岩崎　和子
朧夜にほんのり春がこぼれそう　鳥取市　福田　登美
ストレスか思わず語尾の強くなり　鳥取県　西川　和子
入選の見事な花と対話する　岡山県　福原　悦子
ふんわりと雲に乗りたく髪を切る　堺　市　西村りつえ
輝いた宇宙の夢は流れ星　鳥取市　宮脇　道子
買い替えて他人行儀な冷蔵庫　寝屋川市　平松かすみ
買い溜めのくせは悲しい戦中派　倉敷市　撰　喜子
世辞言わぬ男の気っ風に酒を出す　八尾市　宮崎シマ子
思いっきり一度散りたい造花たち　鳥取県　石谷美恵子

言い合って後味悪いレモンティー　東大阪市　笠井　欣子
オリオンがきらきら暗示するような　大阪市　町田　達子
何だかんだ言うても温い夫の傘　海南市　堂上　泰女
白鳥も家鴨も同じ仕種して　八尾市　中島　春江
長生きをさせた私が疲れ気味　米子市　小塩智加恵
一善を心がけてる二十四時　寝屋川市　坂上　高栄
故郷の景色を入れた宝箱　交野市　山川日出子
テレビから河内マドンナパワーくれ　アルゼンチン　松井美稚子
刀自の名も明治も遠く梅匂う　熊本市　永田　俊子
予期しない寒波列島ブルー系　大阪市　津守　柳伸
それぞれの芸に励んだ人生譜　和歌山市　玉置　当代
歳古りて小さくなった胸の鬼　大阪府　米澤　俶子
息抜きが出来ないまんま嫁続け　横浜市　田中　笑子
大根の葉が捨ててある核家族　鳥取市　岸本　孝子
何時までも待ってはおれぬ姥桜　倉吉市　米田　幸子
わたくしの口につけたい万歩計　東大阪市　田中美弥子

ゆきさんの句―博識であっても、自分自身を知らないとよく言われるが、穏やかな窓の内の風と、嵐のように荒れている窓の外の風との対比。自分が生きて行く場所を改めて見つめて、倖せであると感じる原風景がここにある。**森子さんの句**―とてもリアルに描かれていて、ついつい引きずり込まれる。美しい花で人々を魅了してやまなかったものを確かな川柳の目で詠まれ、失語症と言い切ったあとに、温かく手を差しのべる作者の様子もうかがえる句である。**英子さんの句**―メルヘンの世界か童画を見ているような錯覚を覚える。視角を変えて見るまでもなくおかっぱの可愛らしさに、そして何処も変わらぬ塾通いに頑張れとエールを送りたい。**扶美代さんの句**―正面からまともにぶつかって来る句で、同じ目線で亡母を探している自分に気がついた。母の彩で整理してある食器棚の見付けに、成る程さもありなんと感服しました。

迷う

宮川　珠笑選

インシャーアッラー迷いを知らぬ自爆テロ　水笑
経を読み写経も消せぬ欲を持ち　勝視
グーチョキパーなんにも迷うことはない　重人
迷わないように一番につけている　可住
迷うことない軌道車が羨まし　像山
泣き声も入れて迷子のアナウンス　強一
迷う娘へ父は見守る他はなし　玄也
迷ってるうちに横から持ってかれ　典子
愚痴を言う男迷ってばかりいる　(花)順子
迷いたくないから蟻は列につく　勝巳
振り出しに戻れば迷いとけてくる　たず子
つり橋の真ん中に来て迷い出す　富子
行く先は浄土と決めて迷わない　螢
逆転の発想迷い解けてくる　庸佑
知りすぎたばかりに深うなる迷い　あずき
万馬券当った日から迷い出す　美明
ひょうひょうと枯野さ迷う山頭火　大吾
ためらいの打ち明け話信じよう　(保)絹子
迷わずに選んだ妻に仕えてる　恵勇
あれこれと迷いながらも生きる幸　美也子
迷ってる背中を押した春の風　充子
影法師だけは迷わずついて来る　照彦

迷ったろう　内部告発した勇気　愁女
迷ったら投げるコインを持っている　弘一
外野席気になり的を絞れない　早智
一瞬の迷い行く手を闇にする　ヒサ子
迷うてるらしいなふっと目がそれる　修
人間の気ままが神を迷わせる　半覚
またしても一人芝居に迷いだす　雄々
右左迷いながらも歩いてる　正和
も一人のわたしが後ろ髪を引く　清史
八起きめのダルマやっぱり迷ってる　千里
現実と夢に迷った青リンゴ　(稲)洋
一回り大きくなって出る迷路　昌枝
風の迷路で回らない風車　風樹
振り出しに何度も戻る春の闇　美代子
剣ヶ峰男今更迷わない　恭昌
佳
脱皮して迷いの海を泳ぎきる　さち子
春の陽に迷うことなく椿落つ　善信
玉の汗かいて迷いも消えてゆく　悦子
やることはやった迷いのない眠り　一壺
生き方の本をいろいろ買ってくる　次根
人
百均で一つ買うのも迷ってる　弘子
地
迷うたび母の頁を繰ってみる　碧
天
迷い鳥おいで暖炉はもえている　宮崎シマ子
軸
実印へまだ踏ん切れぬ息をかけ　珠笑

ジョーク

中村　金祥選

飛びきりのジョークで笑う四月馬鹿　美代子
そのジョーク前にも聞いたことがある　圭二
タマちゃんのジョークを囲む人の群れ　あずま
春風に軽いジョークもころげ出す　あやめ
ジョークだとしても小骨が引っかかる　鉄治
ジョークから洩れる噂が風に乗る　一知
一言のジョークに本音混ぜてある　(岩)康子
すきま風吹いてジョークの輪が崩れ　早智
張り詰めた空気ジョークに救われる　准一
脱皮する度にジョークがうまくなる　茂代
建て前と本音ジョークにかきまぜる　正雄
何気ないジョークの中にある温み　美也子
おみくじの凶はジョークと忘れよう　志華子
逆転の出来るジョークを持ち歩く　孝男
失敗をジョークに変える知恵がある　扶美代
言いたいこと包むジョークのオブラート　庸佑
ジョーク一つ言えぬ婿さんにも困り　秋星
たまぁには粋なジョークに浸りたい　(岩)和子
冗談が過ぎて心を覗かれる　伊津志
脳みそが辛いジョークを食べたがる　公誠
まだジョーク通じる母と笑い合う　(志)千代
会長はジョークのうまい人に決め　倫子

その日からジョークを交わす仲となり　順風
生真面目な方のジョークで座が白け　孝雄
冗談と洒落では済まぬ拉致家族　洛酔
桃さくらジョーク飛ばして咲き誇る　螢
ジョーク言いあとは埴輪の顔でいる　あずき
おやすみとジョークのように老母は逝く　朝子
夫唱婦随ジョークも愚痴も妻次第　柳弘
ジョークだと知っていながらいい気分　一花
スパイスの効いたジョークが小気味よい　淞丘
真に受けたジョークで愛の芽が伸びる　ひかる
お別れのジョークがうまい雪女　劦
ポックリと逝けるジョークが見あたらず　(松)輝夫
風紋にジョークの跡が見当らぬ　雅城
心臓へぐさりジョークの矢が刺さる　次根
夫よりジョークのわかる膝の猫　りつえ

佳

ジョークかなこんなにでかいチョコレート　強一
何気ないジョークが刺さる傷もある　宏章
核ボタンジョークジョークとちらつかせ　充子
ジョークなど通じぬ父の咳払い　妻子
ジョークだと思っていたに救急車　雄々

人

見舞客ジョークばかりを置いて行き　晴翠

地

春うらら神にもジョーク効きそうだ　一粋

天

車にはオイルにんげんにはジョーク　高瀬霜石

軸

平和へのジョークは皆が持っている　宏章

噂

片岡智恵子選

いい噂春一番に乗って来る　(保)絹子
脚色をされて噂が舞い戻り　照子
残業が続くと不倫噂する　一粋
ジェラシーを噂の欠片から拾う　あやめ
私まで来たらストップする噂　政勝
噂より怖い本当になる話　鐘造
真実は一つ噂は気にしない　彩子
杭や木に止まったままのいい噂　雄々
良い噂半音下げて去っていく　玄也
リストラの噂ひそひそ更衣室　遠野
社の人事噂話も入れ査定　正雄
リストラの噂に冷える屋台酒　高明
噂とは違う人事が貼り出され　圭一郎
噂では女たらしになっている　一壺
情報化噂も今はグローバル　典子
私の噂だろうか声止まる　あずき
噂だけ今年も賞は素通りす　准一
確かめて別の噂も聞かされる　寿美
賑やかに噂ついばむ群雀　美代子
お食事に行って噂の的になり　朝子
やがてやがて噂はきっと風になる　彰雄
あの噂ほんと閉店セールする　通せんぼしても噂は通りぬけ　ミツ子
地球儀がまた戦争の噂する　大吾
振り向けば噂に彩がついている　たず子
午後三時噂拡散注意報　保州
赴任地へ酒豪の噂先に着き　玉恵
内緒　ナイショ　ないしょでみんな知っている　霜石
口止めをすると膨らみ出す噂　岳水
お目出度い噂に蝶が寄ってくる　扶美代
人情の町人情のある噂　風樹
パンドラの箱に噂を閉じ込める　茂代
看板と違う噂も知っている　次根
どの家も噂の種を持っている　綏子
噂は噂水の流れに任せよう　寿恵子
補聴器を外すと噂聞こえ出す　たもつ
相槍を打つたび深くなる噂　淞丘

佳

もう妻の耳に入っていた噂　清史
相談に乗って噂にまき込まれ　春雄
噂ほど美人じゃなくてホッとする　昌枝
本人が聞いてびっくりする噂　志洋
ここだけという一言が効く噂　圭二

人

噂とは別な横顔見せた意地　紫晃

地

味方にも敵にも変化する噂　充子

天

雪国の恋の噂が暖かい　中山雅城

軸

うっかりと乗った噂に裁かれる

初歩教室

題 ― もっと

三宅保州

課題がある場合、その題そのものを句に読み込むか、それとも読み込まなくてもよいかということについては、古くて新しい問題ですが、要はその題の句意が含まれていれば題を読み込んでも読み込まなくてもよいのです。ただし、題を読み込まない場合は、その題がわからない人などにもその題がわかる範囲の句であることが条件であると私は思います。例えば「母親は勿体ないがだましよい」という句の場合、その課題が母、だますとかであればそのまま折り込まれているから良く、欺く、親という題であれば許容範囲、嘘、ひどい、ありがたい、家族、子というような題の場合は賛否両論というところでしょうか。なお、地域や結社によって読み込むところと読み込まないところがあるとも言われますが、一概には言えません。

因みに、課題を詠み込まないで成功している句の一例を、最近の当誌から抜粋しました。

太字は課題

大切 へその緒がDNAの役に立ち　たつお

反省 気遣ったつもりが傷に触れている　登美

大根 いら立ちの勢い借りるおろし金　富子

喋る 重みある一言だった床柱　雄々

無限 愚かさを数えあげればきりがなし　天笑

なお、題の否定形や同音異語を使った句の可否はどうでしょうか。例えば、熱いという題で熱くないとか暑い、行くという題で行かない、踊るという題で躍るというような使い方の句です。これらの否定形や同音異語を使った句は絶対採らない選者や結社がある一方で、それらの句を上席に抜いている場合もあるのが現状です。私はそれらの句が少なくとも上席に抜かれていると違和感を覚えます。

【添削句】（原は原句、添は添削句）

原 囲碁して　もっと上達し　段貰う　綾乃

添 段とるまでもっと上達したい囲碁

原 食欲に習慣病が横になる　こずえ

課題の「もっと」がわかるように

添 もっと食べたいが習慣病怖し

原 枯葉との恥ずかしマークもっと先　清

添 紅葉マークもっと先かと思ったが

原 年老いてもっとやりたい事多し　稔

添 老いてなおもっとやりたいこと多し

原 もっと先考えられない六十路坂　英旺

添 若い気でもっと先まで見とおせぬ

原 点滴中もっと生きねばとも思う　和友

添 もっと生きるための点滴堪えている

原 鍬を手に老父はもっとと生きる欲　ヨシ枝

添 鍬を持つ父にはもっと生きてほし

原 これからはもっと明るい句にしよう　九好

いわゆる「楽屋吟」的すぎます

添 これからはもっと明るくくらしたい

原 美人でも　もっと上をと　望む欲　智加恵

添 もっともっと美しくなりたい美人

原 欲を出しもっとほしいな知恵袋　節子

「欲を出し」はこの場合言わずもがなです

添 知恵袋もっと大きくしたいもの

原 もっと寄れに顔は笑って身構える　孝明

「もっと寄れ」の理由、情景が見えません

添 もっと飲めと上司に言われ身構える

原 もう一杯喉で手を出す酒の虫　つよし

添 もっと飲みたくて喉から手が出てる

原 試合中もっと頑張れと檄とばす　フジ

いわゆる「報告句」、川柳眼的に作ると

添 もっとがんばれと負担をかけている

原 棒グラフもっともっとと深い椅子　恵勇

原 欲の皮もっともっとと若い頃　円女

添 若いころはもっともっととがんばった

原 もっともっとやればよかったあの頃に　洋介

何をやればよかったのかわからない

添 もっと貯金すればよかったあのころに
原 もっと吹け逆風増せばますファイト　嘉　彦

「増せばます」が重複気味

添 逆風ももっと吹けよとファイト湧く
原 もっともとつい乗せられる口車　永　子
添 口車もっともっとと乗せられる
原 もっと居て本気のつもりお人好し　はじむ

「お人好し」まで読むと冗長気味

添 もっと居て下さいをつい真に受けて
原 宅急便もっと押し込む親心　益　子

宅急便は特定の業者の呼称、宅配が総称

添 宅配便もっと押し込む親心
原 父親ともっといっしょに遊びたい　真　一
添 おとうさんともっと一緒に遊びたい
原 孫一人嫁にもっとと言い出せず　像　山
添 もっと孫ほしいと嫁に言い出せず
原 同情をされて気弱になってくる　鈴　美

課題「もっと」とわかりにくい

添 同情されもっと弱気になってくる
原 もっと降れふれスキー場が泣いている　と　き
添 願わくばもっと降れ降れスキー場

【少し工夫すれば佳くなる句】

原 水仙にもっと咲けよと息吹かけ　栄　呼
添 水仙にもっと咲けよと息を吹き
原 もっと上右だ左だ背中掻き　章　司
原 もっと待とここ迄くればセールまで　千　華
添 もっと待てばきっと大安売りになる
原 宝くじもっとと思い無駄遣い　郁　代
原 もっと重い給料袋夢の夢　満　子
原 朝帰りもっともらしい嘘をつく　邦　造
原 一年がもっと長けりゃいいのにな　文　江
原 お亡母さんもっと孝行したかった　登志子

「亡母」としなくとも亡き母とわかります

添 おかあさんもっと孝行したかった
原 欲の皮もっともっとに溺れてる　高　栄
原 もっと上狙えと親は無理を言う　武
原 もっと上狙えと親が欲を出す　時　雄
原 選りごのみもっともっとでバラサイト　初　恵
添 もっと良い人を望んでバラサイト
原 もっと背が伸びて欲しいと恋心　ゆきの
原 言わずともっと愛してほしい妻　秋　星
原 もっと強く抱いて欲しくて夢さめる　輝　夫
原 知恵拾うもっと明日への辞書を繰る　利　子
添 もっと知恵ほしくて明日の辞書を繰る
原 日本語をもっと正しく伝えたい　芳　江
原 下戸なのにもっと飲めとはご無体な　照　彦
原 もっといい出会いの明日へ夢を乗せ　好
原 もっといい明日あるから生きている　喜　子
添 もっといい明日を夢見て生きている
原 転ぶまいもっとゆっくり自己暗示　忠　子

【佳句】

国民にもっと痛みを押しつける　アヤ子
もっともっと楽しいはずだ人生は　大　鯰
人生はもっともっとの連続だ　弘　之
貴乃花もっと土俵で見たかった　弘　子
バスツアーもっと見たいが急かされる　准　一
万歩計もっと歩けと不満顔　重　之
写真よりもっと美人と口を添え　政　子
要するにもっとお金が欲しいだけ　昌　鼓
遺産分けもっと欲しいが痩せ我慢　侑　子
まだもっと生きるつもりの保険かけ　敏　子
もっと良い答えを探す汽車に乗る　幸
どうせならもっと上手な嘘がよい　初　恵
もっと時間ほしいと燃えた日もおぼろ　美恵子
いい夢の続きをもっと見たかった　文　江

【今月の推せん句】

一歩だけ下がればもっと広い視野　吉村　幸
もっともっと明日のページを赤く塗る　田中美弥子

【私の句】

履歴書にもっと書きたいことがある
標的をもっと大きくしませんか

秀句鑑賞

同人吟　西谷大吾

―3月号から

川柳を読み、川柳らしきものを作るようになって九年目になる。川柳は人間陶冶の詩であると言われるが、深く詮索することもなくただ我武者羅に作ってきたような気がする。

作句にあたっては対象（素材）を相対的に観ることによって自分なりの発見に努め、感動に裏打ちされた人間味のある句をめざしてはいるのだが、なかなか思うような句を作れないでいる有様である。どちらかというと技法にはあまりとらわれないで、自分の思いを直截に表現する（吐き出す）ことが多いので、ややもすると荒削りで奥行きのない作品になりがちである。基礎的な理解を疎かにしてきた報いであろうか。

今回の秀句鑑賞の依頼は作句体験の浅い私にとってはすこぶる酷な話で荷の重い課題であり、到底手に負える代物ではない。四苦八苦の末の間に合わせで、甚だ心もとない鑑賞になってしまったことをお詫びしたい。また、私の好きな句を主に選句したので、ご不満もあると思うが、悪しからずご容赦の程を。

割り箸がきれいに割れて仲直り

高瀬霜石

三月号巻頭の一句である。霜石さんの句を読むたびに、そのウエットの絶妙さに感心させられる。長年にわたって磨いた川柳眼のなせる技であろうか。到底、真似のできる代物ではない。

中七に作者の思いがよく表現されている。

生きている時間を刻みだした癌

福永ひかり

江國滋という俳人に「癌め」という闘病俳句を主とした句集がある。食道癌の告知を受けてから死の間際まで、癌と対峙して生きることへの執念を燃やしつづけ、癌をテーマにした句を吐きつづけたのである。句集の最後には〈おい癌め酌みかはさうぜ秋の酒〉という敗北宣言の句が収められている。刻一刻と死に近づいていく苦痛と闘いながらの壮絶な作句である。

生きている時を「癌が刻みだした」という把え方は作者独自のものである。

笑ったら損するような人が増え

三好専平

まったくその通りである。何が面白くて生きているのか、苦虫を噛みつぶしたような表情の人が多過ぎる。そして、前屈みの姿勢でせかせか歩く。このせちがらい世の中を生きるには、脇見をする余裕さえないのかも知れぬ。何ともやりきれない時世である。

明日は明日の風が吹く。妙に天国の寅さんがなつかしい句である。

身の丈の幸せでよし福寿草

川崎ひかり

いまを生きている幸せに満足できずに背伸びをするから、人のくらしを羨むことにもなるのだ。いまの自分の幸せをじっくり噛みしめることが、充実した人生につながると思うのだが……。

福寿草との取り合わせが効果をあげている。

見てならぬ夢を何度も見て老いる

中居善信

人は常に夢を追いながら生きている。いや、だから生きていられるのかも知れない。小さな夢でもいい。夢を持たないからには、この不況の時代を乗り切ってはいけないような気がする。

今は亡き坂本九の歌が聞こえてくる。

手さぐりで来た道だから自負がある

高橋岳水

岳水さんは、人の命を預かる医師である。それでいてごう慢さがない。人に接する態度は実直そのものである。だからこそ、真っ当な自分なりの道を切り拓くことができたのだろう。たとえその道がでこぼこ道だとしても、苦労した汗で輝いて見えるのだ。

沢庵の音が夫婦のハーモニー

相馬銀波

何気ない生活の一齣に焦点を当てた句である。

長い人生を互いに支え合い、苦労を共にしてきた老いた夫婦が居る。何も言わなくてもお互いの胸の内はよくわかるのだ。今日一日を反芻しながら、言い合わせたように沢庵を噛んでいる。その音に穏やかな生活のハーモニーがある。

生きのびた命ゆっくり水をのむ

渡部さと美

（昨年夏家が全焼）の添え書がある。

自分の失火にしても類焼にしても、あれよあれよという間に燃えて灰になってしまうのだから恐ろしい。心からお見舞い申し上げる次第です。それにしても、よく命が助かったものである。でも、これからがまた大変。家屋の新築やら家具の購入やらで気苦労の連続である。どうか、気力を出してがんばって欲しいと思う。

「命が水をのむ」しかも「ゆっくりのむ」という発想に、作者の何とも言えない安堵感が表わされている。

口も手も出さぬと決めているダルマ

高田美代子

触らぬ神にたたり無しとか。若い人たちはそれなりに自分たちで知恵を絞ってがんばっているのだ。下手に口出しをして、せっかく膨みはじめた蕾を摘んでしまっては元も子もないではないか。手が痒くてうっかり手出しをしたいところだが、ここはぐっと堪えて、じっと我慢、我慢。

母さんが死ぬとは誰も思わない

高杉千歩

飾らない母が一番美しい

福本英子

私にも父と母の句を作った時期があった。どちらかというと、母の句が多い。それは、母と子の絆がへその緒で結ばれているからだろうか。父には悪いが、母の夢を見ることが多い。「母の海」という表現があるが、子の思いが辿り着く場所は母の海なのかも知れぬ。だから母は、いつも身近にあって死ぬことのない菩薩のような存在なのだ。

頼られてたよって生きる冬の章

門谷たず子

いろんなことに遭遇した長い旅路であった。どんな時にも喜怒哀楽を共に分け合い、手を取り合って生きてきた。身体の自由もままならぬこれからの余生は、なおさらである。

下五に、残り少なくなった余生の侘しさがよく表われている。

正直に生きているからよく迷う

岸本宏章

いまの世の中、真っ当に生きることは難しい。小賢しく立ち回ることができれば、あれこれ迷わずにすむのだが…。それは、正直な性格が許さないのだ。

◆次に、紙数の関係で取り上げられなかった作品の中で、特に印象に残っている作品を挙げておく。

淋しくて羊も人も群れている

黒田能子

急がねば月がどんどん痩せていく

伊藤寿美

八月の雲は哀しい過去を持つ

刈田泰司

独り身の窓におむつが干してある

杉本孝男

同人特集

嘘百句

平成八年～平成十四年
同人吟から　編集部

その嘘に女は縋りついてゆく　路郎
嘘をつく人間ばかり　しゃれこうべ　薫風

嘘一つざぶざぶ洗う古里で　山本　玉恵
弁解に笑えるような嘘があり　堀畑　靖子
雪ひらひらまた美しいうそを言う　松本　文子
3Bで書くから嘘は隠せない　細川　稚代
嘘のうまい医者に最後は診てもらう　新家　完司
嘘言えば心が貧乏ゆすりする　岸　桂子
真心のこもった嘘をついている　鈴木　公弘
人間一人生きてる証嘘を言う　坊農　柳弘
美しい嘘がヴィトンの中にあり　片岡　智恵子
嘘ばかり書いて余白のない日記　川島　諷云児
すこし嘘すこし化粧をしておんな　門谷　たず子

真冬日の赤い苺は嘘つきだ　斉藤　劦
政治家の嘘を横目に桜咲く　前　たもつ
喜ばすためには嘘も一寸混ぜ　前田　昭子
嘘一つ言って二三歩つんのめり　森下　愛論
もう嘘はばれているのに物申す　山本　玲子
隙のない奇麗な嘘で攻めてくる　石谷　美恵子
補聴器に嘘の福祉は通らない　森　茂美
返し針女の嘘はくどくなる　羽津川　公乃
嘘ついた数だけ染みになっていく　榎原　公子
穴うめの嘘を重ねてどうしよう　黒田　くに子
風上で嘘をばら撒くのは誰だ　福井　桂香

秋の空地球の厚着嘘のよう　楠見　章子
この辺で落ちをつけねばならぬ嘘　松本ただし
ペン走る無口が嘘のような人　藤井　正雄
最後まで嘘を通した愛もある　美田　旋風
嘘だろう役場が僕に古稀という　高野　宵草
美しい嘘を聞いてる花筵　石森　利昭
友達の嘘はいつかの俺の嘘　仁部　四郎
愛のある嘘なら舌を抜かれまい　富坂　志重
美しい嘘が一輪挿してある　大橋　政良
道草で少し覚えた嘘の味　川崎　ひかり
嘘一つ書けば自分史嘘になる　安平次　弘道
方便の嘘すら言えず世に迷う　神原　文
嘘をつく時にあなたは鼻なでる　小糸　昭子
アメリカの嘘をテレビで見せられる　岩本　笑子
嘘ついたとたん傾くヤジロベー　上田　宣子
毎日の小さい嘘が胃に溜まる　村上　信子
寂しさの嘘へ優しい嘘返る　亀岡　哲子
嘘というかけがえのない情のあり　西口いわゑ
嘘半分その半分が魅惑的　奥田みつ子
言い訳も嘘もつかない自尊心　出口セツ子

嘘を吐く部屋で酸素が薄くなる　小寺　花峯
酒やめてからの人生嘘がない　三好　専平
また転ぶ嘘も愛想も言えないで　近藤　佳子
病名をだまして父にりんご剥く　津村志華子
鼻の汗嘘がみんなに読まれてる　寺井　東雲
嘘がさらさら別注の脳らしい　野口　節子
惚れられた昔話は嘘でよし　宗　水笑
住所氏名年齢女みんな嘘　吉田孔美子
今日の嘘大事に仕舞う律義者　中村　金祥
しばたたく目がうそうそと言うてはる　福田　満州
美しい人工芝でかくす嘘　永田　俊子
方便がいっぱい詰まる袈裟の裏　相馬　一花
美しい嘘を包んで胞子とぶ　宮崎シマ子
すぐ剥げる嘘を固めて逢いにゆく　中後　清史
嘘のないくらしで金が貯らない　川端　一歩
嘘つくと女にも出るのど仏　山本　義子
吐いたうそ生き生きとして風に乗る　舟渡　杏花
霧深し嘘がホントになってくる　原　みさを
消しゴムで消せる程度の嘘にする　高瀬　霜石
糸電話嬉しい嘘を言ってくる　大橋　鐘造

トゲのない嘘から受けた致命傷　奥谷　彩子
嘘が下手千六本の刑に処す　川久保　睦子
飲みこんだ言葉に嘘はなかったか　光井　玲子
雪が降る去年の嘘を消すように　川原　章久
ピンク色の嘘で他人を励まそう　太田　扶美代
よく笑いよく泣き嘘もうまくなり　三宅　不朽
大胆な嘘を見抜いて貝となる　冨山　檳榔樹
嘘のない会話酸欠おこす部屋　籠島　恵子
見抜かれた嘘もトークにする司会　増田　紗弓
化粧品売場の嘘を信じたい　中川　楓
生きて来たまんまの顔に嘘はない　吉岡　修
味噌のかび表示が嘘でないあかし　榊原　秀子
ポケットに使い残した嘘がある　高田　美代子
ウソつけぬ男を仲間からはずす　志田　千代
愛ゆえの嘘は確かめたりしない　和田　つづや
嘘半分ビールのせいにしておこう　津守　なぎさ
三歳の孫身の丈に合うた嘘　山本　希久子
あちこちで嘘あちこちで剥げてくる　森　茜
最安値株は改革嘘とみる　早川　棲世

秋風に消された今日の軽い嘘　大谷　篤子
良心に誓ってなどと嘘ばかり　中島　志洋
嘘　涙　別離　政界も演歌調　都倉　求芽
半額で買ったと妻の嘘を聞く　生嶋　ますみ
嘘だよと言っては逃げる春の蝶　川本　畔
虚言癖吐く本人は記憶ない　中村　叡子
美しい嘘に階段踏み外す　倉益　一瑶
嘘だとは知ってる母の広い胸　久谷　まこと
方便の嘘が即効薬になる　大石あすなろ
善人の嘘は目に出る汗に出る　平田　実男
嘘吐いた日から乱れてきた歩幅　神保　坊太郎
アリバイを洗われ嘘がほころびる　穴吹　尚士
目をそらし小心者の小さい嘘　安芸田　泰子
水割りに気軽な嘘を混ぜておく　坪井　孝一
国会へ嘘発見器送ろうか　赤川　菊野
嘘で固めた人生だって道はある　下田　茂登子
嘘みたいな値段ついてるかぶと虫　大川　桃花
ハンカチで嘘を拭うと真っ黒だ　小谷　孝美
人間に嘘はつかないなす胡瓜　古手川　光

—水煙抄

秀句鑑賞

—3月号から

丹下　美津子

てのひらで踊らされてる夫の影

原　賢

結局は妻の手のひらの上で、踊らされていることになるのです。

ホッチキスが怖いと紙の私語を聞く

塩路　よしみ

こよりで綴られていたころの温かさが欲しいと紙のすすり泣きかも知れません。

割り切ってからのレールは曲らない

前上　英一

もやもやを吹き飛ばした決断にはもはや迷いがない。まっすぐなレールをただ走るだけです。

何歳になっても親は子を案じ

川島　良子

いつまでも子を思う親心。七十歳の息子を叱っている母、ありがたいものです。

正座して鎮火するのを待っている

藤田　芳郎

つまずいてしみじみ知った人間味

須磨　活恵

七転び八起きということばに、はじめて友の人間味を知りました。また妻や子のやさしさも。

弁論で鳴らした割に物静か

藤井　則彦

雄弁家で鳴らした学生・青年時代、何十年ぶりかにクラス会で再会したら、すっかり落ち着いて、物静かな老紳士になっていて見違えました。

騙されてやろう言い訳じっと聞く

両川　無限

せっぱ詰まった言い訳を、そうかそうか、うんうんと、じっと聞いてやりましょう。彼にも解っているはず。

母さんと呼べばどなたと母の問う

山田　婦美子

惚けるとは、一番怖くて悲しいことです。惚けないためにも五七五の趣味に励もう。

定年後何故か帽子が好きになる

伊勢田　毅

夢に見た定年を迎え、自由の身になったのです。好きな山登り、五七五の趣味の片手に帽子を手離さぬ。定年になってからがむしろ多忙のようです。

飢餓の子に分けてやりたい白い飯

伊勢　八重子

痩せ細った子供達の姿、哀れです。できることなら分けてやりたい。同じ地球上の人間として、なんとかならないものでしょうか。

言い訳になるから貝になる男

岡田　幸生

男とは、言い訳などしないものと、子供のころから母に教えられたので、貝になるしか仕方がないのです。

水墨の藁屋絵となる雪景色

岩本　美緒子

夕べの事故など、なかったかのようにすっぽり包んだ雪景色。墨絵のような藁屋根にひと筋の小川が流れ、見事な一幅の絵を見ているような気になります。

逆風を独りで耐えるトップの座

鈴木　一弘

トップとは哀しくしんどいものですね。善きにつけ悪しきにつけ、独りで堪えるのがトップの座、頑張るしかないでしょう。

よい雨に積んでた本を読みふける

黒崎　美紗子

今日は朝から待ちに待った雨、子供達もそれぞれ学校。積んである柳誌のページをゆっくりとめくる。刻のたつのも忘れて。

本社　三月句会

三月六日（木）午後一時
アウィーナ大阪

啓蟄の六日、曇後雨という予報通りの天候であったが、119名の参加があり、昼の句会としては今季最終の三月句会は、にぎやかに開催された。

はじめに二月に亡くなった高須賀金太・山門幸夫氏に一分間の黙祷を捧げ冥福を祈る。

次いで先月にお話をされた西田柳宏子氏が、駅で転倒し、救急車で運ばれたいきさつを話し、御心配をおかけしたが、怪我も治り退院したと報告をされた。

お話は、参与の宮崎シマ子さん。以前は、年をとっても若い人の世話になるまいと思い続けていたが、最近になって、お世話になることが多く、若い人の親切に認識を改めた体験を話す。

脳梗塞で後遺症のある主人と小旅行をしたところ、駅員は勿論、行きずりの人が、車椅子の運搬をすすんで手伝ってくれたと言う。それも乗り換えの度に助っ人が現れることにすっかり感動したという。

また、句会の帰りの駅で、一見紳士風の男性が、エスカレーターの列に割り込んだのでちょっとした口論になったやりとりを、会場の笑いを誘いながら話す等の30分であった。

月間賞は前たもつ氏（大阪市）に輝く。

（司会―朝子）（記名―月子・恵子）
（受付―義・春）（清記―義）

席題「卵」

米澤　俶子選

爽快に朝のたまごをポンと割る　いわゑ
初たまごふわふわ焼いて亡夫に上げ　和香
生み立てとたまごのラベル信じ買う　公誠
値の安さ知らずに鶏はたまご生み　甚一
お見舞は卵と決めていた昔　朋月
昭和一桁たまごは高嶺の花でした　小雪
企みのままで終ったゆで玉子　澄子
時間ないたまご御飯で間にあわせ　三喜夫
たまご焼き位は出来る妻の留守　笛生
つるりんと煮ぬきのようないいお肌　たず子
マジシャンの口から生れ出た玉子　きらり
単身赴任上手になったハムエッグ　正雄
末は博士か大臣かこのたまご　春蘭
オーラある卵に未来かけてみる　澄子
どう見ても立ちそうでないたまごだな　太郎
忘れられひとりぼっちのたまごっち　玄也
無精卵いつか日本の姿かも　哲男
産卵にはるばる鮭が帰る川　萬的
丁寧な医師のたまごの聴診器　ひさ乃
たまごから生まれたような可愛い子　天笑
宇宙飛行のたまごでいのち賭けている　寿子
モー娘のたまごを作るオーディション　菜月
玉子屋に嫁いでたまごアレルギー　美代子
バラ寿司へ錦糸卵をトッピング　賢子
本物の恋になるやもたまご抱く　朝子
カマキリのたまごを庭で育てる　月子
弁護士のたまごだという清らかさ　真理子
取り扱い注意わたしは卵です　希久子
たまごパック皺とれてきて若がえる　ルイ子
遺伝子の流れに熱い卵うむ　愛論
蚕から虹を織ってるおばあちゃん　月子
板前五年やっとたまごの殻を脱ぐ　酔虎

佳

お好み焼返すとたまごこんにちは　孝一
たまごにも小さな未知という世界　いわゑ
あれくらいと思われていたコロンブス　九好
温泉玉子ひと足先に湯につかり　昭
少年にでかい未来という卵　保州

人

虫の知恵葉裏へたまご生み残す　睦子

地

川柳塔の明日を担ってたつたまご　光久

天

関取の卵も輸出する蒙古　洋

軸

大層な皿にキャビアがかしこまる

兼題「やわらかい」　松原　寿子選

やわらかい笑顔に乗って買わされる　照　子
絵手紙の小羊の瞳がやわらかい　ア　キ
告白はソフトクリームとけぬまに　りつえ
おふくろの味が家族をやわらげる　一　風
お粥トーフただ今入歯修理中　シマ子
やわらかい陽射しに花も歌い出す　三喜夫
やわらかい言葉隣はいい人で　笛　生
やわらかく煮こごり溶けてチンと鳴る　章　久
風花に心やわらぐ梅の花　和　香
二人だけの夕べにやわらかいワルツ　澄　子
やわらかなお叱り胸に根を下す　五　月
やわらかい手首でジャズのヴァイオリン　天　笑
やわらかい話もまぜて言いきかす　真理子
泣きに来た仏の視線やわらかい　弥　生
やわらかい顔が一転母の鞭　きらり
エンゼルの矢がやわらかくハート射る　澄　子
やわらかく話せばぼくもちゃんと聞く　甚　一
柔らかい胸に触った夢だった　螢
おでんふつふつ大根がのぞいてる　メ　女
やわらかい日射しがブルーテントにも　倫　子
やわらかいぬくもりあった木の母校　修
やわらかい一言なのに胸を打つ　いわゑ
発想を変えると石もやわらかい　楓　楽
やわらかいだけで介護はつとまらぬ　シマ子
負けて勝つ風が心にやわらかい　潤　子
遊び心入れたら頭やわらかい　昭　子
やわらかい光の魔法ルノアール　朝　子

一枝ずつ鱗を落しやわらかい　恵　子
よく耕すとやわらかい頭脳でき　深　雪
てのひらで豆腐を切っている男　太　郎
やわらかい母の瞳に背けない　保　州
やわらかい脳と心で生きる八十　セツ子
やわらかい言葉あたため生きている　篤　子
佳
啓蟄の大地は温くやわらかい　比ろ志
やがて春胸ふくらんでやわらかい　東　雲
柔軟に生き敵も味方もつくらない　希久子
マシュマロの頬っぺよ君は天使だね　小　雪
やんわりと聞いてこころを覗く母　隆　盛
人
やわらかい拳で掴む明日の地図　楓　楽
地
春の目覚めやわらか告げるモーツァルト　孝　一
天
怖い顔してやわらかに口説かれる　月　子
軸
帯上げのふくらみに思慕秘めておく

兼題「愛」　池　森子選

人間不信愛が足りないではないか　螢
愛一途指の表情でも分かる　薫　風
叱られたので愛されていると知り　満津子
庭の隅愛をもらって咲く命　美　花
それも愛やれ減塩だ減量だ　保　州
一途さに愛と憎しみ紙一重　加津子
LOVEの字がちろちろ燃えるぼくの辞書　富　子

三食を食べているかと母の文　一　歩
通帳に愛の証のゼロ一つ　高　栄
日溜りで痴呆の老母とする会話　セツ子
その日まで病夫に嘘をつき通す　寿　美
がむしゃらに愛は奪えと春あらし　隆　盛
風よ愛よいつも私を通り過ぎ　希久子
封印の愛をほどけば雪なだれ　たず子
愛憎のはざまで咲かす沙羅双樹　楓　楽
愛憎の疲れ溜ってゆくばかり　修
錆覚の愛を温め合う夫婦　ひさ乃
短編へ小さくたたむ片思い　ばっは
憎しみも悩みも愛の後遺症　玄　也
薄氷女の愛が透けて見え　たもつ
それぞれの愛が行き交う交叉点　鹿　太
ふところにひそかな野火を抱いて愛　美代子
一本の糸で編み込む愛その他　アキ
溺愛は底なし沼の臭いする　比ろ志
百態の愛にんげんにある絆　朝　子
奪ってはならない愛を抱いている　冬　葉
風化していなかった愛その目　天　笑
ありったけの愛で男につけた駄斗　真理子
どん底で拾うほんとの人の愛　一　風
美しい嘘にかくれた愛もある　萬　的
愛に応えんと一本の薔薇になる　扶美代
深い愛もらい森の風に会う　笛　生
佳
宝石を飾るひっきりなしの愛　雅　文
仕方なく仮病で愛を試し斬り　直　樹
一冬を越してわたしの愛にする　扶美代

紫を愛し続けた紙人形　メ女
亡夫の掌が触れた気がする霧の中　アキ
人
百歳へコトコト愛を炊いている　重人
地
究極の愛で鎖を解いてやる　泰子
天
やがて春愛しきものを手の中へ　月子
軸
塩壺に塩を補うのは愛だ

兼題「ほいほい」　岩佐ダン吉選

ほいほいと丸投げだけで済ます人　あやめ
ほいほいとついて来たのにコーヒー館　いわゑ
ほいほいと聞いてるようで聞いてない　比ろ志
百円ショップほいほい買わす術をもつ　俶子
ほいほいと調子合わして墓穴掘る　一風
ほいほいと押した判子が命とり　鐘造
森林浴わたしほいほい充電中　睦子
七光りほいほい受けて行き詰り　ばっは
ごきぶりの交通事故だほいほいほい　九好
ほいほいがいつの間にやらどっこいしょ　惠勇
星条旗ほいほいついて笑いもの　たもつ
ほいほいと気のいい鴨がねぎ提げて　恭昌
ふたりならほいほい飛べる水溜り　楓楽
ほいほいと雇うてくれるとこもなく　笛生
ほいほいと押さないように核ボタン　英子
真冬でもゴキブリホイホイよく売れる　弘風
ほいほいと出て行きたがる俺の飛車　真理子
ほいほいと作ってならぬ核兵器　正坊
アメリカにほいほいついて行く日本　倫子
可も不可もなくほいほいと今日も飲む　正雄
取巻きにほいほいされている二世　玄也
ほいほいと図に乗り梯子外される　光久
犬散歩人間ほいほい付いて行く　高栄
ほいほいと神輿かついだのが誤算　冨美子
愛してると言われほいほい馬鹿でした　澄子
ほいほいと追い立てられる余生だな　小雪
女医さんに変わりほいほい通う父　保州
にんげんをつづけていますほいほいと　柳弘
ほいほいと相槌上手聞き上手　昭子
ひと言でほいほいついてくる男　月子
ほいほいと指輪外して翔ぶ妻よ　保州
断わりもなくほいほいと老けてゆく　篤子
佳
撒き餌とも知らずほいほい雑魚の群　澄子
ほいほいと受けるお方に頼めない　甚一
ほいほいと貸すがキッチリ鬼が来る　章久
ほいほいと買うてパソコンうなされる　五月
ほいほいと尻尾を振って核の傘　隆盛
人
欠伸しながらほいほいついて行く　義
地
ほいほいとジョークが出ない五月病　りつえ
天
メロン切る雑魚ほいほいと寄ってくる　雅文
軸
多数決にほいほいついた悔いがある

兼題「踊る」　三宅　保州選

貧乏神は大豆ぐらいで踊らない　螢
無理やりのタクト世界が踊らされ　直樹
忠誠を誓う踊りに深い闇　賢子
踊らずにすんだと笑顔見せた人　玄也
踊ってる途中で整形に気づき　義
ダンスには流れの悪い僕の足　太郎
チークなら僕も上手に踊れます　弘風
このごろは妻のリードで踊ってる　泰子
妻以外の女とならば踊りたい　度妙
今更に踊る相手を変えられず　孝一
春一番滝廉太郎花踊る　重人
棒グラフ伸びカッポレに凝りはじめ　月子
蛇味線がなると母ちゃん踊り出す　伽羅
わたくしも踊っています車椅子　森子
七人の敵と踊って来た靴だ　朝子
世渡りへ踊りつかれているピエロ　民
口べたがバラ百本で踊らされ　シマ子
泣きたくないから踊っているだけだ　楓楽
とりあえず踊りそれから策を練る　セツ子
愛憎のワルツ未完のまま踊る　みつ子
シャルウイダンス余生いよいよ輝けり　寿美
せめてものラストダンスは華やかに　弥生
散りぎわは仏と踊る夢の中　甚一
宴たけなわ飲まぬお方がよく踊り　重人
ひょっとこと踊るおかめのリズミカル　扶美代
ためらっていつか踊りの輪に入る　美代子
雪の傘たためば雪ン子が踊る

いい電話切ると金魚も踊ってる　一風
四コマの中でたっぷり踊ろうか　寿子
踊らせておこう何時かは折れる鼻　鐘造
踊りの手明日を手さぐりしてるよう　希久子
ほどほどに踊ろう命ある限り　昭子

佳

この辺でいつも哀しくなる踊り　扶美代
ふるさとに私を許す盆踊り　隆盛
季語の無い街で着メロ踊ってる　冨美子
残されて一人影法師と踊る　森子
かっぽれが似合う男の自己主張　冬葉

人

踊ったらこちらを向いてくれますか　典子

地

地獄まで付き合うひととなら踊る　鹿太

天

輪になって踊ればみんないい笑顔　加津子

軸

生きている限りは仮面舞踏会

兼題「生　む」　河内　天笑選

本当に四月一日生まれです　洋
生きるとは毎年食べる雛あられ　あやめ
2003年孫はアトムと同級生　五月
上の子は産婆だったと古日記　正雄
生みたては代わり番こに食べてます　修
国生みのくだり朗読する古事記　寿美子
単純でいいさ笑いが生れ出る　月子
初孫が生まれて嫁も強くなり　菜月

呱呱の声年金背負うでかい声　高栄
神業と思うミクロを生む職人　愛論
人間が生んだドリーという羊　(志)千代
宗教の違いが生んでいる戦さ　萬的
答弁をすればするほど生む疑惑　冨美子
好記録生んだ負担を背負い込む　昭
風が生み風が消してく風紋詩　りつえ
産声が父と母とにしてくれる　太郎
引き出しで生まれるひなに砂がない　度
ヘソクリを生む家計簿をつけてます　潤子
よう生んだ孫から貰うお年玉　東雲
ストもせず安い玉子を生みつづけ　笛生
赤い糸つなぎそこねて生む喜劇　みつ子
安心を生む携帯の一通話　五月
猫の子が生まれて隅に追いやられ　ダン吉
節約をモットーの妻知恵を生む　照子
忍の字を胸にたたんで生むと決め　寿子
胎動の度に母性を膨らます　つづや
ABとAからOの子が生まれ　度
生むだけの親を母とは言わせない　昭
よい結果生んでゴチャゴチャみな忘れ　たもつ
弱点を煮つめ生まれた処世術　千里
子を生んだ体験談がかしましい　恵子
春が来て青い卵を一つ生む　森子

佳

うっかりもちゃっかりもして笑い生む　昭子
生む生まぬ小さくなっている胎児　理恵
マタニティー生むしあわせに満ちている　いわゑ
晴ればれと産後の母は美しい　加津子

悪人が生まれる月のない夜に　扶美代

人

核生んで核の置場に困ってる　典子

地

二人目が生れんとするワンルーム　耕治

天

生んでくれただけで母さんありがとう　前たもつ

軸

毎日のように悩みが生まれます

訂正とお詫び　本社二月句会（3月号P100下段17行目）北鮮→北朝鮮

本社四月句会から、開催時間が午後5時半からとなりますので、間違いのないようお願いします。（裏表紙内側参照!!）

常任理事会＝3月3日、於アウィーナ　出席18名　①一賞選考規定改正について（参与提案）は、一部改正し他は引続き検討する　②句碑見学・日川協香川大会参加バスツアーを企画事業部から説明　③川柳塔合同句集発刊は、来年80周年大会開催予定があり、平成17年とする　④第9回川柳塔まつり選者及び兼題を協議の上決定　⑤昨年各地句会へ依頼したアンケートの集計報告（同人部）　⑥同人4名承認　⑦その他
次回常任理事会＝4月7日（月）13時からアウィーナ大阪207号室

追悼　石原靖巳さん

太田　昭

靖巳さん、川柳塔やなにわ柳壇などで、貴方の句にお目にかかれなくなってから、随分と月日が流れたように思え、少しでも早いご快復をと願っておりましたのに、奥さまから一月二十六日靖巳さんご他界のお知らせを頂き、まさかという気持ちと哀しさで一瞬呆然といたしました。川柳塔社の常任理事として、吹田川柳会、翠洋会の総務として日々ご多忙を極めて居られた十三年の暮れ辺りから、貴方にしては珍しくお疲れを口に出されるようになりましたが、靖巳さん持ち前の旺盛な責任感と生真面目さに加え面倒見の良さから、お体に障りが無ければと案じておりました。ご自身としてもどんなにか歯がゆい日々であったかと考えますと心が痛みます。

福の神と肩を組みたい年男　　靖巳
（十三年二月　七十二歳）

納得がいかないままに幕が下り　　靖巳
（十四年一月　入院前）

年が明けて十四年一月、靖巳さんから翠洋会の経理等を私に引き継ぎたいとのお話がありその頃から何度か靖巳さんのご自宅で川柳のお話や、私と丁度同じ頃に札幌にご勤務されて居られたことなど、楽しくお話をしておられましたのに、間もなく入院をされ、お見舞いに伺いましたときの、ご自分のお疲れを私どもに見せまいとする気丈な貴方のお姿が今でも目に焼きついて離れません。

時々の弱気を叱る影法師　　靖巳
（十四年二月　入院中）

このように男の意地を感じさせる多くの作品の中で、奥さまを詠まれたいくつかの句が想い出されます。

妻がいるそれだけでいい秋夜長　　靖巳

定位置に妻が眠っている安堵　　〃

男っぽい優しさとでも言うのでしょうか、奥さまへの思い遣りと、共に老いてゆける安堵感みたいなものが伝わって参ります。

薫風先生は著書『橘高薫風川柳文集』の中で、石原靖巳さんを「今少し早く川柳界に登板されていたらと思う紳士、私の身近な相談役のお一人である」と書いておられます。

私は、川柳塔を始め、吹田川柳会、あさひ会のほか翠洋会でご一緒致しましたが、貴方の力強い指導力と、徹底的に面倒を見ようとされる懐の深い温か味が多くの川柳仲間を引きつけたのではないかと思っております。

相談の出来る大きな柱を失った哀しみと無念さに耐えながら、靖巳さんの川柳へのひたむきさに惹かれた私達で、貴方の残された道を守って参ります。

川柳塔の昨年八月号が最期になってしまった貴方の句を、ここで胸に刻みながら、心からご冥福をお祈りいたします。

靖巳さんありがとうございました。

楊貴妃の化身か雨の花菖蒲　　靖巳

似たような傷を持つから信じ合う　　〃

ウツの字が未だ書けるから呆けてない　　〃

群れにいてあらぬ妥協をしてしまう　　〃

ところてん昔の部下に追い出され　　〃

渦潮も恋も激しい方がいい　　〃

合掌

なぜ急ぐ寒き黄泉路のひとり旅　　昭

「金太ぁ」の呼名が今も……

岩佐　ダン吉

早春の泉州路、小雨の中を岸和田駅下がりにさしかかっても、「ダン吉、ファイトや」の声はもう聞けませんでした。毎年、泉州国際市民マラソンの応援に来てくれた高須賀金太さんは二月十日、六十八歳の生涯を終えました。肝不全でした。

一月の末に重美夫人から「主人が川柳の会費をダン吉さんに届けてくれ、と病院でききませんのや」の電話をもらいました。

すぐに病院を訪ねましたが金太さんは「大丈夫や、ゆっくり良くなろうよ」の呼びかけにも苦しそうに身をよじり、「ああ、すまんな」と答えるのみでした。夫人からは「12月の本社句会の日は　杖ついてでも行く　私にも付いて行ってくれと言うてたんですけどねえ、もうその時は足があかんようになっていて…」。

預かった会費は金太さんの出身柳社・川柳大阪（大阪市交通局）、はびきの市民川柳会、岸和田川柳会、あかつき川柳会（日本共産党川柳後援会）に届けましたが、あの重態の中でも川柳にかけた先輩の炎に胸が熱くなる思いがしました。

金太さんは選者になると明瞭で朗朗とした披講、そして会場を圧する「金太ぁ」の呼名―どれだけ句会を盛り上げたことでしょう。

金太さんはまた、川柳・日本語の研究にも深く、私がよく「歩く広辞苑や」と言うと「あ、またダン吉がおちょくってる」はにかむ顔が今も浮かんでくるのです。

金太さんはよく「ダンちゃん、仏頂面しとらんで柳友と交流せなあかん」と言い全日本川柳愛媛大会を始め隠岐、弓削、竹原…あちこちの大会に誘ってくれ、全国の柳友を紹介もしてくれました。金太さんの「日本酒」の眼力はみなが認めるところですが、旅行先でも酒造所巡り、「蔵元で地酒が飲めるのは最高やで」と試飲のはしご。大阪の句会の帰りもあちこち寄りましたが、金太さんは（一般的に）「お酒」なんて注文はしません。必ず一升瓶ごと持ってきてもらい、原料米から精米の具合…お皿にこぼれた冷酒をまず飲みほす顔はほんと幸せ一杯でしたね。

天国へ行っても酒があるやろか　金　太

そんな金太さんも二年ぐらい前から「医者にも言われたし酒はやめる、ついでに煙草も―どや、うれしいやろ」。でも句会後の飲み会には出てくれ「しやない、割り勘やよって高いもん食うたろかい」とニヤリ。

金太さんはくらし、平和…も詠みました

憲法に戦争しないと書いてある　金　太

いつも「うちのお母ちゃん」と言っていた重美夫人が色紙を・真人さんが写真・さほりさんが似顔絵、家族ぐるみで出版された句集『夫婦傘』をまた手にとると、重態の金太さんを不眠不休で看ていたご家族の祈る思いも伝わってきます。

ほころびを繕い合うて夫婦傘　金　太

時にお宅にも伺いましたが一杯の後は、膨大なラテン音楽のコレクションを聞きつつ金太さんの煎ったコーヒーを飲む、今もあのゆったりとした日が蘇ってくるのです。

金太さん、ほんまにありがとう

金太ぁの呼名が今も耳にある　ダン吉

山門幸夫さんを悼む

仁部四郎

山門幸夫さんは、まことに行動力のある人であった。公正な発想と正直な敢闘精神のある人であった。

昭和六十三年四月に川柳塔唐津支部の仲間になられた時は、大正五年（一九一六年）のお生れだからすでに七十歳を超えていたのだが、すこぶる元気であった。毎月の例会はもちろん、大阪での大会にもよく参加された。

豊中市に娘さんの嫁ぎ先があって、そこを訪問するのを楽しみにされていたのだが、関西旅行中に発病して、娘さんのお知り合いの医師のもとで養生することになり、住まいも唐津から豊中へ移して今年は三年めであった。

山門幸夫さんは、軍人であり実業界の人であり、川柳人であった。

昭和四十年八月十五日に第一刷、平成六年八月十五日に第二刷が出た『自分史・チャンギーの月』は、軍隊時代の回想と、復員後の実業人としての活躍をその主たる内容としているが、闊達で思いやりに富んだ人柄を証明する文章が綴られている。多くを紹介する紙数はないので、「はじめに」のごく一部を紹介する。

苦悩する世界の明日がどう展開するか、もちろん誰にも分からないことであるが、終戦から現代に至る迄、世界中で不幸な事態の発生が続いて居り、冷い戦争を越えて、熱い戦争が火を吹いている。このきっかけが、何時太平洋戦争のような大戦争に爆発発展して行くか分からない。

大正五年鹿児島県川内市に生まれて、県立川内中学校卒業後、所沢陸軍技術学校から豊岡陸軍航空士官学校を卒業し、最後の任地はシンガポールのチャンギー飛行場であった。

戦後は唐津に居を構え、陸軍少佐の肩書きがそのまま通用する時代ではなかったが、昭和二十四年に八洲貿易株式会社を創立して主に韓国との貿易で大きな成果を挙げ、平成六年には会長に退いている。その間、昭和三十九年に輸出貢献企業表彰を通産大臣から受けているが、昭和四十五年には県政功労者表彰を佐賀県知事から受け、そして昭和五十九年には黄綬褒章の栄誉に輝いた。

『チャンギーの月』には、昭和十九年に、南方航空路部部隊の歌詞募集に応じて入選採用された歌詞が収められているので、一番だけを紹介する。

ああ大詔下る感激に
鵬博一挙敵を呑む
旭日燦たる猛鷲を
護り導く我が任務
凛たり南方航空路

山門幸夫さんが川柳人になったのは、昭和五十七年で、佐賀番傘を主宰していた北島醇酔氏に師事し、平成八年の川柳塔十月号からは同人として句を発表された。平成十四年十一月号が最後である。二句ずつを紹介してご冥福を祈るよすがとしたい。

空高く煌く雲の力瘤
女湯の窓から見える庭師さん
白露とやサルビア小さく咲きました
白露とや梨やブドウの宅急便

花地川壇

毎月24日締切・30句以内厳守　編集部

岸和田川柳会　長谷川呂万報

紅さして老臭気遣い送る日々　由起子
膝枕母の匂の耳そうじ　照女
ニンニクの臭になれた旧世代　あい子
綻びを縫って明日の風を待つ　うべ
肌寒き庭にほんのり梅二輪　笑司
解散を否定するほど臭い出す　東吉
初デートほのかに匂いする彼女　呂万
水仙の香り腰までしゃんとする　ダン吉
青空を一筋に縫う飛行雲　守
初デート人ごみ縫って胸躍る　珠子
笑いの配達吉本陣がはじけてる　錬太
玉むすび忘れほころび出した仲　みつ江
端切れまだ使いようある座りだこ　洞庵
たまに持つ針は指まで縫いたがり　蛙城
人が好き人の間を縫い花見　けい子
ガンバレと母はゼッケン縫いつける　俶子
幸せを指に集めて産着縫う　さよ子
受賞して株価も上げた作業服　ゆり子
アンケート値上げは駄目と書いておく　みよ子
土地神話値上げのあとのキリン草　野添
品質を下げて値札はそのままに　仁緑
値上げして売り切れゴメンの夢を見る　基
値上がりはもうこりごりと戦中派　穣一
逃がそうか手をすり拝む冬のハエ　路子
長電話大事な話聞き逃し　甚一
親展で配達された税通知　洋
宅配便故郷の香りが詰まってる　盛之
故郷の温もりくれた宅配便　英雄
土の香と共に配達母の愛　弘子
配達のおやじに犬がじゃれている　狸村

東大阪市川柳同好会　森下愛論報

謝るにこんな便利な出来心　柳宏子
雨降れば雨の出会いの出来心　弥生
核ボタンいつか押すだろ出来心　度
一度だけ許してあげる出来心　朝子
人気絶頂五つもさばを読む女　雅文
溺れたらいつか人気はシャボン玉　章久
人気落ち目の選手が寒い首洗う　猪太郎
手を振ってまた振り返る雪模様　良子
仏の引くゴールの紐がまだ見えぬ　シマ子
横道に逸れてゴールを見失う　美弥子
新記録ゴールマイクが取り囲み　萬的
母の手を固く握らす発車ベル　太郎
ハンカチを振れば涙の出る港　信治
熟年の別れ話がやるせない　秀夫
無人駅古い歴史に会いに行く　和子
千体のほとけの中で無を悟る　湖風
抹茶碗しばし無欲の中にいる　緑
無になって私貴方の骨拾う　愛論

ローズ川柳会　山崎君子報

新しい靴に地団駄踏ますまい　てる
利子はゼロ預り賃の請求書　キク子
雪催い書いては消している名前　みつ子
手の平に乗せてひ孫の靴見詰め　藍
履きなれた靴が寄り道ばかりする　哲子
何もかも包んで祝う富士の雪　トミヱ
美しい雪の下にもある暮らし　貴代子
女子マラソン走りつづけよパリアテネ　まさお
ジャズピアノペダル踏む靴よく喋る　孝一
すいすいとガラスの靴が抜いてゆく　いわゑ
雪しんしん五木寛之読みふける　澄子
平凡に生きて片減りしない靴　武庫坊
友に逢うただそれだけの雪まつり　君子
赤い靴も一度なんて甘いかな　義子

京都塔の会　都倉求芽報

冬晴れや目盛うすれし鯨尺　春蘭
ダイエット賞味期限とにらめっこ　あやめ
呼ばれたら相手の顔をじっと見る　達子
人間がいるから風が舞い上がる　諷云児
本日晴天きゃっきゃっきゃっと新婚さん　年代
不況対策なんにも見えず鼻毛伸び　武庫坊
イメージに描く未来が立派すぎ　克治
さよならは桜ふぶきの中がいい　葉子
元もとは私の夫になるお人　福子

もともとは主婦の発想ぐず取り器　輝美
元気だねと言われちょっぴり無理をする　萬的
元旦に餅の数きく初仕事　幸代
離婚して元のきれいな白兎　求芽
花よりも根元大事と僧が説く　宏子
元通りおさまり先ずはおめでとう　柳宏子
元気かと一言で足る子の電話　芳子
通し矢を射る弦の音 小正月　英旺
ゴム紐を通す単身赴任かな　高栄
通りゃんせ綺麗な虹の橋がある　礫
我が道を信じ男の意地通す　百合子
独身を通しイグアナ飼っている　啓子
正論を通すと軋む音がする　正坊
恵方向いて幸せ祈る丸かじり　ルイ子
転勤辞令 方角などは言うとれず　庸佑
柏手を二つ届けている恵方　欣之
日溜りへ傾く老いのたなごころ　比ろ志
鬼のいる方角にまだ気がつかず　典子
どの方角向いて生きるかまだ模索　益子
方角をどこで知るのか渡り鳥　満子
男みな旅人 私は羅針盤　〆女

尼崎いくしま川柳会　春城武庫坊報

裃姿 女市長の福は内　糸子
豆買うの忘れ松の実鬼は外　正子
鰯いっぴき厄除けの白い皿　和子
モンゴルの味も加わるちゃんこ鍋　満寿蔵
愚痴を煮る鍋ぐつぐつとよく喋る　静
坪菜園士と話をする素足　勝巳

踏みつけた麦へ優しく土を寄せ　純
生ゴミを土に返してゴミ減らす　幸子
盆梅の命をつなぎとめる土　久子
雑踏やまさかまさかの人の顔　里江
申告に電車賃ほど税戻る　昭三
しっかりと食べよう風邪が流行ってる　歌子
人の居ぬ時はお喋りしてる雛　紫香
トンネルを抜け有明けの月拝む　寛之
古時計家族の歴史きざむ音　節子
寒くても影法師だけついて来る　武庫坊
木枯しに枯葉一枚しがみつき　千恵
凛とある梅の香気へ大試験　光穂
影法師に来し方行く末聞いたとて　しづ子
大凧を絡めた枝よ放すなよ　東園
ムスカリはイラクの国花死者を待つ　半蔵門
ブティックの硝子に老醜と言う言葉　薫
風下でひとの情けにむせている　芳子

竹原川柳会　時広一路報

百歳になったら鶴を描きたいね　蘭幸
おしどりの鶴の初夢夢現つ　夏喜
ちょっぴりと太りましたが僕の鶴　白狐
過ちは繰り返しません鶴を折る　節生
凛として鶴の一声妥協せず　幸子
折鶴の願い聞こえて来るベッド　菁居
求愛はこうあるべしと鶴の舞　半覚
無口だから鶴の一声よく響く　正宏
二人三脚この子と千羽鶴を折る　笑子
神様の贈り物なり孫誕生　淑子

神様を拝む心は母ゆずり　貞子
お願いをしたとき神は出張中　笹舟
神棚の後ろにあった探し物　敬子
神様が無理を言うなとおっしゃった　房子
神からの使者かと思う温い人　寿枝
神様に負けないほどの夫婦愛　眞由美
神様はいるのと二歳児の真顔　栄恵
寒い日は犬も私もまるくいる　千枝
寒さにも負けず芽を出すものばかり　史子
淋しくて赤い苺を食卓へ　孝枝
銀色の海穏やかに句が産まれ　汎美
沖に浮く小さな島に嫁した友　年子
不審船日本の沖を狭くする　節夫
沖天の月を九輪の天女恋う　不朽
沖の白帆に昔の夢を乗せてみる　一枝

佳句地十選（3月号から）

板東倫子

喜寿迎え命に紅を引き直す　登美
核実験地球を崩すつもりだな　敏
不器用な文字で挑戦状が着く　洋々
紫の袱紗に修羅を包み込む　和枝
やけくそになるのも血の気ある間　初恵
時計屋で残り時間を売っている　扶美代
夫には内緒の恋のものがたり　(久)千代
パンの耳かじって用事思い出す　紫香
旗立てて生きる他なし車椅子　つえ子
塩梅というバランスが難しい　朱夏

沖の沖きっと楽園あるだろう　民恵
この人と決めたら沖も恐くない　万年
拉致被害家族に遠い沖がある　静風
沖へ沖へ漕ぐ母思い父思い　千代美
流石だね沖にずらりと牡蛎筏　一路

打吹川柳会　大森　孝恵報

鮮やかなおせちに箸も眺めてる　龍枝
モンローに勝てる下着をつけている　和歌子
鮮やかな脳とり戻すすべがない　みち子
鮮やかに赤も着せたい雪女　きみ子
鮮やかに仕組んだ詐欺の落し穴　博丈
鮮やかな色でさそって金むしる　友楽
鮮やかに男だましてきた化粧　雄々
百合と薔薇鮮やかに抱く男達　克枝
鮮やかに虹もかかった娘の門出　勝見
あの世行きぽちぽち用意しとこうか　芙美子
ぽちぽちと優しさ見せてくれる彼　善江
おめでたい人になりたいぽちぽちと　修
ぽちぽちだ枯木に花を咲かす日も　幸子
ぽちぽちと年賀状でも見直そう　貴恵
母さんやぽちぽち逝くよ有難う　清
只酒だぽちぽち腰を上げようか　かつみ
子育ての喜び知らぬ天女です　京子
虹が立つ天女の昇る花の道　順子
天女にも頼りたくなるぢげ起し　照彦
初夢は天女となって空に舞い　久芽代
孫娘天女のように飛び回る　しろう
月が出て天女の髪が濡れてくる　よしえ
お餅食う時はボチボチぐちゅぐちゅと　完司
七分咲きぽちぽち春の絵が描ける　節子
二日酔いぽちぽち妻が怖くなる　禎元
ブランドの好きな天女は六本木　玲子
日本を救う天女は愛子さま　石花菜
無量寿（むりょうじゅ）と鮮やかに書き初め　螢
棺桶にする木を山に植えに行く　芳光
ようこそと壁画の天女お出迎え　孝恵

川柳塔みぞくち　小西　雄々報

馬からのバトン羊が駈けてくる　久子
温かい羊のセーター売り切れた　千代美
羊の群大草原に波を打つ　公美枝
子羊のやさしいまなこ見習おう　鈴枝
羊には恩があります毛を貰う　静江
羊から優しさもらい笑みもらう　正光
子羊も宇宙翔ぶ夢ふくらます　豊枝
カラフルな賀状の羊夢をくれ　和代
やすらぎはししと羊で老い達者　智恵子
羊年もてはやされて落ちつかぬ　弘子
地獄まだ見てはいないと羊の眼　雄々

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

忍の字を幾度呑んだかノド仏　ひかり
捨石を打って活路を切り拓く　勝
子育ての苦労は言わぬ母だった　あきら
近道をすると伏兵待っている　吟笑
ポックリと逝けるカタログ見当らぬ　輝夫
言訳はよそう世間を狭くする　賢
母という釘一本で耐えて来た　八重子
霜溶けて春はそこだとフキのとう　治延
お好み焼舞台で踊る花ガツオ　放任
胸襟を開いて友とうまい酒　かおり
ハイハイと口は重いが身は軽い　よしみ
打込めぬ釘が一本さわがしい　いさむ
鰯雲乗せて太鼓はとなり街　貞月

川柳ささやま　遠山　可住報

見込み違い五十余年が暮れました　恵美
見込まれて継いだのれんが身に余る　純子
甘酒が半生聞かす置きごたつ　多美子
甘酒の香り茶の間に春を酔う　美智子
這い這いのゴールは母が待つ膝に　八重子
春の風マネキンも舞う衣更え　靖子
伝統の重さに耐える舞扇　つや子
寒い夜甘酒温めてくれた母　君代
甘酒で寒さふっ飛ぶ初詣で　康子
古希過ぎてマラソン後はおまけ分　かほる
マラソンの熱のこもった母校愛　美紗子
送る鐘一隅に待つ春の息　美緒子
霧の向こうの遮断機あがる刻を待つ　寿子
時々はコースを逸れて凡夫婦　芳郎
特大の賽銭箱で待つえびす　哲男
送信は出来ず受信のメール待つ　開子
渋滞へ母のおせちが待っている　可住

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

いちまつの風に運ばれギターの譜　民子

ハンカチで送った駅よ子の巣立ち　ちよえ
古里の駅で民話が待っていた　はるみ
過疎の駅たったひとりを乗せて行き　かつ子
みぞれ降る傘の雫が重たいよ　聖子
美しく幕を引きたい影法師　恵美子
縄電車二人の駅はもうそこに　好栄
日の丸で送り出された山の駅　博利
無意識の踏切り罪を意識する　清泉
雪どけ水を必死に耐えてる父の首　白汀

高知川柳社　川竹　松風報

笑いジワ増えて度胸がついてくる　さき子
愛嬌が度胸になったおんな節　孝雄
混沌のオバサンたちのいい度胸　快風
まな板の鯉を見習う手術台　功
首かけて内部告発する度胸　圭二
怖い物見たさはあるがない度胸　かよ
健康の貯蓄してます万歩計　幸
健康を共に喜ぶ年賀状　竹萌
飾らないハート美人にある人気　成美
終章を飾るドラマがまだ書けず　てるみ
人間の虚飾が落ちて独りぼち　京子
着飾った行き先聞いてみたくなり　和江
床の間に妻を飾るとついた嘘　暖
飾らない人柄に惚れ無二の友　美々
飾るもの何も望まぬ新芽ふく　哲史
地のままでおおどうぜよと故郷の友　典雄
千本のバラを飾って病んでいる　良雄
百本のローソク飾るまで粘る　圭風

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

津軽三味冬の心を開けに来る　あすなろ
おとろえた味覚板場を退く決意　きよし
決心のついた亀から海目指す　ヒサ子
別れゆく金銀銅を胸に下げ　てる
開かれた相撲横綱外国人　隼人
プール開き天までしぶき撥ね上げる　順風
心経を開いて朝のご挨拶　慕情
いちりんの梅にときめく詩がある　銀波
リフォームに決心揺らぐ裁ち鋏　ふさゑ
腹決めて運を飲み込むのど仏　花匠
作業着に門戸ひらいたノーベル賞　愁女
窓開く春の木霊に弥陀の声　ツネ
まばたきを見ると決意がまた鈍る　黙人
わくわくとする小説の一ページ　花峯
自己破産覚悟で押した保証印　一花
寒椿ぽつんと落ちてゆく別れ　劦
遺伝子が未来の扉そっと開け　五楽庵

熊本川柳会　高野　宵草報

人生も方向音痴のまますぎる　あや子
年賀状友の安否をまずチェック　百合子
急逝の友からも来た年賀状　エツ子
美味しいの笑顔が並ぶ夕餉どき　末
老いという荷物背中で音立てる　百笏
溜飲を下げる屋台のコップ酒　清香
グルメ旅まずは器を目で食べる　柳詩
一年の暦に託す余命表　とし子

菓子箱が散らばっている除夜の鐘　一進
思い出をたぐれば埋み火が熱い　敞久
人間悲し欲の一字が捨て切れず　俊子
遺産などないから兄弟仲がよい　宵草
農薬が怖く虫食い気にしない　康子
欲張った手から幸せこぼれ落ち　義申
恐いもの見たさ指の間から　しゅくろ

川柳塔わかやま吟社　牛尾　緑良報

休むのを待ってる亀の息づかい　裕美
なるほどをいっぱいくれたおもちゃ箱　大輪
メンバーのきつい批評があたたかい　楓楽
ひと休みする人生の大広間　和香
休日はもったいなくて休めない　よしこ
毎日が休み掟のように生く　寿子
ねまき着て雲を見てます日曜日　あき子
カレンダー先ずは連休から探す　美子
今日一日休んで頭冷やします　輝子
スタミナを補給してます旅の膳　克子
八合目ここから勝負休まれぬ　豊太
雨降って骨を休める耕運機　怜
お休みの多い脳にも入れる風　和子
言い訳を使いはたしたズル休み　良一
転んでから知るメンバーの輪の温さ　佐代子
賞に縁ないメンバーで姦しい　英子
どんぐりのメンバーツーといえばカー　さち子
メンバーに不足は無いと磨く腕　泰子
メンバーのひとりがくれたうまい嘘　稚代
メンバーが欠けると何故か味落ちる　和

なるほどとあとの祭りで合点する　順子
菓子折りの中身なるほど効いて来る　正博
納得のいくまで削るかんな屑　保州
寝つきいい妻はなるほどよく動く　富代
なるほどとにやり頷く魚心　射月芳
格言集なるほどなあとその場だけ　鉄治
なるほどと老いの一徹なぜ言えぬ　佐一
なるほどと納得させたのは詐欺師　和重
なるほどへ待ってましたとくる二の矢　利ぼん
なるほどね後はあなたに任せます　三喜夫

西宮北口川柳会　亀岡　哲子報

両親の住む町だから安らげる　澄子
この町が好きで自慢で幸せで　貴代子
歩道橋優しい嘘を聞いた町　美代子
悟ったら恥ずかしくなり生きられぬ　松煙
赤ひげに似た医者がいる温い町　石舟
雪の町今夜楽しいぼたん鍋　奮水
豆腐売りラッパが響く路地の町　歳子
悟ったことないと知るのも悟りかも　嘉彦
一瞬の人生だから悟れない　富喜子
ワイングラス愛と憎しみ悟ってる　孝一
写経して薄墨ほどもない悟り　求芽
悟るのも早いが逃げるのも早い　比ろ志
まだまだと悟れぬままに古希がくる　五月
お説教悟ったような顔が要る　哲男
遠寺の鐘悟りと共に越える谷　キク子
けんかしてやっと相棒らしくなり　いわゑ
夢で会う相棒わたしより若い　文

相棒が時々わからぬ人となる　千代
相棒といつのまにやら同じ色　能子
相棒を探しあぐねている迷路　鹿太
相棒の妻と気が合うから困る　晴美
さっそうと母は傘寿のパスポート　たず子
さっそうと見よう見まねのフラダンス　章子
さっそうと登って行くやジャンプ台　トミエ
さっそうと輝き横綱朝青龍　江美
帰り道蕪村気どりで葱を買い　いたる
何のかのと言いつつ当てにする長男　てる
句作りの横にどっしと広辞苑　弘
晩学の苦労をのぞく電子辞書　春蘭
歳月が夫婦の会話丸くする　光久

城北川柳会　川久保睦子報

二十四年目頭押さえ抱き合った　東雲
伝統の国技の相撲影薄く　柳一
紫を着こなす女の泣きぼくろ　達子
孫抱いて肩で風切る初詣で　はじめ
ジョッキ一杯明日の力湧いてくる　久留美
不況の世ノーベル賞が光さす　あい子
天高く肥えないメニュー考える　順三
しあわせの証が光る薬指　ひさ乃
小さな灯も寄れば大きく明くなる　昭子
乗り易い男で隙をまた突かれ　萬的
めでたさは掌にのるくらいなり　綏子
ありのまま生きて妥協を許さない　千歩
この一年優しく過ごす未年　公一
水を得る魚になった終業ベル　志華子

倉の壁落ちても旧家といういげん　メ女
よくもてる男をゲット尻に敷き　月子
おニューの服誰も気づいてくれぬ　セツ子
夢追いの独り芝居のニューメディア　柳弘
角のない年輪隙のない言葉　しげお
年輪が仕草ひとつに生きてくる　求芽
年輪が悲喜こもごもを語りだし　正
ひと節に枯淡の味がある年輪　一歩
年輪のふくれが目立つ温暖化　史風
年輪はゼロたのもしい呱々の声　重人
へまをした数年輪になっている　天笑
手を洗い心を洗い鶴を折る　千里
千羽鶴千のやさしい顔を持つ　典子
迷ってる顔で出てきた試着室　修
老母さんが住みにくくなるニュータウン　倫子
樹に耳をあてて大樹の齢きく　一枝

川柳塔唐津支部　久保　正剣報

国なまりつい声かける江戸の空　兵八郎
わたくしに触らないでと鳳仙花　實
ジョーカーを切るタイミング思案中　輝夫
子供でも拉致と言う字は覚え込み　勝視
戦争は儲かりますと言うジョーク　水笑
掃除機に手綱とられる老いの足　晴翠
椅子取りのゲームが続く永田町　高明
テポドンが写るレーダーなら買おう　正剣

川柳塔鹿野みか月　土橋　螢報

福は内鬼も我が家へ戻りたい　みどり

福の神ご馳走食べてすぐ帰る　久枝
祝福の嵐の波にのるチャペル　富久江
福ポトリポトリ点滴から沁みる　諷人
冬の陽を浴びてほほ笑む福寿草　かつ乃
福の神追いかけいつもころんでる　房子
豆まいた孫満足げにねむっている　武子
一隅を照らして生きた姑の釜　幸枝
福耳の孫に私の夢がある　弘子
煩悩を捨てたら福が寄ってきた　きみ子
七福神会議ばかりで帆を揚げぬ　公子
福耳へ呪文をかけてプロポーズ　くに子
男のしるし寒々と帽子買う　孔美子
大吉を結ぶ枝まで背伸びする　実満
おはいりよ鬼は福とは差別せぬ　茶子
年金のちからを借りて元気だす　八重
父さんを負かせるほどの腕ずもう　保子
ちから得た途端に誰も喋らない　汲香
柿右衛門の茶碗は和紙の中にいる　はるお
オリジナルひとつ私の手漉き和紙　節子
ああ粗食なんとうれしいことだろう　立亥
傾いた家を支えるちからこぶ　みさ子
らち家族国を動かすちから出す　きみゑ
風のちからを借りてする町おこし　彩子
煮凝りのまま固まっているチャンス　盛桜
まだ少し力残してある命　和子
エネルギッシュな男が見せる力瘤　睦子
陰日向なくちからいっぱい生きている　菊乃
ちからを抜いてゆったりと天仰ぐ　喜与志
神隠しではない雪というちから　螢

川柳塔なら　坊農　柳弘報

嫁姑と言われたくない円い仲　蘭香
かばい合う円満のしわ老夫婦　カズ子
天然の鯛で小骨に意地がある　登美子
憧れて勇気もらえたこの至福　敏子
円満な百寿の顔の深い皺　欣子
円満な顔にもあった泣きぼくろ　とし子
円満に少し欠けてる方が良い　博一
円満の秘訣ちちはは見て育ち　(山)卓
神妙にスピーチを聞く祝い鯛　富子
憧れの椅子へ梯子が届かない　春雄
人泣かす金が締めてる紙の帯　真理子
形見分け亡母の昔に触れる帯　秋泉
角帯に叩き込まれたど根性　春蘭
鬼も蛇もひそむ都会に憧れる　良一
憧れは十人十色多色刷り　章久
宇宙にあこがれ今に竹を踏む　絹子
叙勲の日妻も一段映える帯　睦朗
三姉妹帯を結べば春の絵に　道子
憧れの妻です僕の杖がわり　洋子
帯を解く音が情念かきたてる　隆盛
円満なハートで鬼を包みこむ　朝子
円満に暮らしています犬と猿　長生
何事もなかったように帯しめる　ダン吉
帯ポンと叩いて女将まかしとき　一風
赤い靴虹の向こうに憧れる　國治
五線紙に今あこがれを乗せている　秋雄
養殖を笑う明石の鯛が跳ね　和夫
憧れの山河に戻れぬ火矢の橋　弥生
金持ちでないから我が家円満や　太一
背を向けて帯解く妻はまだ女　理恵

川柳塔おおとり　原　みさを報

母さんがときどきかぶる鬼の面　紀子
ちがうって言っているのに赤い鬼　螢
ぼくの鼻鬼の鼻にも見えてくる　真一
福は内外は吹雪だ鬼も内　彰雄
胸に棲む鬼があれこれ無理を言う　雄々
節分の鬼はやさしいお父さん　仁子
かくれんぼ鬼は探偵ごっこする　小生
打ち解けてみれば鬼でもない課長　舎人
鬼の棲む心の底に風入れる　幸次郎
本当の鬼は心の中に棲む　黙光
節分の鬼は子供に気をつかい　邦昭
辛口の批評心を鬼にする　庸二
末席でのびのび出来た横座り　せつ子
言い訳の上手な人に金を貸す　道子
病む夫をのびのび癒やしたく動く　登美
つつがなくのびのび暮らす傘寿坂　清子
ぬくもって帰れとくれた酒が効き　孝子
あいさつが心ぬくもる朝の道　芙美
ぬくもりの言葉欲しくて会に出る　大鯰
嫌だった電気毛布が離せない　宏章
猫がいるだけでぬくもる屋根の下　艶子
真ん中はとても居心地よいぬくさ　風花
大地からぬくもり運ぶふきのとう　義弘
温泉と鍋でぬくもる蟹ツアー　由多香

そばにいるだけでぬくもるヒトがいる　天涯
懐でぬくもる札が汗をかく　一弘
人肌のぬくもり丁度酒の燗　冨貴子
結局はお天道さんに脱がされる　みさを

川柳大阪　高木信酔報

明るさは百万ボルト初笑い　楽子
あなたには素直な気持ち伝えたい　圭
素直さがかげり故郷の風と会う　柳昌
列島が動脈硬化になりかける　比呂志
幼児には凄いわねの誉め言葉　功
ありがとう爺の年です屠蘇の味　司
凄い人白寿迎えてスキーやて　美花
素直さがあったら百点あげるのに　かよこ
好き勝手せんどして来た丸い背な　重人
新春の光の中に吾を置く　青道
アイラブユー凄い言葉を聞きました　敏
ハイハイと妻の素直が気にかかる　一歩
凛として古武士思わす冬木立　川童
食前酒ワインに拍手する佳き日　洛酔
年金の幅でつき合うのし袋　鉄心
素直すぎ駆け引きできず出世せず　兵庫
絵心もカメラも持たぬ旅支度　春蘭
押し売りに呆け老人になりすます　三十四
白き髪二つ並べて寝息立て　喜楽
我が孫の防具も凛々し豆剣士　隆司
沈丁花パッと開いて夢を追う　典子
見晴らしの棚田に汗は報われず　本蔭棒
生き方を問えばちょっぴり軋むドア　民子
お人好しすぐ丸められてる都会の灯　柳宏子
じっくりとせんど煮つめてあるおでん　笑風
忍術を使って妻を煙に巻く　利昭
素直だけが取柄と母が自慢する　照月
戦友会酔えば古傷笑い出す　柳弘
奇術師のポッケがほしい年の暮れ　まつお
なにくその人生いまだおさまらず　信酔

ほたる川柳同好会　田辺正三郎報

葬式の企画書出来て安堵する　信男
葬式代だけを残した律義者　契子
姑につぶやく嫁の自己主張　いさむ
ままごとの子のつぶやきに耳をかす　久子
しまい風呂つぶやき自問自答する　セツ子
春が来た春が来たよとふとん干す　敞子
ソプラノをアルトに変えて言う悔み　見清
感動を与えぬままにまだ総理　黒兎
呟いて意のあるところ匂わせる　正三郎
式場の遺影が僕に語りかけ　禄骨
ずるくとも勝てば官軍美酒を酌む　ヤギエ
美女アナの呟くような声に惚れ　勝
おだて上げ役すりぬけるずるい人　雪子
つぶやきを増幅させるお節介　祥風

川柳塔まつえ吟社　津川紫晃報

愛嬌に負けて我儘聞いている　邦代
愛嬌でゆっくり回る水車　たけし
愛嬌が幸せ誘ういい家族　ちえこ
愛嬌の炎に触れて火傷する　多賀子
愛嬌で女の河を渡りきる　きみえ
愛嬌を振りまく猫に油断する　静恵
寒がりがやせ我慢して風邪をひき　宏
いい人に会って寒がり忘れてる　日出子
寒がりな犬を炬燵で飼っている　芳山
寒がりも襟巻はずす熱い酒　俊一
寒がりの傍で鍋やき食べている　玲子
寒がりの顔がほころぶ燗の程　淞丘
たっぷりの感度が違う人ごころ　長吉
たっぷりと愛情かけた娘が嫁ぐ　政子
手作りの服はたっぷり母の笑み　幸子
たっぷりと食べて人生慌てない　義良
喜寿祝いたっぷり聞いた人生譜　注湖
ポケットにたっぷり入れておくジョーク　桂子
盛り塩に今日の運勢委ねてる　圭詩朗
山盛りのみかん炬燵の守りをする　昌枝
盛り花に嬉しいはなし生けてある　茂美
離乳食盛った小皿がよく喋る　ちかし
活け造り盛られパクッともの申す　畔
盛り合わせ酒と話が弾んでる　町紅
財布忘れて貧乏の真似をする　螢
他所の真似するから石に躓躓く　房子
子は親を真似る暮らしのパイオニア　小生
友だちのアイディア真似てうまい鍋　秀子
真似ながらふっくらできた母の味　知恵子
猿真似でない人生の舞いをまう　紫晃

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

豆さんで逃げる鬼なら可愛らし　一風

お静かに今巻き寿司の丸かぶり　ミツ子
節分へ嬉しい客が鬼門から　きらり
節分の鐘しあわせな春の音　秋雄
外交の握手に嘘がつきまとい　春蘭
立前と本音が交差して困る　ひさ乃
子の夢に私が交わってはならぬ　アキラ
旧交を温める酒の底がない　欣之
あの日から閉じた日記にねむる恋　とみを
幕閉じるだろう七転びのままに　ダン吉
まぶた閉ず無欲な時が流れてる　度
閉じている財布の底がぬけている　宏至
母さんの拳骨だって痛かった　シマ子
思い切り拳を握り春を待つ　肇
拳骨を握り堪えてる一文字　欣子
拳骨を握り潰して深呼吸　加津子
ポン酢から母が弾んでいる見合い　柳伸
修羅の風袋小路で舞い狂い　弘直
体中の捻子をゆるめてしまい風呂　ますみ
不況風つっかい棒をなぎ倒す　民
好き嫌いだけで塗り分けできぬ地図　幸生
始発駅終着駅にあるドラマ　千里

川柳若葉の会　宮崎・シマ子報

鴉さえ見事養う七つの子　あずき
養ってやるからと言う不確かさ　欣史子
生き生きと子を養っていた頃は　能子
同居拒否扶養家族を外される　アキ
老いてなお己養うほしい知恵　香住
受験期の夜食に猫もついてくる　慶子
わからないとこで静かに死ねたらなあ　シマ子
倖せか不幸かわからん我が人生　弘直
分からない事から逃げる悪い癖　加津子
白旗を出すタイミングわからない　喜美子

富柳会　池森子報

青空に母を連れ出す車椅子　花梢
正論は正論として胸の中　昭水
人間を無欲にさせる日本晴れ　鐘造
ふっきれて心晴れ晴れ空をみる　深雪
就職が決ったらしい空は青　アキ
リハビリの靴音まるで数え唄　夕子
魂を指先でつつく薄氷　奈保美
デザインが危険金正日の画布　勇
晴々と太陽人を愛してる　冬虹
生前葬デザインをする死の美学　紅紫朗
決心を狂わす赤い実がポトリ　扶美代
愚痴聞いてあげる心が晴れるまで　浩子
松飾る妻は傘寿の誕生日　一夫
天界に二心なし空の青　誠
繊細なこころの糸を背に通す　ひろこ
美しい嘘が晴れ間を連れて来る　和子
デザインは神の意のまま四季の彩　巳代一
ある時は笑顔が怖い事もある　一慧
一陣の風に学んだ無の力　亮幹
うま年の不況羊で吹き飛ばす　東雲
晴天がご馳走だった冬の旅　宏至
引いても割ってもまだ余るやさしさよ　萩乃
心にも晴れ着つけたい日のわたし　キミエ
終章へ括弧で平和囲みたい　哲史
告げ口が一杯つまっているポスト　たかし
花びらは知っているこの恋の行方　かなこ
限りある命へ晴れの日を数え　みきを
ありったけの洗濯したいほど晴れる　幸代
極上のしじま重ねている阿吽　欣之
傾いたままのデザインだった父　森子

かわはら川柳会　上田俊路報

病み続く地球の悪を取り除け　かず恵
機械化が肩の重荷を取り除く　聰
夜気除き鐘楼の鐘身を清め　雅予
短所でも除けば個性光らない　泰良
除かれた豆も夕餉で威張ってる　悦子
春が来て芽が出てこぬと除かれる　余吏子
愚痴のひも除いてくれるひざの孫　寿子
極めた技国文祭で花咲かす　静子
名人の極めた作は心うつ　道子
極めかねた迷いで易の列にいる　俊路

三幸川柳教室　古久保和子報

置き傘があふれる駅の温かさ　次根
差しかけた傘の中から生むドラマ　みね
から傘に父の威厳が干してある　イセ
傘立てに用心棒のジャンボ傘　三千子
温暖化地球の傘が喘ぎだす　清史
豪雨にも寄り添ってきた夫婦傘　靖子
母の傘出られぬ里の過疎事情　豊太郎
傘いらぬ距離に子の住む安堵感　嘉平

さまざまな夢の行き交うくじ売り場　昇
さまざまに飛んで弾けたシャボン玉　かず子
さまざまな芥を包む雪の白　町子
さまざまな苦情聞いてる喉仏　当代
お茶いれようか愛の形もさまざまに　章子
さまざまな別れ春なら手を振れる　登美代
さまざまな明日が用意されている　保州
下手で良し肉筆にする年賀状　脩
スロービデオ力士の肉が波を打つ　武
贅肉をつけた日本が弛みだす　公子
肉筆の額の文字から聴く法話　千秀
誉め言葉へちょっぴり皮肉入れておく　さち子
肉声で聞くと青春動き出す　栄之進
すじ肉の美味さ知っている庶民　和子
山越える度に深めてきた絆　幸
蕗の薹わが越し方に似たる味　信子
愛一途越えた火の坂風の坂　鉄治
ほどの良い距離友情という楔　朱夏
風ばかり読んでは越せぬ水溜まり　碧
古稀越えて万感胸に賀状書く　一歩
アナログの世代を越えてゆく未来　桂香
K点を越えた意見がかき回す　准一

尼崎尾浜川柳会　田辺　鹿太報

夕月夜次の駅まで手をつなぐ　美代子
ポケットの百円玉よ寂しかろ　その
さまざまな事を背負って春の風　秋子
たこやきとおでんが好きでお人好し　幸子
神棚が見下ろしていた平和な日々　全彦
水道が凍って朝のひと騒ぎ　江美
店先のおでんの湯気に呼び込まれ　まさ
春風に乗って来たのは花粉症　鹿太
沈丁花香り豊かに春を告げ　玉枝
幼な妻子供背負ってバスに乗る　カズ子
ランドセル背負った孫が春を待つ　信子
正直な鏡にうそを見抜かれる　亀与子
おでん鍋好みそれぞれ掘ごたつ　イサミ
精いっぱい十字架背負う男達　孝一
次の世を背負う茶髪の頭蓋骨　義芳
朴訥に生きた男の影は濃い　比ろ志
托鉢の素足に重い朝の行　正治
朝市へもぎたて運ぶ背負い籠　澄子
ランドセル熱い期待も背負わされ　求芽
故郷の朝は自然に起きられる　紫香

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

屋根の上きりきり舞いの風見鶏　庸佑
負けいくさ私も屋根も傾いた　重人
下から見て屋根を直せとリフォーム屋　耕策
猫の恋屋根を滑った音らしい　一壺
屋上の緑が排気ガスを吸う　かつみ
ワンギリの合図息子が無心する　久仁雄
やりくりの家計に点る赤ランプ　一知
指一本立てて晩酌する合図　いさお
見落した合図に一日縛られる　柳宏子
目で合図噂の主がやってくる　志洋
待ての合図犬は恨めしそうに見る　ダン吉
三寒四温風が蕾に合図する　扶美代
スト中止空気が旨い朝の駅　さとみ
空洞化スト打つ人が見当らず　専平
ストライキ神話になった労働史　遠野
スト中に私の椅子が消えている　りつえ
のんびりとさせてくれない不況風　昇
小春日の陽ざしを浴びてコーヒ飲む　フジ
億の絵をのんびり見てる休みの日　洞庵
のんびりと見えるが老母に無駄はない　たけし
のんびりとした子のメール打つ早さ　桂子
のんびりに妻はやんやと急き立てる　吐来
低金利のんびり出来ぬゼロつづく　ロマン
古時計のんびりしてる週五日　敦子
戦争の危機にのんびりしてないか　敏
黒電話今も健在老いの家　章司
日向ぼこしている猫を見て暮らす　六点
のんびりと見せて急所は掴んでる　泰子
春が来るのを森はのんびり待っている　美代子
今日はのんびりと手帳が白いので　みつこ

川柳ねやがわ　平松かすみ報

改革に挑むと言うたはずなのに　修
初夢で美女に挑まれ寝汗かく　弘風
挑みます男の顔になれるまで　礫
挑むだけ挑み失敗気にもせず　柳宏子
挑むのはいつも中以下固く生き　忠央
初孫の産湯に挑む腕まくり　かすみ
洞門に挑む鑿も三十年　順三
凛として挑む真紅の冬の薔薇　弘一
挑まれて逃げられません美女だから　利昭

点をつけるので挑んでみたくなる　度　沙置子
初舞台足袋のこはぜもきつくしめ　高栄
お料理の上手な妻は宝物　ルイ子
百すぎた母は我が家の宝物　冬葉
七福神乗せたお船が沈みそう　鈍甲
宝くじ夢見る時間買うてみる　亜成
宝のように携帯娘持ち歩く　博泉
ぬいぐるみ宝のように抱いて寝る　一風
土は宝だ土に汗して土に生き　庸佑
輝かぬ石だがわたしには宝　茜
重宝に使われている知恵袋　洋
老妻という掛け替えのない宝　三峰
料理などしない男の自尊心　恵子
残りものと見せないようにする料理　日出子
インドまで習いに行ったカレー通　三郎
未だ生きているぞと鯛が自己主張　一炊
最高のシェフはわが家のオカミさん　波留吉
ささやかな料理に染みる母の味　仁清
有り難くたかが豆腐のフルコース　勲
料理番組のようにはいかぬオムライス　たもつ
個性的なお料理ですと誉めておく

川柳塔きゃらぼく　福代　天雀報

街に出て笑顔の稽古してかえる　ゆき
押入にひっそり過去がうずくまる　玲子
越年が出来た賀状でほっとする　恵子
おっとりと羊になれる歳になり　富美子
東風強く北朝鮮までとんどの火　春枝
本心がぐらつくときは蹲踞する　ふみ
たかが風邪そして点滴受ける風邪　すみえ
初句会凧あがれ天までも　繭
不即不離七十路の坂また登る　初枝
拉致事件北のわい曲らちあかぬ　清人
福を探している子羊の土鈴　瑞枝
駅伝のリズムで過ごすお正月　千代
年頭に白く生きよと雪が舞う　八重子
八十歳己れの顔を確かめる　天雀
絵に描いた餅がふくらむまで待とう　てい子
菩提寺の嫁さんブリは大きかった　田鶴
ボケぬ道ひとつさがして春を待つ　やえ
仏壇がでんと構えて留守まもる　日枝子
信頼の糸つながらぬシンボルマーク　なみ

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

小さい巣に住んでも心豊かなり　春
年ふりて古巣恋しき茜空　久太郎
巣立つ子へエールをおくる鬼瓦　重人
巣立ちいま春風におう大空へ　賢二
涙ぐむきっとやさしい女なんだ　英子
母とならきっと歩ける車椅子　つえ子
約束のきっとを反古にする訃報　庸佑
馬鹿になりきっと見返す時を待つ　萬的
年よりを年に一回敬う日　千津子
尊敬はしてるが愛してはいない　寿美子
伝統芸 師匠敬い技磨く　玲子
無宗教 朝の光に手を合わす　都代子
きっと来る春が今年もまた焦らす　求芽
テント村ひとりひとりのドラマあり　慶子
過去閉ざしテントは今も黙秘権　知香子
難民をつくってつくるテント村　見清
青テント底辺で生きる面がまえ　実
拝啓と書いて続かず電話する　巴子
保険医の信念 離島の灯を守る　〆女
ほのぼのと雰囲気を出すお人柄　吉太郎
土俵退き阿修羅離して清々し　啓生
鈍行で見逃したもの拾う旅　満寿巳
外科内科眼科耳鼻科をはしごする　石舟
捨てられぬ夢に追われて生きている　蛙
あるわけはないさそんなにうまいこと　禄骨
音たてて春の水車はよく回る　紫香
戦争ノー地球を駆けるデモの波　正坊

くろぼこ川柳会　前坂なお美報

舞い落ちる雪の白さで身を洗う　涼子
真っ白なお面をつけて逢いに行く　遊子
広い目で見ると許せる気にもなる　孝男
失策を見てから縄を編んでいる　一揆
三歳の孫が真似して親の曲　キヨノ
真似をして彫ったが虎は猫となる　重忠
おくやみ欄見ると気になる我が身かな　常子
だあれとも話をしなくなって冬　久江
手の力無くならぬよう唾つける　みち子
転ぶなよ無にするなよと石の声　菜美
白魚の指で男をつまんでる　帆雀
白い道なんにも迷うことはない　はるお
爪切ってみても答えが出て来ない　一瑶
達筆に魅せられ真似て書いてみる　ふみ子

誰も真似出来ない徳を持っている　美智子
好きだから心にもない嘘をつく　なお美
妻とたまにムスンデヒライテを遊ぶ　伝平
無我夢中眼裏にいるいい女　螢
無理などはすまい峠はもう過ぎた　一京
真っ直ぐに生きた証の白い骨　一眸
仏にも神にもあげる白い餅　小鹿
美辞麗句真似てみたいが歯が笑う　悦子
冬眠中誰か起こして下さいな　つや子
蓑虫になって春待つ子がひとり　和代
無学支えたこの掌の豆つぶて　静生
白無垢を身にまといつけ無に還る　富子
お互いに見て見ぬ振りをして通す　幸子
人形は無力なわたし知っている　あらた
芽を伸ばす無心の背なが色づいて　公弘

南大阪川柳会　吉川　寿美報

紅梅に淡雪のせて春を待つ　なぎさ
淡雪が消え子離れを考える　重人
淡雪がとけたら村を出ていこう　千里
福寿草淡雪分けて新芽出す　弘泰
淡ゆきは嵯峨野の竹の華となる　志華子
淡雪の情緒なくなる温暖化　桃花
新春の舞台を派手に粉雪舞う　柳宏子
名医でも国の病は治せない　ひさ乃
脈を取り女医が厳しい顔になる　雅文
産気づく牛へ獣医が神に見え　憲太郎
クローン医師神道徳をおそれない　叡子
医者が匙なげたら神にすがりつく　久子

渦潮の神秘自慢の故郷の海　シマ子
うず潮の時間に合わせ阿波の旅　日出子
戦争はあかんと渦の中で言う　ダン吉
アイドルに渦巻いているペンライト　萬的
浮ぶ瀬を時代の渦が飲んでゆく　珠美
うず潮に鍛えられたる鯛わかめ　初太郎
うっかりとうずにまかれて抜け出せぬ　洞庵
にんげんの丸さに欠けている鋭利　朝子
オクターブ上げて鋭利な言葉尻　柳伸
一生を鋭利な口でよく稼ぐ　東雲
鋭利故決断だけを迫られる　宏
たかが紙されど鋭利な刃にもなる　庸祐
時々妻がペーパーナイフ研ぎすます　寿美
情報の行き来ポロポロ北の嘘　章久
顔出して夜行で戻る義理の通夜　遠野
自分史に自己陶酔のうず一つ　柳弘
逆らわず時流の波に身を任す　たもつ
淡雪の中に笑顔の蕗のとう　度

岬川柳会　八十田洞庵報

福耳も老いて幸せ聞きもらす　年子
楽しげに裸の会話家族風呂　みつ子
即席の湯気板につく赴任先　令子
善人顔一物ひめてまぎれ込み　勝
雨風をさけよと親が屋根となり　茂平
両面の策の秤は自己主張　鉄男
福は内今年はとっても大声で　洞庵
即席に表せません夫婦愛　富美子
善人の笑顔の裏が読みとれず　みやこ

人脈と金が善人狂わせる　孝子
善男善女寺は儲けの大根炊き　俶子
世渡りは使いすぎずに貯めすぎず　昌夫
重役の椅子が待ってる天下り　里子
善人の骨真っ白い灰になる　勇
即席の挨拶真理言い当てる　とみ
子供居てはぐくまれゆく家族愛　桜琴

川柳さんだ　北野　哲男報

シンボルの笑顔がいいねまたあした　ちあき
シンボルも時代と共に移りゆく　修
シンボルの像がやさしい妻の顔　俊昭
親ぐらい担う気概を育てたい　真由子
屋台骨担う男の痩せた腕　朋月
片棒を担ぐつもりでゆく素足　千代子
天国の母にも恩義を借りたまま　千恵子
親の恩親になってもまだもらう　サクラ
大恩の礼はこの世で言えぬ人　藤朗
世話が好き恩を売るのはもっと好き　正行
殴られた思い出ばかりでも恩師　正和
先人の歴史に学ぶ苦難時期　雅司
雪囲い牡丹すましてカメラ待つ　歳子
雪そっとずらして春告ぐふきのとう　菊子
馴染めない貴方の癖を数えてる　忠
親鶏の温み知らないゆで卵　哲男

むらくも川柳会　毛利　幸報

紙ヒコーキ手から離れて鳥になる　彰
秋空に似るさっぱりの人が好き　清吉

戦争の匂い心が重くなる　秀子
給料も年金も減り医者通い　信夫
美容院気分さっぱり弾む足　定子
折り紙を添えて送った母の味　幸
折り紙教室老いて楽しい趣味に生き　明朗
女二人おせちつましく年あける　ふさえ
愛情の輪にかこまれて今日も幸　まさ子
また一人元気な友の訃報聞く　美喜子
いろいろな羊に出逢った年賀状　昭子
八十路坂長き人生回想譜　寿
年賀状カラー写真の孫可愛い　仲子
年賀状ポストの音に友の筆　安男
添書きのひとことうれし年賀状　八重子
すこやかに老いたし願い薬飲み　ます美
ご法話にこっくり浄土の夢をこぎ　恵美子
わくわくす子供の世界雪の町　ツル子
年齢よりは気分が若くて派手な服　美恵子

岩美川柳会　石谷美恵子報

ありがたや七坂越えて嫁が来た　蟹郎
捻挫する罠が下りの坂にある　たぬ
母と行くふるさと坂の上にある　照子
ライバルの影はいつでもよく見える　一粋
こっそりと春内緒話をするように　芳光
見直して欲しい私という女　雅女
ライバルがつまずいているいい坂だ　完司
孫達が爺にじゃんけん勝つ内緒　重忠
旅に出た子どもが今も帰らない　圭一郎
親ゆずり隠し通せぬシルエット　睦子
やっと登った坂は阿弥陀の指先だ　一瑶
見直しにほんとの福祉枯れて行く　孝男
内緒事口の乾かぬ内に漏れ　かつみ
ひょっこり出が旅すりゃろくな事がない　はるお
シルエット背信の日もつき回り　静生
五寸釘打った内緒が千里行く　(野)節子
内緒だと聞けば言いたくなってくる　希久代
ライバルが内緒話を撒きちらす　裕子
この坂を登ってひとつ歳をとる　螢
見直して下さい私のいいところも　一京
ボス猿の手のひらを出た孫悟空　石花菜
ゴッホの絵見直したってよう買わぬ　きみ子
喝采の梯子を外すシルエット　忠良
遺言は内緒だ妻よまだ死ぬな　大漁
父さんの内緒をばらす子の作文　和枝
ロボットに話した内緒だけは無事　公乃
内緒だと孫は口もと二本指　菖子
正直に歳をとってるシルエット　(山)節子
人生のカーブを学ぶいろは坂　美恵子

川柳藤井寺　髙田美代子報

恋に落ち手錠にかわる腕時計　喜代子
修理して時計もボクもまだ生きる　昭子
甲子園ナインと歩く古時計　りつえ
金のロレックスしてはるのに遅刻　一筒
真夜中の時計とにらめっこで遊ぶ　みつこ
アナログの時計に疲れ癒される　かつみ
三世代の時間差知っている時計　桂子
渋滞に時計も焦れる初デート　恵勇
情けかも知れぬ止まっている時計　春蘭
花時計に慰められて人を待つ　葉
時計回りいつも逆らう人がいる　婦美枝
変わらずに目覚ましがなる定年日　大八
介護する身には昼夜のない時計　泰子
反対に回りたい日もある時計　美代子
一筋にわが道をゆく砂時計　アキ
復興はそこそこ神戸にかまくら　瑠美子
仲人がまあそこそこと言う美人　志洋
そこそこの幸せでよいお餅焼く　雅枝
百均屋でそこそこ揃う身の回り　淑子
高望みしてたら嫁の来手がない　重人
そこそこの脳が近頃休みがち　シマ子
ノーベル賞四十そこそことは凄い　井竿
そこそこで妥協はしないプロの味　耕策
そこそこの自己満足と生きている　扶美代
そこそこのお金はあるが職がない　真一
そこそこの所得に待ったなしの税　史郎
そこそこで済ましたツケが痛み出す　六点
そこそこの意地が男の顔をする　和樹
婚約発表しますそこそことそこそこ　美子
そこそこで終る淋しい僕のショー　鐘造

ふくべむら川柳　村上　信子報

ひつじ年世界平和を賭けて見る　静子
巣立つ娘へ自作セーターそっと入れ　操子
無職でも二人三人ぶら下がる　和甫
クローン羊人にはひとの意地がある　昭恵
護身術身につけ無職にはならぬ　信子

難民の子等へセーター贈りたい　春恵
職業欄無職と書かず主婦とかく　寛子
胎動にあわせセーター編み急ぐ　はじめ

堺川柳会　河内月子報

力になれず済まん済まんと思てます　春蘭
焼きもちもやかないのかと絡まれる　恵勇
粘られて無念涙のロスタイム　龍三
金星の荒れが布団を舞い上げる　像山
貧乏で餅を上手に焼いている　百恵
膝の傷もう堪忍と網に言う　一輝
良心がうずく給金相撲なり　千代
父は二こ息子一つの雑煮餅　伽羅
人生の仕切り直しもしたいけど　篤子
すんなりと死ねる力を蓄える　半銭
のどつめた餅掃除機に吸い取らせ　哲平
姑さんの味で今年も雑煮椀　かりん
この歳になって忍耐力をつけ　好
大学もベンチャー企業へ力出す　アキ
アメリカで飛ばす日本の力瘤　冬虹
ライバルに無力の私見せておく　鐘造
コンビニの餅で済ませたお元日　朋月
腕相撲夫に勝って拗ねられる　五月
武蔵丸乗せてタクシー喘いでる　玄也
正月の餅がお腹にへばり付き　さくら
念願の昔を探すローカル線　扶美代
根なし草向こう岸までロマン追う　りつえ
まだ生きる力欲しくて陽にあたる　文
搗き立てが届く今年も元気だな　小雪
元日の雑煮のだしは念入りに　深雪
雑煮餅むかし昔を噛みしめる　みつこ
口喧嘩がっぷり四ツに組みません　楓
貧乏に強い免疫力がある　俶子
突然に力逆転した親子　舞夢
力出し惜しんでツキに見放され　天笑

岸和田川柳会　長谷川呂万報

出しゃばって苦汁を飲んだ若い時　照女
新課長定年前の苦手居る　洞庵
ほろ苦い友の忠告ありがとう　路子
妻介護一年経てばやや手抜き　笑司
青春を燃やす襷のごぼう抜き　仁緑
すぐに抜く噂の歯医者避けている　東吉
駆けっこの孫に抜かれた嬉しい日　基
損得を抜きにつきあう俺お前　さよ子
アザラシも疲れて岸で寝ています　東雲
たぬき寝で孫の秘密聞いている　あい子
大物になれと寝顔をのぞき込む　みよ子
独り寝の窓に朝日が呼びかける　盛之
うたた寝でやさしくなれる元気出る　弘子
草に寝て流れる雲を見る平和　呂万
取り敢えず寝よう明日に賭けてみる　ダン吉
もう寝やとテレビ消してるお母さん　狸村
いい笑顔ばかり残して逝った夫　房枝
何となく心残りなすれ違い　珠子
笹売りの声も嗄れだす残り福　守
残っても地獄とリストラすすめられ　穣一
銅像にその名を残す犬がいる　甚一
春到来佳境に入るお水取り　洋
胃袋が入るが気になる血糖値　野添
とんぼりと入れ入れとエビとカニ　英雄
月が見る露天の風呂に老い二人　一脩
サークルに入り心身若返る　ゆり子
風水の邪魔が入った設計図　俶子
仇討の気分税還付が入る　蛙城
目が入り縁起ダルマのしたり顔　みつ江

川柳ふうもん吟社　杉本孝男報

人許すたびに筋書きまた変わり　洋々
ストーリーないからこの世面白い　圭一郎
たいした事はない公約に欺かれ　金祥
赤字消すパソコンならばキーひとつ　大鯰
今年こそ女房の裸見てやろう　蟹郎
初恋とカルピスくれた彼も老い　(澤)裕子
最初はグーそれから個々のストーリー　(山)節子
色あせぬ初恋という物語　美雪
初雪よ消して下さい罪の彩　一瑶
これからへ夢盛ってみるストーリー　一京
ストーリー先読みをするサスペンス　昌鼓
今年こそ許して暮す鳩ポッポ　茂登子
離婚劇ストーリーには無いはずだ　春名
初夢がほんとになって孫もうけ　保子
未年群れから一歩出る努力　(細)裕子
ストーリー年の始めに組立てる　孝明
ストーリーになかった病気持つ余生　志げ緒
ストーリー通りに神よ逝かせてよ　鐘馗
一寸の虫にもストーリーがある　一粋

負けて勝つ羊になろう初笑い　螢
ストーリー人間模様見えかくれ　(今)信子
祖父の人生孫に綴ったストーリー　千代子
初月給先ず神棚へ幸祈る　益子
初日の出無心に拝むもみじの手　宗明
最初から負けていましたひと目惚れ　無限
今年こそ小指の権利聞いてやる　行男
今年こそ夢を鞄に詰めて飛ぶ　はるみ
今年こそ足マメ手マメ人も呑む　のり代
ストーリーのようには行かぬ遺産分け　毅
おしゃべりを無口にさせた訃が届く　孝男

倉吉川柳会　竹信　照彦報

数々の旧い言葉が惜しまれる　ゆり子
善積んで我が確信の道を行く　(西)喜美子
おお寒い旧正月の餅を焼く　和子
千の子がそれぞれ歩む千の道　季芳
ミステリー雪のツアーに申し込む　よしえ
安楽死申し込み期限切れていた　賀寿恵
新旧を問わず知恵出しリサイクル　秋草
ササユリを庭に咲かせる趣味の道　重忠
旧姓が乱舞しているクラス会　和枝
十五夜の月うつくしい旧ごよみ　(前)喜美子
申し込みせずとも既に出来ている　泰輔
うぬぼれて申し込んだが片思い　日出子
船頭を嫁にゆずって好きな道　康子
赤恥のたびに分厚くなる面　ひろこ
牡丹雪男の赤い血がさわぐ　螢
亡き姑の言葉身に染む老いの道　京子
理不尽にまだ赤い血が立ち向かう　博丈
点ほどの赤を指したら菩薩さま　和歌子
旧に倍して面倒をかけまくる　玲坊
夕陽燃ゆ長く短い間を駆ける　克枝
神だのみ一心不乱申し込む　一夫
赤い糸もつれながらも太くなる　龍枝
エリートの子が特養に申し込む　忠良
迂回路が透けて見えるぞ答弁書　次男
手応えはあった顔赤らめている　睦子
申し込んだバイトようやく丸じるし　きみ子
窓口はどこ極楽の申請書　登美枝
結んでも難なく解ける赤い糸　悠子
核作り人道支援求む国　紀美子
旧暦がぴったりと合う農作業　照彦

翠洋会　長浜　澄子報

老いたなと思うくどくど妻の愚痴　理恵
くどくどと理屈をこねてパラサイト　富子
淋しさは柳友ひとり逝く冬ざなか　恭昌
カラオケで軍歌を歌う戦中派　正坊
還付税何に使うか春うらら　正雄
急くつもりないのに影が追って来る　昭
同窓会マドンナの手に老いの影　桃花
くどくどと化粧した甲斐ある美人　東雲
助太刀はせず見守り給う仁王像　春
助け船出す潮時を考える　澄子
老父酔うて昔の自慢まだつづく　さと美
妹がふたり急いで嫁がされ　叡子
夫の靴だけを抱えて救急車　絹子
百円を拾いそわそわするポッケ　志華子
死ぬ覚悟急にはとてもできません　日の出
バラの絵に似合う額縁買いに行く　舞夢
助っ人が無いと出来ない事が増え　伽羅
告白と始末書今は書き馴れて　孝一
くどくどと褒めて女のおつきあい　真理子
ジャンプ傘せかせか歩く浪花っ子　石舟
菜の花忌 蔵書の谷間声も出ず　会美
ゆっくりと愚痴聞いている功徳かも　千梢
セールスがくどくど話し鍋こがす　照子
救急車急いで帰ることはない　義
いい人を演じ自分がいなくなり　蛙
くどくどと言わずに核をちらつかせ　蕉子
若い日の自慢くどくど聞かされる　久峰

いずも川柳会　佐藤　治代報

アルバムにわたしのドラマ貼ってある　多喜
アルバムの真ん中辺の古戦場　芙佐子
アルバムに名前忘れた人も居る　昌枝
アルバムの中では優しい妻である　芳枝
アルバムにごろんと写った一升びん　満江
アルバムの中から風が吹いてくる　すみこ
戦争へ腕が鳴ってる人がいる　茂美
海鳴りに忘け心がシャンとする　蘭水
海鳴りにやがて男に満つるもの　多賀子
雷鳴は海のバタバタかも知れぬ　ちかし
逢いたくて鳴らしつづけているピアノ　玲子
納得がゆくまで鳴らす指パッチン　圭詩朗
ひたむきなコップの水が溢れだす　美江子

ひたむきに歩いて太れない男　紫晃
ひたむきな若い二人に春がくる　和歌子
ひたむきに私の夢が燃えている　歌子
ひたむきに生きてきれいな骨になる　久子
ひたむきに輪になる縄を綯っている　桂子
曲がること知らずに歩く僕の影　昭二
我が事は棚に上げとく村雀　多輝子
入院前の酒がそのまま棚にある　寿美
私の小さな棚に空がある　治代
やせ蛙土手の柳が高すぎる　まこと
本棚はわたしの分身だと思う　ちえ
先人の句集が棚で光ってる　きみえ
本棚に積んでも知恵が湧いてこぬ　町紅
激流に土手は妥協を許さない　淞丘
春の土手土筆母子の私語をきく　房子
花の土手春一番を知っている　文子
悲しみをひきずり土手がまだ霞む　れいじ

川柳エスポ　山本三郎報

口げんかお茶とお菓子で仲直り　みさと
老いてなお五体満足ナンマイダ　団地
励ましの強き言葉の友が居る　ゆき子
女房の強気で家がもってます　一炊
消しゴムの強気に負けた誤字脱字　れい子
ライバルに強気で挑んだ新記録　一幸
新春は子と孫が来ていま孤独　任宥
持ち株に強気弱気が交叉する　ルイ子
ドラマ見て強気の母がもらい泣き　文子
爪を研ぐ女の眉にある強気　さとし
正義感何があっても恐れない　さくら
原爆を持って北朝鮮強気なり　三峰
優しくも躾に強気母の愛　政雄
前向きで強気な自立つづけてる　はつよ
世の中は強気ばかりじゃ通らない　昭一郎
ふまれても強気で育つ秋桜　星花
後ろには味方の拍手ある強気　とし子
息子の強気生気盛んが頼もしい　高栄
夢を追う老いの強気は背が寒い　とよ子
歳老いて昔の強気角が取れ　さち子
人生は強気弱気が舵を取り　三郎

川柳クラブわたの花　吉村一風報

うまいスピーチアンコールしたくなる　ミツ子
まろやかな味閉じこめる落し蓋　君江
職安は働き盛りたたき売り　(馬)宏
知らんぷりするのも老いの生きる知恵　一風
俎板の白く乾いてせち料理　幸枝
そっと見る心閉ざした子の日記　晴美
物忘れどうもオツムが反抗期　俊子
ためらいの心振り切りする署名　恭一
友の手のぬくさへ勇気湧きおこる　奈良司
鼻べちゃと言われチビサンごて通し　友甫
誕生日元気妻いて仲間いて　正純
存命中に聴いておきたいナレーション　一道
口より早い母の拳骨愛の鞭　(本)たえこ
一年の邪気を除くか雪はらり　(赤)妙子
孫にある気迫浪人せぬという　ますみ
バイキングホテルの朝は食べ過ぎる　まさと
拳骨のすき間にあった父の愛　いつふみ
天国を一瞬仰ぐ御来光　義明
ガラス越し梅に覗かる茶屋の席　春江
古希過ぎて迫力だけが先走る　順生
初春に女四代ハイチーズ　知佐子
生活の知恵をもらった立ち話　美代子
腹すえた気迫の答えそつが無い　民
目を閉じて自分を守り貝になる　明
辞めてから誉めちぎられる貴乃花　八寿子
穏やかな笑顔の奥にある気迫　肇
不況でもやりくり上手妻の腕　(増)道子
交番へ一度も行った事がない　宏至

長柳会　加島由一報

不条理に散ったいのちの熱い私語　芳野
私を忘れた母の手がぬくい　潤子
あたたかい娘と姑の台所　マサ
ポンコツに命あずけて走ります　輝子
命継ぎ夢を紡いでまるい背　央
今生きる命に注ぐロゼワイン　一慧
遡上するいのちをかけた鮭の群れ　和代
紅にいのちを燃やす寒牡丹　三和子
親ゆずり頑固一徹吾が個性　武男
つわものが命を縣けた黒部ダム　ひろし
咲きほこる花にも個性あるらしい　良男
個性派と言われています変り者　たけし
あたたかかった母の言葉もふところも　敬二
いいように言えば彼女は個性的　もこ
あたたかい義理人情のあった人　英美

命まであげると言われうろたえる　正美
脱北へ命をかけた地獄絵図　和子
無人駅むかえる風があたたかい　冨美子
ひかえ目に生きて内助の亡母の櫛　けい子
早寝早起いのち大事にしています　正一
介護まだ受けず暮らせるいのちです　幸雄
肌の色違っていても友になる　正子
斬新な個性ですらり前衛句　直樹
命乞いするたび男の値が下がる　由一

バスツアー

西尾栞・橘高薫風句碑をめぐり
全日本川柳香川大会参加

日　時　6月14日（土）～15日（日）
日　程　14日＝大阪駅前（10時）→淡路島南→みさき荘（昼食）→白鳥町（句碑見学）→塩江温泉泊
15日＝ホテル（9時10分）→川柳大会参加（詳細は本号の裏表紙を参照）→高松→瀬戸中央→第二神明→阪神高速→大阪駅前（20時頃の予定）
費　用　二万円（予定）
一泊二食と14日昼食付
句会費は別途個人支払
募集人員　40名（先着順）
申し込み締切　4月15日
申し込み先　川柳塔事務所　**企画事業部**

「川柳たましま社」

創立45周年記念川柳大会

と　き　4月20日（日）午前10時開場
ところ　玉島信用金庫　5階大ホール
TEL 086－526－1351
＊新倉敷駅下車南口（在来線側）から無料送迎車用意（係員ご案内）
（但し新倉敷駅前発午前9時～10時30分の間）
兼題と選者（各題2句）
「恋文」　森中惠美子選（摂津市）
「青空」　小島　蘭幸選（竹原市）
「瞬間」　前田ひろえ選（玉野市）
「誤算」　東　おさむ選（岡山市）
「鎖骨」　草地　豊子選（津山市）
「愉快」　木下　草風選（岡山市）
特別席題1題「川柳たましま社」選
（出席一番目者が出題）
投句締切　11時30分・欠席投句拝辞
会費　2000円（軽食・記念品・発表誌呈）
賞　①総合10位まで賞②各選者の天位賞
③席題三才佳作賞
問合せ先　〒713－8103
倉敷市玉島乙島911－7　木口　公遊
TEL 086－526－3225
主　催　川柳たましま社
後　援　倉敷市

京都塔の会吟行

50回記念近江八幡休暇村一泊句会

日　時　5月24日（土）～25日（日）
集　合　11時　JR近江八幡駅
行　先　近江八幡国民休暇村
行　程　バス（9分）乗船場　水郷めぐり（貸切約80分）送迎バス～休暇村
1時30分頃着
句　会　2時～5時
題　券・宿る・見物・当日雑感（各3句）
食　事　昼食（船中）夕食6時　朝食8時
チェックアウト　午前10時頃（解散）
会　費　一泊15000円　当日いただきます
日帰り（夕食込み）7000円
（夕食なし）4000円
申込締切　5月10日　都倉求芽まで
〒600－8428　京都市下京区諏訪町通松原下る弁財天町328
TEL 075－351－4109
◎水郷めぐり―和船、手漕ぎにて情緒満溢
休暇村―環境清健、琵琶湖一望
皆様お誘い合わせの上多数ご参加をお願い申し上げます。
京都－近江八幡（約35分）大阪－近江八幡（約1時間）

柳界展望

□第54回三原市神明祭協賛川柳大会は、2月8日三原市民福祉会館で開催された。本社関係秀句は次のとおり

澄んだ声のサヨナラ我を貫けり　奥田みつ子

□川柳塔わかやま吟社では平成14年度四賞を決定。2月9日の句会で表彰した。

〈葵水賞〉　西出楓楽選

一位＝根田よしこ　二位＝玉井豊太　三位＝気まぐれに生きた私のラストラン　松尾和香

〈あおい賞〉奥田みつ子選

一位＝柏原優子　二位＝大声で呼んでいたのはタンポポか　桒原道夫　三位＝中井栄美子

〈たちばな賞〉宮口克子選

一位＝谷口富代　二位＝山西佳子　三位＝崎山文代

〈課題吟賞〉　桒原道夫選

一位＝上垣内利ぼん　二位＝日野愿　三位＝田中輝子

□大阪川柳人クラブは2月15日総会を開き、各賞を表彰した。（本社関係のみ）

〈作家賞〉　黒川　紫香

〈功労賞〉　田中　正坊

また、役員改選を行ない次の通り承認された。

会長・礒野いさむ　副会長・橘高薫風　幹事長・坂本晴美　以下略

□田辺聖子先生は『文芸春秋』に1月号から自伝「父母のいませし昔」を連載。題は「昔とは父母のいませし頃を云い　路郎」に因む。

□楓楽副理事長は『上方芸能』148号から10回、川柳エッセーを執筆。

□堂上泰子さん（同人・海南市）は、**泰女**と改名。

▽人事往来△

□2月8日の岸本水府句碑50周年記念並びに第54回三原市神明祭協賛川柳大会に出席のため、薫風名誉主幹・天笑主幹・みつ子副主幹・蘭幸、たもつ、楓楽副理事長は三原市行

□薫風名誉主幹は、日川協東西合同理事会に出席のため2月10日東京行

□第52回西大寺会陽川柳大会の選者として、2月23日天笑主幹は岡山市行

▽御芳志御礼△

□権代隆夫氏から、夫人の故康女さんの供養として金一封を拝受。

▼訃　報▲

■山門幸夫氏（理事・豊中市）は、2月13日急性肺炎のため逝去。加納会館で行われた葬儀には薫風名誉主幹ほか柳友多数が参列した。86歳（P106）

▽訂正とお詫び△

2月号＝P98中段21行目、特急券で→特急券**に**　P100下段29行目、嘘と思う・と→嘘と思う**が**

○**常任理事会**は103頁に掲載

新同人紹介

小島笑司（こじましょうじ）
―狸村・ダン吉・呂万推薦

伊勢八重子（いせやえこ）
―楓楽・あきら・ひかり推薦

原賢（はらまさる）
―楓楽・あきら・ひかり推薦

林昭三（はやししょうぞう）
―薫風・紫香・みつ子・澄子推薦

句会名	日時と題	会場と投句先
西宮北口 川柳会	14日(月)午後1時から 深い・人気・ぶらぶら・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒663-8202 西宮市高畑町2—82—308 西口いわ糸
高槻川柳 サークル 卯の花	17日(木)正午から 試す・留守電・うとうと・香 自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3—8—8 川島瓢云児
城北 川柳会	19日(土) **吟行** ダッシュ・精・単身・自由吟	**問い合せ先** TEL・06-6953-3225 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
岸和田 川柳会	19日(土) 正午から 温い・値切る・望む・羽織	**五風荘 岸和田城南東横** 〒596-0827 岸和田市上松町610—85 芳地狸村
川柳 ねやがわ	20日(日)午後1時半から 机・寝る・離婚・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9 高田博泉
岬川柳会	20日(日)午後1時半から 違える・どたん場 パートナー・自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	21日(月)午後1時から 気配・メルヘン・作業・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
南大阪 川柳会	23日(水)午後6時から 退陣・和・つぼ・点字	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	25日(金)午前10時から 掟・削る・気分・雑詠	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	26日(土)午後6時から 損・厳しい・やがて・今	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21 片岡湖風
はびきの 市民 川柳会	27日(日)午後1時から 英語・体操・ビタミン 「きっと」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	27日(日) **吟行**(青谷) 毛・グロッキー・春うらら	**問い合せ先** TEL・0857-26-2226 〒680-0033 鳥取市二階町3—102—2 植田一京
京都 塔の会	28日(月)午後1時から 室・望む・気流	ハートピア京都 地下鉄烏丸線丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川柳塔 みぞくち	28日(月)午後7時半から 入学・さくら・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757—3 小西雄々

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

4 月 各 地 句 会 案 内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	3日(木)午後1時から 揃う・スーツ・是非	船橋フロムワン（近鉄奈良駅西・JR奈良駅北歩10分） 〒636-0311 奈良県磯城郡田原本町八尾62—6 渡辺富子
尼　崎 いくしま	4日(金)午後1時から 新しい・褒める・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F　阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17　春城年代
富柳会	5日(土)午後1時から 知・留守・雑詠	富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10　池　森子
倉　吉 川柳会	5日(土)午後1時から 野菜・神・飲む	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 唐津支部	7日(月)午後1時半から 正・けれども・種	唐津市　栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517—13　宗　水笑
ほたる 川　柳 同好会	8日(火)午後1時から 歌・売る・せっかち	豊中市立螢池公民館 阪急・モノレール螢池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1—7—5　田辺正三郎
尼　崎 尾　浜 川柳会	8日(火)午後1時半から 船出・逢う・自由吟	尼崎市立立花公民館　尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス㊽番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5—2—47　田辺鹿太
川柳会 梨　花	19日(土)　**吟行大会**	〒680-0841 鳥取市吉方温泉4—268—205 問い合わせ　0857-23-3248　坂田和歌子
堺川柳会	12日(土)午後1時から 乗る(共選)・ひらく と・や・ま(折り句)	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市堀上緑町2—16—3　河内天笑
打　吹 川柳会	12日(土)午後1時から 薄情・ふわふわ・練る	倉吉市上灘町　上灘公民館 〒682-0924 倉吉市河原町1879　高多博丈
川柳塔 ま つ え	12日(土)午後1時半から 門・渡る・豊か	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9—23—22　三島淞丘
川柳塔 みちのく	12日(土)午後4時から 削る・会話・しかし	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5　波多野五楽庵
八尾市民 川柳会	13日(日)午後1時から 脳・馴れる・貨車・雑詠	山本コミュニティセンター内3F学習室（近鉄山本駅） 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15　宮崎シマ子
川柳塔 わかやま	13日(日)午後1時から 平日・ニュース・どうせ 「ある(動詞)」	近鉄カルチャーセンター2F　JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111—2　牛尾緑良

編集後記

☆4月から従来通り本社句会が、午後5時半からの開場となるので、間違いのないようお願いします。

☆3月号と本号12頁に掲載した6月14～15日のバスツアーに、多くの方の参加をお願いします。日川協川柳大会より、今回は栞先生・薫風名誉主幹の句碑見学が楽しみである。平成5年に除幕以来、5年後にも訪れているが、より一層句碑に風格が出ているであろうと期待している。

☆先日、テレビに直木賞作家の浅田次郎氏が出演しておられた。ご存じ〝泣かせの次郎〟と言われ、人情味あふれる作品を次々物し、今をときめく超売れっ子作家である。最近では「鉄道屋」「壬生義士伝」が映画化され、巷の話題を呼んだ。

☆氏のお話によると、作家になるまで会社に勤めたり、事業を興したりしながら執筆、賞に挑戦し続けたが、実に30回以上落選したとのこと。近頃、忙しさにかまけ、作句が挑戦より〝片付け仕事〟になりがちな自分を反省させられた。

☆他になるほどと思ったのは、書き上げた文章を全て音読すると話しておられたことである。文章にも音痴の文章があり、声に出して読むとそれがよくわかるという。

☆これは川柳にも共通していると思う。五七五をクリアしていても披講されるとぎくしゃくする、同じ音が続くなどが音痴の句と言えるだろう。それとどんな名曲でも調子外れでは論外、選と披講がいかに大切かを教えてもらった。

（ふ）

ひとこと

やよろず

伏見大社稲荷山に詣る。高さ二三三m。赤鳥居の坂を約三〇分かけて登る。元勤め先の御塚があるので、OB仲間と毎年参拝、神職のご祈祷も戴く。元気で登れたことに、一同大満足の一時である。

ここには、大小一万を越すお社があって、鳥居や祭壇が犇めき、まさに神々の団地、八百万とはこのことかなと納得してしまう。

またお名前が実にいい。熊五郎大神、文化大神、八〇大神など多様な名の神様が並び、吉岡大神というのもあって嬉しくなってくる。

人の祈りも八百万、それをそのままお名にして祀られたらしいが、その由来など想像しながら拝して回るのも楽しく、興味つきない。

さて、肝心の川柳上達も祈願したし、心は直会の席へ急ぐ……。

（吉岡　修）

○気配りの靖巳さんと陰で呼んでいた。スーツにネクタイの似合う紳士で、柳歴は浅いが、これからの川柳塔の推進力として期待されていた石原靖巳さんが幽界へ旅立ってしまわれた。

○御葬儀をすまされた後に、奥様から挨拶状が届いた。故人の意志により何もかも辞退されたのは、最後の気配りであったかもしれぬが、川柳仲間として、お見送りのできなかったことは、何とも心残りと言わざるを得ない。

○同人の訃が続いて、それから間もなく高須賀金太さんを見送ることになった。私が常任理事となった平成八年からの数年、御一緒に編集部の仕事をさせていただいた。まじめな人柄は会話にも、句にも文章にもよく表われていた。

○酒好きの金太さんの編集後記は9年2月号から11年12月号までが酒シリーズ。酒に関する蘊蓄を披露されてそのファンも多かったらしい。

○山門幸夫さんには、唐津の川柳大会に出席した折、近辺の観光スポットを案内して頂く等、大変お世話になった。

○お二人の御葬儀の日は、母の介護当番と重なってしまい、参列できなかったが心より御冥福をお祈りする次第である。

（希）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（**6月号**）　地名　　姓・雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

本社4月句会

とき　4月7日（月）午後5時半・6時半締切

ところ　アウィーナ大阪　3階　葛城

―開会時間及び会場にご注意下さい。

天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441

兼題「あいまい」　寺川弘一選

「急　ぐ」　吉川寿美選

「ひらひら」　吉村一風選

「萌える」　木本朱夏選

「笑　う」　河内天笑選

席題　1題　当日発表（各題2句以内）

会費　1000円　投句料　500円

栞忌　本社5月句会　5月6日（火）

兼題　「おまけ」「二　人」「ぶんぶん」「答　え」「跳　ぶ」

作品募集

6月号発表（4月15日締切）

川柳塔（8句）　河内天笑選

水煙抄（8句）　奥田みつ子選

愛染帖（3句）　波多野五楽庵選

茴香の花（3句）　政岡日枝子選

課題吟（3句）

「自　然」　川端柳子選

「サイズ」　北村賢子選

「けが」　徳岡本丸選

初歩教室「チャンス」（3句）　三宅保州担当

7月号

課題吟「あきらめ」「　古　」「まつわる」

初歩教室「公　園」

「川柳塔」への投句について

(1)川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。

(2)愛染帖・茴香の花・一路集（課題吟）への投句は、同人・誌友に限ります。ただし茴香の花は女性だけ、初歩教室は誌友のみとします。何れも川柳塔柳箋を使用してください。

(3)各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4)各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

夜市川柳募集

第11回「　島　」　小島蘭幸選

ハガキに3句　4月末締切

投句先　〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3

河内天笑方　堺川柳会

定価　八百円（送料84円）

半年分　五千円（送料共）

一年分　九千八百円（同）

二〇〇三年（平成十五年）四月一日発行

編集兼発行人　河内權治

印刷所　美研アート

発行所　川柳塔社

〒545-0005

大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六

ウエムラ第2ビル202号室

電話（〇六）六六九―六九一四番

振替　〇〇九八〇―五―三三三六八番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成十五年四月一日発行（毎月一日発行）

医療法人社団

湯川胃腸病院

健康保険取扱

消化器科（内科・外科）
放射線科
ホスピス

診療時間　月～金 9：00～17：00
土　9：00～13：00

電話 大阪(06) 6771－4861(代)
http://www.yukawa.or.jp

〒543-0033
大阪市天王寺区堂ケ芝2丁目10－2
JR大阪環状線桃谷駅徒歩3分

自費出版
川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9番4号
TEL（06）6372－1178

雑誌 05703－4